
激・恋姫無双～愛しい人よまた逢う日まで～

九頭龍隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

激・恋姫無双〜愛しい人よまた逢う日まで〜

【Nコード】

N54910

【作者名】

九頭龍隼人

【あらすじ】

役目を終えた天の御遣いは天に帰る。しかし彼はそれを是としなかった。今一度愛しい華琳ひとに・・・仲間たちに逢う為に、天の御遣いは刀を取る。それが華琳に繋がらないとしても、愛しき者を守るために、天の御遣いは今一度外史に舞い戻る！！

(注)：この作品は主人公が原作の主人公とはかけ離れています。おそらくは原作ブレイクなんてものでは表現できないような作品になっていると思われます。その為、ご都合主義や主人公の性格を受

け継がないのは嫌い！！という方、原作ブレイクなんて許さん！！
って方はすぐさま戻るボタンを押してください、お願いします。

(注2) 書いてるうちに若干劉備アンチになってしまいました……
劉備好きの人はごめんなさい><

プロローグ（前書き）

初めまして、九頭龍隼人です。作者は原作は無印・真ともにプレイ済みですが、紹介にも書きましたが原作は反董卓連合までしかあてになりません。それでも良いぜ！！カモンカモンって方は読み進めて下さい^^

では、どうぞ^^

プロローグ

静かな目覚めだった。俺は元々通っていた高校の、自分の席に座り、うたた寝をしている状態で目が覚めた。

「俺の役目か・・・」

そう、俺は今まで、三国志であって三国志でない世界で、天の御使いとして、曹猛？とその仲間達と、一緒に天下を目指して戦っていた。

そして、曹猛？が天下を統一した日の夜、俺、本郷一刀は役目を終え、元々いた現実世界に戻って来た。

「俺の役目は、曹猛？に天下を取らせること。それが終わった今、俺には何の用も無いってか・・・」

確かに、俺の役目は曹猛？に天下を取らせることだったのだろう。しかし、俺はもつと、みんなと一緒に平和になったあの世界で、暮らしていきたくかったし、その為の案も準備していた。

「なのに・・・こんな事って無いだろ・・・」
無意識のうちに泣いてしまっていた。

俺はあの世界を、自分の故郷のように思っていたようだ。あの世界は、俺を必要としてくれた。

人とふれあい、一緒に笑い、一緒に泣いて。この世界ではあり得ないことを俺に経験させてくれた。

そこで人を愛して、愛されて。

「まいったなあ・・・」
涙が止まらない。

「帰りたいよ、あの世界に・・・」
心の底からそう思った。

それと同時に、今はもう、あの世界には戻れないことがはっきりと解った。

「また、あの世界に戻れたら、あの時言えなかったことを・・・」

言うよ」

俺はもう、何が入っていたか解らないぼろぼろの鞆を手に、立ち上がる。

そして、胸をトンと一つ叩き、自分に気合いを入れる。

「何時になるか解らないけど、また逢おう、愛しい華琳、愛しい魏の仲間達……」

一つだけ決まった目標を胸に、俺は新しい……いや、元の世界で、あの世界に戻るための一步を踏み出した。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか・・・？この作品は作者が魏をプレイした際、こんな結末だったらいいのにな…と考えていたものに少し付け加えたものとなっております。小説を書く能力が少々欠落している作者ですが、皆様からのご意見や要望を糧として精進していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします^^

第一話 御遣いの努力（前書き）

元の世界に戻って一年半たった我らが御遣い北郷一刀君のお話です。

第一話 御遣いの努力

一年半後

「ふ……はあ！」

俺はじいちゃん相手に剣を振るっていた。

この一年半の間、強くなるために、そして、あの世界に戻るために色々と努力をしてきた。

経済、治水、機械、漢文。それに加えて警察やアイドルのことも一生涯懸命に学んだ。

そして、とても嫌だったじいちゃんとの剣の修行も、じいちゃんに土下座して教えて貰っている。

あの世界に行くまでの俺なら、何でこんな事をしなきゃいけないんだとか、こんな理不尽だとか言って剣術を習うことから逃げた。

けど、あの世界に行ってから、俺は少し変わった。

あの世界で、直接じゃなくとも、俺は人を殺している。

殺さなければ、自分が殺されたとはいえ、俺の策で、人が死んだりしたことは確かだ。

そのせいだろうか、俺には覚悟という物がどんな物なのか、解った気がする。

人を殺す覚悟なんてしたくないけど、あの世界に戻る気なら、そうゆう覚悟もしなければならぬ。

じいちゃん曰く、「良い顔をするようになったな。一年半前は腐った魚のような、現状で満足した人間の目じゃったが、今は前に進もうとする決意が見て取れる」だそうだ。

確かに俺は変わったのだろう。一年半前とは体つきも、頭脳も、全く違っている。

しかし……

「学べば学ぶほど、強くなれば強くなるほど、みんなへの道が遠

くなっている気がするよ……」

俺が学べば、あの世界に行く方法が限りなくゼロに近いと言うことが解ってきて、強くなれば強くなるほど、みんなの実力は離れていて、自分が弱いつて事が見えてくる。

「俺は、あの世界に戻ることは出来るんだろうか……」

稽古が終わった道場で、胴衣のまま大の字に寝転がり、つぶやく。この一年半で解ったことがある。

それは俺の戻る方法は、きっと華琳が俺、天の御使い北郷一刀を、本当に帰ってきて欲しいと願った時しかないんだと言うこと。

俺の役目は華琳の魏を、華琳の代で天下統一に導くこと。

なら、華琳が本当に俺を必要としてくれた時、俺はもう一度あの世界に戻れるんじゃないか。

そう思っている。

「ふ……」

けど……」

「華琳に限ってそんなことはないよなあ……」

あいつなら、我らの誇り高き王なら、「一刀は役目を果たしたのよ。だから、天の国に帰ったの。私達は、一刀の分までこの国をよくしなければいけないの」とか言って、俺を必要としないのだろう。」

「……」

あの馬鹿……と、口に出そうになる。

それを何とかこらえて、立ち上がる。

「一刀、少しよいか？」

「じいちゃん」

じいちゃんが俺の近くまで来ていた。

「お前に話がある。着替えて僕の部屋に来なさい」

じいちゃんはそう言うと、部屋に戻ってしまう。

俺はすぐに着替えて、じいちゃんの部屋に向かった。

第一話 御遣いの努力（後書き）

いかがでしたでしょうか？一刀君は元の世界に戻るためにいろいろな努力をしています。おそらく次のお話で戦闘描写が入ると思いますが、作者は戦闘描写が苦手なため、微妙なノリになるかもしれませんが、よろしくお願いします^^

次回、激・恋姫無双 第二話 修行の成果 お楽しみに^^

感想や評価を頂くと作者のやる気がうなぎ上りになります。どんどん送っちゃってくださいw

第二話 覚悟と修行（前書き）

最長です。内容的にわけわからんところもあるかもしれませんが、よろしく願います。

では、お楽しみください^^

第二話 覚悟と修行

「失礼します」

俺はじいちゃんの部屋の前で一礼し、部屋に入る。

「そこに座りなさい」

じいちゃんの前に、座布団が敷いてあり、そこに座る。

「なに、じいちゃん。稽古なら終わったはずだけど・・・」

「お前にこれを授けようと思つてのう・・・」

そう言つて、じいちゃんが手渡してきたのは、我が北郷家に伝わる日本刀「臥龍」と「伏龍」我が家の道場主に伝わっている宝刀。

「な・・・これつて・・・」

「そうじゃ、臥龍と伏龍・・・北郷家に代々伝わる宝刀じゃよ」

「けどじいちゃん、何で今これを俺に？」

「お主は何故、剣を取つた？」

「え？」

「お主は何故に剣を取つたと聞いている。あれほど剣術の修行を嫌つていたお主が」

じいちゃんは有無を言わせない調子で俺に聞いてきた。思えば、じいちゃんに前の世界のことを話したのはこれが最初で最後になつたのかもしれない。

「前にさ、俺が学校からぼろぼろになつて帰つてきたことあつたでしょ？」

「おお、そう言えばそんなこともあつたのう」

「あの時、夢かもしれないけど、俺は間違いなく三国志であつて三国志でない世界にいたんだ。そこで、守りたい人や、守りたい物、守りたい生活を見つけて、微力でも、あの世界のために力を尽くしていたんだ。けど、俺は守りたいと思つていた物や人との約束を破つてここにいる。だから、俺はあの世界に帰りたい。俺のいるべき場所は、この世界じゃなくて、つちの世界なんだ。ここまで育てて

くれた親父や、お袋には凄い感謝してるし、何時か恩返しできたらいいなと思う。けど・・・俺はどんな手を使ってでもあの世界に戻る。その為に、俺は弱いままじゃいけない。華琳の・・・誇り高き王の隣に立つためには、覚悟が・・・力が必要だって解ったんだ」俺は一回話すのを止める。何故か解らないけど、涙が出てきていた。

「じいちゃんには、俺の言ってることは信じられないかもしれないけど、これは真実で、本当の気持ちなんだ。だから・・・」

「信じないとは言っていないじゃろ」

「え・・・？」

俺は信じられないという顔でじいちゃんを見る。

「お前の目は真実を言っている目じゃ。俺は長いことお前に剣を教えていたが、お前がそのように澄み渡った目をしている時は、真実を語っておった。しかも、俺はお前の師匠じゃ。師が弟子を信じないでどうする」

じいちゃんは、さも当然という風に俺に言ってくる。そのことが嬉しくて、俺はまた、涙を流した。

「して、先ほどの質問の答えじゃが、答えは大切な人達との約束を果たすため。で、よいのかの？」

「ああ、俺はもう迷わない。みんなを守るために、俺は剣を取る。たとえその道が血塗られた修羅の道であっても、俺は進む。華琳たちの前に、胸を張って帰れるように！！」

そう俺は宣言する。宣言しておかないと、どこかで俺の決意が折れてしまうかもしれないと思ったから。

「そうか・・・」

じいちゃんは心なしに笑って、臥龍と伏龍を持って立ち上がる。

「ついてこい一刀。お前に、教えたい技がある」

それは、俺とじいちゃんの過酷な修行の始まりだった。

本郷家の裏には、鍛錬のために山があり、じいちゃんはそこに俺を連れてきた。

「一刀や、北郷の剣の基本はなんじゃ」

いきなり俺に質問をしてくる。

「北郷の剣は攻防自在。二刀を巧く操り、受けては攻撃し、攻撃しては受ける。双方がすっかり成り立つてこそ、効果を発揮する至高にして最強の剣技」

もう、修行を始めてから何回も聞かされた言葉だ。

「そうじゃ。だが、それだけでは北郷の剣は完成されない。お主は『氣』という物を知っておるか？」

氣……って風が使ってたあれか？

「うん……多分だけど、あっちの世界の知り合いで、氣を使う人を知ってる」

そう言うのと、じいちゃんは少しビククリした顔でにやっと笑う。

「ならば話は早い。よく見ておれ」

そう言うってじいちゃんは集中し始める。そして、じいちゃんの身体が光り輝く。

「な……」

「飛燕流、カマイタテ鎌鼬」

そう言うって、じいちゃんは剣をまっすぐに振り切る。

すると剣から衝撃波が飛び出し、目の前にあった大木を両断した。

「な……今は……風の……」

「ほう、見たことがあるのか。今は、飛燕流の基本、鎌鼬。刀にまとわせた氣を前方に飛ばす技じゃ」

「氣弾……みたいなものかな？」

前に風が氣弾で相手の兵を吹っ飛ばしてるのを見たことがあるけど、それと同じなのかな？

「しかし……お主の『氣』の総量はわしをはるかに超えておる……お主の『氣』総量は一般人程度だったはずなんじゃが……お主、その帰りたい世界とやらで、『氣』を使う女と親しい仲間にならなかったか？」

「え……うん、まあ、そうだけど……何でそんなことわかる

の？」

「じいちゃんはニヤリと笑って言う。」

「元々『氣』というのは、誰しもが持っている物じゃ。しかし、それは普通に日常生活を送っていると発揮されない。発揮される条件は多々あるが、一番多いのは『氣』を使う異性から愛されること一度切ってじいちゃんは続ける。」

「お主には『氣』の才は無かったはずじゃが、このように儂の使う『氣』を見ることができておる。なら、女ができたとしか考えられんじゃろ」

そう言っじいちゃんはニヤニヤと笑う。

「いや、そんなことは良いから、今の技、俺でもできるようになる？」

「もちろんじゃ。お主には才がある。しっかりと練習すれば、奥義さえも使えるようになるう」

ん・・・今、じいちゃんなんて言った？

「じいちゃん、今、奥義って言わなかった？俺の気のせいかな？」

「言ったぞ。本郷の剣は、剣術、氣を操る。そしてその最終形となりえるのが代々受け継がれてきた奥義なのじゃ。みっちり鍛錬すれば、お主でも使えるようになる」

「・・・」

正直、じいちゃんの話が本当とは思えない。けど、じいちゃんが嘘をつくような人ではないことはこの一年半で嫌って程知っている。そのじいちゃんが言うのなら、俺には奥義でさえも使うことのできる才があるんだろう。

「じいちゃん」

「なんじゃ？」

意を決し、じいちゃんに聞く。

「それを覚えたら、俺は強くなれる？」

俺は強くなりたい。何時も三羽鳥や霞、秋蘭や春蘭に守られているのは嫌だ。大きな物は守れなくて良い、自分の手の届く範囲の物

は守れるようになりたいんだ。

そんな思いを読み取ったのか、じいちゃんは力強く頷いた。

「もちろんじゃ。お主が真に力を求めるなら、儂は持てる全ての技術を、お主に伝えよう。しかし、今まで以上に辛い修行になるぞ。それでも良いのか？」

「ああ、それでも良い。俺は、みんなを守りたい。その為なら、どんな修行でもやり抜いてやる！！」

「その意気やよし。ならば教えてやろう、本郷の本当の剣を！！」
こうして、俺とじいちゃんの『氣』の練習が始まった。

「『氣』を具現化するのに一番必要なことは、『氣』を1カ所に集中させるために集中を保つことだ。幸い、お主は集中力はある方じゃし、何も心配する事はない」

「で、具体的にどうするの？」

そう聞くとじいちゃんは俺に臥龍を投げってくる。

「臥龍の刀身に自分の中にある『氣』を集中するイメージを頭に思い描くのじゃ。そして刀身に集めた『氣』を前に飛ばすイメージをしてみる」

集中って言われても・・・

俺は言われた通り、臥龍の刀身に意識を集中させる。

すると、何かわからないが、暖かい何かが身体の奥底から湧き上がってくるのを感じる。この『氣』を刀身に・・・

「なっ・・・一刀、止める！！」

じいちゃんの声が聞こえるけど、何を言ってるかわからない・・・

「一刀、聞こえてないのか！！」

聞こえてるけど、何を言っているのかわからない・・・

「仕方ない・・・飛燕流、鎧断ち！！」

首の後ろに衝撃を受け、俺は意識を手放した・・・

「う・・・ん・・・？」

「気がついたか？」

首の後ろに違和感を感じるが、それ以外には何の不自由もない。

「じいちゃん、俺はどうなったの？」

『氣』の練習をしていて、意識がなくなったところまでは覚えてるんだけど……

「お主は限界まで集中しすぎたのじゃ。集中しすぎると、意識が飛ぶ事がたまにある。今で言うトリップ状態じゃな。お主の精神が戻ってこられなくなる前に儂が気絶させたのじゃ」

そうか……俺、集中しすぎて意識が飛んでたのか……だからじいちゃんが何を言っていたのかわからなかったんだな。

「一刀、お主はこれからこの巻物に書いてある通りの練習をするのじゃ。この通りやれば、お主なら半年で北郷の剣を身につけることができるじゃろう」

そう言っただけじいちゃんは俺に古い巻物を渡してくる。

「これって……」

この巻物には『氣』の集め方や『氣』の練り方、『氣』の派生の仕方までが事細かに書いてあった。

「いいの？」

「もちろんじゃ。お主に飛燕流の奥義書、『臥龍の書』を与えよう。その中に書いてある中身を完璧に理解し、儂を超えて見せよう」

母屋に戻ろうとしたじいちゃんがふと俺の方を見る。

「それともう一つだけじゃが、『臥竜の書』の内容を完璧に自分の物にした後、我流の技も作ってみよ……お主ならできるはずじゃ……」

そう言い残し、じいちゃんは母屋に入っていく。

「……」

俺はじいちゃんの後ろ姿に礼をして、巻物を読み込んだ。

「一刀や……お主の進む道は過酷で険しいものになるじゃろう。ならばせめて、その道のりが少しでも軽くなるよう、儂はお主に教えられることを全て教えよう……」

自らの祖父が言った言葉は、
一刀の耳には届かなかった。

第二話 覚悟と修行（後書き）

はい、いかがだったでしょうか？『氣』の解釈については作者独自の物なのですつ飛ばして頂いても結構ですw

今回のお話は一刀の持つ『覚悟』と、強くなるための修行を書かせていただきました。このペースで行くと原作キャラが出てくるのはもう2、3話後になりそうです（しかも出てくるのは皆さんもよく知っているあの筋に・・・）おっと、ネタばれをしまう所でした・・・w

さて、次のお話は半年ほど時間が飛び、一刀とじいちゃんの戦いになります。初の戦闘描写となりますが、頑張つて書いていきたいと思えます。ではまた、第三話でお会いしましょう。

次回、第三話 卒業試験 お楽しみに^^

第三話 卒業試験（前書き）

初戦闘描写！！

第三話 卒業試験

半年後

「じいちゃん、行くよ!!!」

「来い、一刀!!!」

俺は日本の木刀を構えて、じいちゃんに向かって行く。

この半年間、俺は学校を休んでひたすら剣の修行に明け暮れていた。

「『臥龍の書』」に書いてあるのは俺には難しい内容ばかりで、最初の方は苦労したが一ヶ月もたつと、修練に身体が慣れ、苦ではなくなっていて、楽しくさえもある。

それと、俺には奥義についての才能があるようで、三ヶ月くらいで奥義の初歩である『夢幻』が使えるようになってから、新しい奥義を覚えるのが楽しくてやめられなくて、ついには我流の技まで開発できたんだけど、我流技の開発をじいちゃんに見られて、「ふっふっふ、鍛えがいがあるわい」と、嬉しそうに笑っていたじいちゃんをみて嫌な予感がした事だけは言っておこう。

何故今俺がじいちゃんと戦っているのかというと、この半年の間、じいちゃんが俺を見ていて、「全て覚えきつた」だからだそうだ。

この戦いは俺のじいちゃんからの卒業試験みたいなものらしい。

「行くぞ一刀、耐えて見せろよ」

じいちゃんの身体が、二メートルを超したように見える。本当に大きくなったのではなく、じいちゃんから発せられる気が、じいちゃんを大きく見せている。

「飛燕奥義ノ八、毘沙門天!」

「!」

しよっぱなから奥義かよ!

「飛燕流防ノ巻ノ九、破綻結界!」

飛燕流奥義ノ八、毘沙門天。

全身に巡る氣を刀身に集め、密度を高めた氣によって相手を両断する奥義の中でも最高ランクの威力を誇る技。

飛燕流防ノ巻ノ九、破綻結界。

『氣』と剣技が一体となった技で『氣』を纏わせた刀身で相手の攻撃を斬り、威力を抑えてから『氣』による結界を張る防ノ巻の中では奥義ランクの防御力を持つ。

今までで最高の出来を確信した破綻結界でもじいちゃんの毘沙門天の威力を完全に消すことはできず、後ろに吹き飛ばされてしまう。

「飛燕流、昇り燈籠！」

「ち！」

じいちゃんは体制の崩れた俺にさらに追撃を仕掛けてくる。

「飛燕流、雷刃！」

迫って来るじいちゃんの木刀による四連撃を何とか体を捻ったり木刀ではじいたりして躲し、けん制のための氣弾を放ち距離を置く。

「ほう、中々やるではないか一刀よ。久しぶりに身体が疼いてきたわ」

「それ病気だから、速く病院行った方が良いよ……っと！！」

喋りながらもじいちゃんに左手の剣で袈裟切りの攻撃を仕掛ける。しかし、じいちゃんは体を数？動かすだけでこれを躲して蹴りを放ってくる。

「ぐ……」

とっさに剣でガードしたけど、庭の端っこにある大木のところで飛ばされてしまう。

「相変わらず、攻撃が重いなあ……」

けど、春蘭程の重さはない。

春蘭の隣に、霞の隣に立つ為には、ここで負けるわけには行かない。

「じいちゃん、覚悟ができた……行くよ」

二刀をクロスさせ、正眼に構える。

「ふむ……良い目じゃ。さあ来い一刀、お主の覚悟、この儂に

見せてみよ！」

じいちゃんも正眼に二刀を構えて、俺がどんな攻撃をしてくるのか楽しみにしているように見える。

「飛燕流奥義ノ十……百花夢幻！」

飛燕流奥義ノ十、百花夢幻。

飛燕流の秘奥義で、自らの『氣』を乗せた花弁を相手に向かって飛ばし、高速で相手を切り刻む技。

「お主の花弁は桜の花か……儂の花弁は梅の花……世代を感じるのう……しかし、儂とてまだ負けるわけにはいかん。来い、一刀！」

「うおおおおおお！」

掛け声と共に地面を蹴る。

「我流ノ十、玄武金剛！」

「なっ！」

此処でじいちゃん独自の技だって!?

考えても仕方ない、今は只、前に向かって進むのみ！

「はあああああ！」

「ふん！」

俺の体重を乗せた木刀と『氣』で強化されたじいちゃんの木刀がガギ！つという音を立ててぶつかりあう。

「流石だね、じいちゃん……」

「一刀……お主も強くなったのう……」

ドサ……

俺とじいちゃんは同時に地面に倒れ込んだ……

俺とじいちゃんは同時に倒れて、母さんが見に来て俺達を起こすまで気絶していたらしく、母さんに「お父さんももういい年なんですから程々にしておいてください！それと一刀、貴方は学校を休んでまで何をするのかと思えば毎日毎日剣術の練習ばかり！」等の小言を気絶から復活してすぐに一時間位聞いて、ちよっと前にやっと解放されたところだ。

「まったく、ずるいよ、あんな秘奥義残しとくなんて」

「はっはは、最後まで残しておくのが秘奥義じゃろうに。そんなことより一刀」

「ん・・・なに？」

母屋から道場に向かう道の途中、じいちゃんは笑顔を浮かべながら俺に話しかけてきた。

「よくあそこまで成長したな。正直、お主に玄武金剛を破られるとは思わなんだ。儂を倒したということは、飛燕流を継ぐにふさわしい力があると言っこと・・・よって一刀、お主にこの宝刀を授けよう」

そう言っ取り出したのはあの臥龍と伏龍。飛燕流の後継者に渡される唯一無二の宝刀で、これを持つことは飛燕流の当主になったということだっ、小さいときからじいちゃんに聞かされている。

「いいの、じいちゃん？俺、もしかするとあつちの世界に行っ、もう戻ってこないかもしれないよ？」

じいちゃんは俺の目を見て、はつきりと頷いた。

「一刀や、儂は長いこと生きてきたが、自分の家族を捨ててまで他人を守ろうとする奴を見たことがない。じゃが、お主には今までの自分を捨てて新しい自分になるうとする決意があつた。ならば、儂はお主を支えてやりたい。そう思っからこそ、この二本をお主に譲るのじゃ」

じいちゃんは道場の隅にある棚から一本のベルトのような物を取り出す。

「臥龍、伏龍と共に、この剣帯もお主に譲ろう。儂が現役で戦っていた時に使っていた剣帯じゃ。一刀や、お主が進むは修羅の道じゃ。それでも、その道を進む覚悟はあるか？」

じいちゃんはきつとわかつてる。俺がもうすぐいなくなることを。だから、いきなり卒業試験なんて始めたんだ。

「もちろん。俺は行くよ、修羅の道だろっが、地獄に墮ちようっが、守りたい物を必ず守る。俺の命に代えても、この誓いは破らない」

じいちゃんは俺の目を見つめ、破顔する。

「よく言つた一刀……じゃがな、お主が追いかける道を誰もが『夢』と言つじやろう……『夢』と言つのは呪いと同じ……叶える事が出来たものはその呪いから解放されるが、叶えられなかったものは一生その呪いを身に刻んで生き続ける……」

「じいちゃん……」

じいちゃんは何を言いたいんだろうか？

「しかし、一刀……わしは『夢』こそが人間が人間として生きていくことのできる最大の理由なんじゃと思つたのじゃ……だからこそ、お主には『夢』を追つて欲しい。無論、その『夢』を叶えるためにはそれ相応の覚悟が必要なのは言つまでもないが……その点は心配してはおらん」

「じいちゃん……俺、頑張るよ。この二刀に相応しい剣士になる為にも、華琳の傍に胸を張つて入れるようになる為にも……」

じいちゃんはもう一度、俺の覚悟を試しておきたかつたんだろう。そして、『夢』の大切さを教えてくれたんだ。『夢』を追うにはそれ相応の覚悟が必要だつてことも。

「そうか……ならばここで北郷家飛燕流第十九代目当主、北郷義秀が宣言する。我が孫、北郷一刀に飛燕流第二十代目当主の座を与え、飛燕流継承者の証である臥龍、伏龍を授ける!!」

その瞬間、俺は飛燕流第二十代目当主の座についた。

第三話 卒業試験（後書き）

戦闘描写ですw

これが戦闘描写？笑わせるな！！って方もいると思いますが、そんな方は感想のところにご書いたらいいのでは？等のご意見を送って頂けると励みになります。

今回のお話で出てきた（『夢』は呪いと同じ）って言葉は、作者の大好きな某仮面ライダーから使わせていただきました。確かに、『夢』って追い続けているときは楽しいけど、諦めた途端に「あの時こうすれば良かったんじゃないか……」って思ったりもしますもんね。

さて、次のお話でやっと原作キャラが出て来ます。前話の後書きにも書きましたが、皆さん大好き？（ちなみに作者はそんなに好きではありませんw）あの絶世の美女が登場します。さてさて、どんなふうに話を混乱させてくれるんでしょうかね？w

え、それはお前次第だろって？まあ……そうですねw

こんな感じの駄目作者ですが、皆様のご期待を裏切らないように頑張っていきたいと思っていますので、どうぞよろしく願います。

それでは次回、第四話 外史の管理者でお会いしましょう。

この作品を読んでくれる方々に無上の感謝を込めて……

第四話 外史の管理者襲来〜驚愕の事実〜（前書き）

このお話は賛否両論ありそうだな……

では、お楽しみください^^

第四話 外史の管理者襲来〜驚愕の事実〜

「それじゃじいちゃん、俺はこれで休むね。また後で」

「うむ、また後でな」

じいちゃんに挨拶をして、自分の部屋に戻る。

俺の部屋によく知っている気配を感じる。最近まで相手の気配を感じる事なんて出来なかったのにな・・・けど、本当にあの二人かな・・・？

しかし・・・

「あは〜〜ん、ご主人様、久しぶり〜〜、元気だった〜〜？」

そこには仏頂面で俺を見る白髪の道士「左慈」と、「自称、絶世の美女」筋骨逞しい漢女、貂蝉の姿があった。

「やつぱり、お前か、貂蝉・・・それと左慈、お前もいるなんてさ……………」

「ふん…………俺だって、二度とお前の姿なんぞ見たくなかったさ。

けどな、お前に頼むしかない事態が発生したんだよ……………」

左慈が悔しそうな表情で話す。

「よくわからないが…………貂蝉、どうゆうことだ？」

俺は貂蝉に話を振る……………」が。

「うふふ、やつぱりご主人様は私が好みなのね〜いいわ、この私
が相手してあげる」

身体をくねくねとくねらせる貂蝉の格好に俺は寒気を覚えて左慈を見る。

すると左慈も寒気を覚えたようで、身体をぶるりと振るわせていた。

「いや、それだけはマジ勘弁」

「おい貂蝉、今はそんな冗談を言っている暇はないんだぞ、わかつてるのか!？」

「わかつてるわよ〜、久しぶりのご主人様とのふれあいを楽しんで

るんじゃないの……いいわ、本題に入りましょう」

そう言つて貂蝉は真剣な面持ちになり、話を始める。

「ご主人様が天の御使いとして魏を天下統一に導いてから、あの世界では四年の歳月がたつていて、三国による大陸全土の統治もとても順調に進んでいたわ……だけど、平和ボケしたのか、兵達だけじゃなく、将達も五胡への警戒を怠っていたの……」

「な……もしかして……」

俺の頭を嫌な予感がよぎる。

五胡は俺達が天下を統一する少し前、五胡は兵を率いて中原に侵攻してきた。

その時は対応が早く、大事には至らなかったが、追いついた時の嫌な感じ……此奴らに負けたら何も残らないという感じは長い間抜けることは無く、警戒を怠らないようにしていたはずだ。

「そう、ご主人様の思つた通り、五胡は中原に総勢三百万の大軍を率いて侵攻してきたのよ」

「さ、三百万!?!」

そんな馬鹿な!!

「俺達が天下を統一した時、五胡の兵力は精々三十万が良いところだったのに、その四年間で兵力を十倍にするなんて、五胡に何があつたんだ!?!」

「ご主人様、少し落ち着いて……確かに、『普通』の人なら、ここまで兵力を向上させるのは無理でしょう。けどご主人様、あなたなら……出来なくはないでしょ?」

「な、もしかして……?」

「そう、五胡にも、天の御使いが舞い降りたのよ。その名は護堂政近。ご主人様の通っていた聖フランシスカの現三年生……この子が五胡に天の御使いとして舞い降りた……いえ、あの外史を壊すために落とされたの」

「どうゆうことだ?あの外史を破壊しようとしたのは、左慈と干吉だけじゃなかったのか?」

「それは……」

貂蝉が答えずらそうにしていると、左慈が助け船を出した。

「北郷、確かに俺と干吉はあの外史を壊そうとした。だがな、あの外史はもはや俺達の手の届かないところまで完成している。あそこまで完成してしまつた外史を壊そうとする人物……それは一人しかいない」

「な……お前達はそれを知っているのか？」

「……」

二人は顔を見合わせ、意を決したように頷いた。

「名前はよくわからない。俺達もその存在を最近聞いた位だからな……だが、渾名は知っている」

「それは？」

「渾名は『外史の壊し屋』何の変哲もない渾名だが、この渾名が一番奴を的確に表していると俺達は思っている」

外史の壊し屋……か……

「ちなみにこいつの目的は無くなるはずだつた外史を根本的に世界から殲滅すること……こいつに破壊された外史は軽く百は超えるつて話だ」

「それで、話の続きだけど、五胡の大軍は大王劉貂に率いられて呉、魏、蜀に同時攻撃を開始。国境の警備隊から王都に五胡襲来の知らせが入つた時には、五胡は次々と城を落とし、沢山の将と、兵が戦死したわ」

「……続けてくれ」

俺は感情を押し殺し、先を促す。

「王都から各国の主力部隊が出陣した時にはもう手遅れ。王都の周りは五胡に囲まれていて、各国の主力部隊をもつてしても、勢いに乗つた五胡は止められず、各個撃破されてしまつた……言いにくいけど、曹操、劉備、孫策の三人は殺され、首を晒されたわ」

「……？」

俺は思わず座っていた椅子から立ち上がった。

そんな・・・俺が戻ろうとしていた世界が、五胡に滅ぼされた？
俺の愛するあの国が？

俺の愛する人達が？

国が滅びるのは時代の流れもあるから、少しさびしいが、それに
文句はない。

「だけど……だけど……」

「華琳が……死んだ……？」

「ええ」

貂蝉の感情のない声が部屋に響く。

あの誇り高き王が？

俺の愛した心優しき霸王が、もうこの世にいない？

「そんな……な……」

「受け入れられないかもしれないけど、それが真実なのよ、ご主人様……」

嘘だ……

そんなの、嘘に決まってる。

春蘭が、秋蘭が、霞が、凧が、真桜が、沙和が、流琉が、季衣が、
風が、稟が、桂花が……みんながそう簡単にやられるはずがない。

「貂蝉、左慈、俺に……俺に出来ることは無いのか？」

此奴らが来たって事は何か俺に出来ることがあるはず。少しの希望を胸に、二人の言葉を待つ。

「私（俺）も、ご主人様（お前）に頼みたいことがあるの（んだ）……」

同じタイミングでそう言い、貂蝉が話し始める。

「ご主人様、貴方がいた外史は、五胡の侵攻によって幕を閉じるはずだった。けど、私達はそれを良しとする事が出来なかった……
だって、ご主人様が身を呈して守った外史ですもの……だからこそ、
あの外史の欠片を『種』として確保したわ」

「種？」

聞き慣れない、しかし何時も聞いている言葉が貂蝉の口からこぼ

れる。

「そう、種。外史の発生する条件はいくつもあるけど、その最たるものは『鍵』による誕生……ご主人様のいた外史はご主人様という『鍵』によって開かれた外史。あの外史の種ならば、きっとご主人様という種で扉は開くはず……」

「なら、すぐにも扉を開いてくれ、華琳を……みんなを助けられるんだらう?」

俺の質問に貂蟬と左慈は苦い顔をする。

「ご主人様を外史に送り込むことに異論はないわ……むしろお願いしたいぐらいよ。けどねご主人様、貴方には覚悟はある?」

「なんだって?」

俺は貂蟬に聞き返した。

「貴方を送り込む外史は、貴方のいた外史と同じような世界であることは確かだわ。でも、その中で生きている人は貴方を知らないのよ……そんな中でも、貴方は自分の目的を果たす事が出来る?」

貂蟬は俺を試すような目で見ている。

「ははは……俺も……舐められたものだね……」

「え?」

「俺のことを覚えていない……それがどうした?」

そう言いきつた俺に二人は驚いた顔をして俺を見ている。

「華琳たちが俺のことを覚えていなくても、俺のするべき事は変わらない。俺は天の御使い北郷刀、全てを欲し、全てを手に入れようとする。その為に俺は力を付けたんだ……」

ここで言葉を切り、溜を作って言い放つ。

「俺が望むのは華琳たちを助けるチャンスが欲しいということだけ……それがどんなに辛い道でも、俺は進む。愛する華琳に、魏の皆にもう一度逢うために!!」

そう、これが俺の覚悟だ。

じいちゃんに覚悟を決めると言われた日、何を目標に毎日の生活を送ろうかと悩んだ。

そして辿り着いたのがこれだ。

俺が戻ったところで、華琳たちが俺を覚えているとは限らない。

（極力覚えていて欲しいけど……）それでも俺は帰りたかった。

華琳たちが俺を覚えていなくても、みんなが俺を忘れても、もう一度華琳やみんなに逢いたい、その心だけが俺を動かしていたのだと思う。

「そう……なら何も言わないわ」

「じゃあ……」

今すぐにもあの世界に戻れると思っていた俺に左慈が待ったを掛けて来る。

「少し焦りすぎだ本郷」

「左慈……」

焦って干吉に止められまくってたお前に言われたくない。

「お前を送ろうとしている外史はお前がいた外史とは違う。まずはそのことを頭に叩き込み……そして外史に行った後、何をすべきなのかを知らなければならぬ。その為には時間が必要なんだ」

「だけど……」

「焦るのもわかるし、悔しいのもわかる。けどな、悔しいのはお前だけじゃない。俺も干吉も、貂蝉も卑弥呼も、悔しいんだ。俺でさえこうして耐えているんだから、準備が整うまでの一月位、耐えて見せろ」

まさか、左慈に言われちゃうとは……

「左慈に言われるとは思わなかったよ」

「何だと……」

「でも……ありがとう。恩に着るよ」

「な……」

顔を赤くした左慈を尻目に貂蝉に話を戻してもらった。

「さあ貂蝉、時間が惜しい。俺があの世界に戻って何をすればいいのか、説明をしてくれるか？」

貂蝉は微笑んで（気持ちが悪いのは内緒だ）俺がやるべき事を教

えてくれた。

第四話 外史の管理者襲来〜驚愕の事実〜（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか……？きつと色々と批判が飛んで来るんだと思いますが、そこは持ち前のポジティブ加減で何とかするとして……

このお話で初めて一刀君以外の原作キャラクターが出て来ます。

その名も『自称絶世の美女』、貂蝉さんと無印で一刀君の命を狙い続けた白髪の猪突猛進、白兵戦最強（？）の左慈さんでした。皆さんの予想は当たったでしょうか……？w

そして次回、いよいよ一刀君が外史の世界に旅立ちます。一刀君は努力の末に得た力でその目にいったい何を映すのか……色々想像しながら次回の更新をお待ち下さいw

そしてブラスト様、誤字のご指摘ありがとうございます^^
作者は全く気付いてなかったので、これからも誤字じゃないか……
？って所はバシバシドンドン指摘しちゃってください。

それと、誤字脱字以外のご感想も送ってくれちゃったりすると作者のやる気と勇気がうなぎ上りです。痛烈な批判でもかまいませんし、もっとこうすればいいんじゃないかい？等といったご意見でもかまいません。皆様のご意見をしっかりと受け止め、更なる精進を重ねて行きたいと思しますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

では、今回はこのくらいで……w

ではまた、次回、第五話 帰還（仮）でお会いしましょうw

この作品を読んで下さっている方に無上の感謝を込めて……

第五話 帰還する御遣い（前書き）

短いですw

では、どうぞお楽しみください^^

第五話 帰還する御遣い

一ヶ月後

左慈と貂蝉が俺の部屋に現われて丁度一か月がたった。この一カ月の間にじいちゃんや左慈、貂蝉との手合わせを何回も繰り返して個人戦の戦い方を体に叩き込み、貂蝉や左慈の作りだした幻兵を相手に多数対一人の戦い方を二人に習ったりしていた。そして今日、ようやく準備が出来たようで、今は俺の部屋で向こうに行ってから俺が取るべき行動の最終確認を行っている。

「確認するわよ、ご主人様。では第一に、貴方が外史の世界に降り立った後、曹操ちゃん達を救う為にやらなければいけない事は？」
「俺の力で平原を統一すること。そうしなければ、外史はまた狙われる……だろ？」

「正解だ。では次……お前が天下を取る為に、しなければいけないことは？」

「天の御使いが降り立ったと言うことを宣伝すること。その名声を使って義勇兵を集めて黄巾族との戦で功を立てること。そうすれば朝廷から太守か何かに任命されるはずだから、その都市を発展させて天下統一を目指す……だよな？」

「正解よ。それじゃ最後、外史の世界で一人だけ、ご主人様に関する記憶を綺麗に残したままにしてあげる……誰が良いかしら？」
「え……？」

俺は驚いて貂蝉と左慈を見る。

「この一ヶ月の準備のおかげで、一人だけが記憶を残せるようになった。本当は魏の全員の記憶を残したかったんだが、それは出来なかった」

すまなさそうに左慈が俺を見ている。

「だから一人、記憶を残してあげるわ。誰が良いかしら？」

貂蝉の質問にすぐさま華琳の名を答えようとしたけど、俺の頭に

浮かんだのは弓を構えて軍を率い、華琳や春蘭の事を一番に考えてたけど、俺のことを好きだと言ってくれた水色の髪をした女性の姿が浮かぶ。

「秋蘭……」

秋蘭の姿を思い浮かべると、俺の頬を涙が伝っていた。

「どうしたの、ご主人様……いきなり涙なんか流して？」

「いや、大丈夫。ちよつと感傷に浸つてただけだからさ……」

全く、泣くのは辞めるつて決めたのにさ……

「それで、誰の記憶を残すの？」

「秋蘭の……夏候淵の憶を残しておいてくれないか？」

「「え（何）！？」」

二人とも意外そうな顔をしている。

「どうかしたのか……？もしかして、秋蘭の記憶は残せないとか？」

「いや……」

「てつきり曹操ちゃんの事を言うのかと思つてたから……ビックリしてるのよ」

「そつか……」

まあ確かに、俺もビックリしてはいるんだけどさ……

「さて、ご主人様にはこれを渡しておきましょう」

そう言つて貂蟬が取り出したのは一目で名刀とわかる業物だった。

「これは……？」

「銘は正宗。日本最高の刀鍛冶が作った名刀中の名刀。これは「貂蟬」……おつと、入手方法は言えないけど、私達の仙氣が込められているから強度も切れ味も普通の正宗とは数段違うわよ」

俺は貂蟬から正宗を受け取つて抜き放つ。

美麗な刀身を惜しみもなく俺の眼前に晒し、その刀身で俺の心を魅了する。

「うわ……こりゃあすげえ……感謝するよ貂蟬、左慈」

「気にするな、それより、挨拶は良いのか？」

「ああ、昨日のうちに済ませておいた」

出発することが決まった昨日、俺はじいちゃんに出発することと、今までの指導に対する感謝を述べてきた。

じいちゃんは「儂等の事は気にせず、お前はやりたいことをやってこい。お前が帰ってくるまで、儂は死なずに生きてるのでな」と言ってくれた。

「そうか……これから先、俺達は干渉できない。しかし、一人だけ信頼できる奴を送り込む。何かあったら、そいつを頼れ」

「お前がそこまで言うか……それで、名前は？」

「性は韓、名は当、字は義公だ。真名はあいつに教えて貰え」

「韓当ね、わかった……それじゃあ、貂蝉、始めてくれ」

「わかったわご主人様、気を付けてね」

「ああ」

そう言っただけは微笑み、臥龍と伏龍を腰のじいちゃんの剣帯に差し、正宗を手に持つ。服装は天の御使いである証、聖フランチェスカの制服。最後に今まで俺の学んだことを記したノートをリュックに入れて背負い、準備は整う。

「始めてくれ」

俺の言葉を合図に、貂蝉は鏡を取り出して俺を外資に送る為の呪文？みたいなものを唱え始める。

「それじゃ、行くわよ。鍵たる存在、その意に応じ、扉を開かん……」

光が満ち、俺を包みこんでいく。

その光の向こうから、懐かしいにおいがして、俺の心を高ぶらせる。

華琳……秋蘭……みんな……待っていてくれ。今、行くから……

今ここに、北郷一刀の第二の外史が開かれる。

第五話 帰還する御遣い（後書き）

はい、二人目のオリキャラ登場（名前のみ）ですw

前に出た護堂君は名前のみの登場となる予定ですが、韓当さんは結構重要なポジションだったりします。（さて、どんなポジションに着くのかはご想像にお任せしますw）

とりあえず、今日の更新はこれ位になりそうです。そろそろストックが切れて来そうなので、これから今まで書いたものを見直して、新たにお話を進めて行こうと思っています。

そして次回、三人目のオリキャラが登場！！その娘は一刀のどんな存在になるのか、色々想像しながら明日の更新をお待ち下さい^^

では、次回、第六話 王才を凌ぐ少女 でお会いしましょう。

この作品を読んで下さっている人に無上の感謝を込めて……

第六話 王才を凌ぐ少女（前書き）

三人目のオリキャラ登場です。さて、そのオリキャラの名前は……

ちなみに今話からSide〜といった表記を使い始めました。見にくかったら止めますので、ご報告お願いいたします。

では、お楽しみください^^

第六話 王才を凌ぐ少女

Side 北郷一刀

「ん・・・」

最初の時と同じ光に包まれて、俺は二回目の外史に降り立った。

「う~~~~ん、良い空気だ」

肺いっぱい空気を感じ込む。排気ガスで汚れていない、澄んだ空気が肺に流れ込んできているのを感じる。

「ん~~~~でもここ何処だろう？」

前に降り立った時は風の真名を呼んじゃって、趙雲さんに槍で殺されかけたからなあ……今回はそんな事は無いようにしないと……周りを見渡してみても、特に人影は見当たらない。

「よし、とりあえず身体強化でもしておくか……強ノ巻ノ一、疾風、強ノ巻ノ二、聴技、強ノ巻ノ三、豪羅」

三つ合わせると聴覚、脚力、筋力を強化してくれるこの三つの技は修行を始めた時、一番初めに教えて貰った。

「やめてください！」

「ん……？」

聴力を強化した耳に女の子の声が聞こえてくる。意識を集中して何処から発せられた声なのかを探ると、少し遠くにある森の方から女の子の声が聞こえてくる。

「何かあったのかな……？」

まあ、女性の叫び声って言ったらか何かは予想はつくけどね……そう思いながら、俺は駆けだした。

Side 北郷一刀 out

Side ????

「やめてください！」

私は襲ってきた山賊達に向かって声を張り上げた。

私としたことが……抜かりましたね……

最近この道の近くに山賊が出現するようになったと近くの村で聞いていたにもかかわらず、天の御使いに逢いたいが為に先走った結果がこれだ。

全く、ついてない……

「へへへ、ここ最近の女の旅人は珍しくてな、俺達もつまらなかつたんだ。どうだ、おとなしくついてくれば命までは獲らねえよ？」
下つ端らしき下品な男が近寄りながら言ってくる。

「私に近寄るな！！」

私は持っていた杖でその男を殴った。

「つつ、痛えじゃねえか、この女、兄貴、犯っちまってもいいですよ？」

「ああ……抵抗するなら力尽く……だろ？」

男達が少しずつ私を取り囲んでくる。

いや……こんなところで死にたくない、天の御使いを支えるために故郷を出てここまで来たのに、こんな下品な男達の手にかかるなんて……

「がはっ！」

「……え？」

私が目を開けると、男が一人倒れていて、光り輝く服を着た男性が剣を抜いて立っていた。

Side ??? out

Side 北郷一刀

くそ、間に合えよ……！

そう思いながら、必死で地面を蹴る。

俺の目の前には外套を被った女の子が二十人くらいの男に囲まれているのが見えていた。

「はああああ！」

疾風で強化した脚力で一気に男達との距離を詰め、近くにいた男に臥龍の峰で打撃を与える。

「がは！」

小さな呻き声と共に男が地面に倒れる。

「大丈夫かい……？」

襲われていた女女の子はどう見ても武將の体格をしていない。こんなか弱い女の子を大の大人が大勢で囲んでいたって事に俺の中で何が切れる。

「貴様ら……か弱い女の子を寄つてたかつて襲うなんて……許さない……全員叩き潰してやるから、覚悟しとけ！！」

そう言つて俺は敵の中突つ込んだ。

Side 北郷一刀 out

Side ????

「全員叩き潰してやるから、覚悟しとけ！！」

そう言つたのが、聞こえ、私は茫然として失いかけていた意識を取り戻した。

敵の中突つ込んでいつた男性は見たことのない剣を三本使つて敵を打ち倒していく。

「く、此奴強いぞ！みんなで囲んで攻撃しろ！！」

主犯格らしい男が叫ぶ。

その声と共に、男性を囲むように陣形を組む男達。

「この人達……只の山賊じゃない……」

統率の執れた動きは、兵士として働いていたような動きをする。

「はっ、囲んだところで、お前達みたいな外道にやられる程、俺は弱くないんだよ！」

そう言つて男性は剣を一本しまい、二本を両手に構える。

「冥土の土産に覚えときな、俺の名前とこの技の名を……俺の名前は北郷一刀、この乱世を沈めるために、天よりやってきた天の御使い。そしてこれが……俺の飛燕流だああ！！」

天の……御使い……この人が……

私が見ている目の前で、天の御使いを名乗った男性は剣を正眼に構えて、剣先を男達に向ける。

「飛燕二刀流奥義、乱獅子!!」

そう叫んで彼は駆け出す。

「うおおおおお!!」

一人、また一人と賊の男達の命が刈り取られていく。そんな彼の姿を見て、私は不謹慎にも美しいとさえ思った。彼が剣をふるう度に血飛沫が舞い、命が消える。彼の攻撃は、まるで最高の舞を踊っているかのように洗練されていて、どこか悲しい感じがして、私の心を鷲掴みにする。

「ぐっ……」

全員を倒し終わった後、膝をついた彼に私は駆け寄った。

Side ??? out

Side 北郷一刀

始めて人を斬った……その事実が、俺に重くのしかかる。

「全く……覚悟したはずだったのにな……」

昔は自分で剣を持つ事は多くなかったから、直接人を殺すことはほとんどなかった。けれど自分の策で何万という人が死んだことは知っているし、それを背負う覚悟は出来ているはずだった。

けれど……

幾ら頭に血が上っていたと言え、山賊を斬る必要があつたのだからか？元を辿れば彼らも力なき……いや、この国の腐った政治の犠牲者だ。

「うっ……」

吐き気が止まらない。助けた少女が俺を心配そうに見ていることに気付き、心配させないように大丈夫だという事を教えておく。

「大……丈夫……だか……ら……」

無理に笑って見せるが、彼女は心配そうな顔を辞めてくれない。

そして、俺の方に走って近づいてきた。

「御使い様!!」

彼女に支えられ、近くにあった小川の座れそうな石の上に腰を下ろす。

「ありがとうございます……怪我はなかったかい？」

「はい、私は御使い様のおかげで怪我所か、傷一つありません。けど……御使い様は大丈夫なのですか？お顔が真っ青です……」

彼女は俺の顔を覗き込むように見てくる。

キレイな青色の瞳をして、腰まで届く長い髪は青く、海を思わせる。

「ああ、大丈夫、初めて人を斬ったから、その性でね……」

俺は何でこの子に話をしてるんだ？

「そうだったのですか……」

「ああ、ごめんな、格好悪いとこ見せて」

そう言っただけは笑う。

「……御使い様は……私を救ったことを後悔してますか？」

「え……？」

「御使い様、貴方は今、この人達も悪者だと言っても、生きた人間……それを殺したことに罪の意識を抱いているのではないのですか？」

「な……!!」

簡単に今の心理状態を言い当てられたことに驚愕を隠せない俺。

「貴方があの人達を倒してくれなければ、私は確実に犯され、殺されていました。貴方は全部を殺したんじゃない。一人でも救えた命があるんです……それだけじゃ満足できませんか……？」

彼女の言葉に、俺は言葉を失ってしまい、しゃべることが出来なくなる。

「それでもあの人達を殺してしまったことに罪の意識を感じるのなら、あの人達の命を背負って生きて下さい。そして、この世の中を、あのようにならなくなるしか無かった人のでない世の中に変えて

下さい」

「え……？」

「貴方は私を助けてくれた時、こう言いましたよね『俺はこの乱世を沈めるためにやってきた天の御使い』だと」

「ああ……確かにそう言ったね……」

そうだった。あの時は頭に血が上っていて、良く覚えてないけど、確かにそう言ったはずだ。

「それとも、あれは嘘だったのですか？この乱世を沈めると、世界を平和にすると言うのは……嘘だったんですか？」

「いや……嘘じゃない」

俺はこの乱世を沈め、絶対に華琳たちを救う。その為にこの世界に戻って来たのだから。

「なら、しっかりとその足で立って下さい。貴方が殺した人の命を背負えないなら、私も一緒に背負います。だから……」

気がつくとも彼女も泣いていた。

ポンポン

「え……」

無意識に彼女の頭をなでていた俺の手。

抵抗がないので、そのまま頭をなでながら俺の決意を話す。

「ありがとう……君のおかげで目が覚めた。あれだけじいちゃんに大見得切つても、実際に人を斬ってみたら、自分の覚悟がどれだけ半端だったのかよくわかったよ……人を殺してしまう事に慣れることは無いと思うけど、君の言う通り、俺は背負うよ……殺した人の命重さ、そして殺された人の命の重さを。けど、君まで背負う事はないんだよ？君は俺の部下でも何でも無いんだし、その気持ちだけでも十分だからさ……」

こんな可愛い女の子を、そんな修羅の道を付き合わせる事は出来ないしね……

「いえ、私に、貴方の進む道のお手伝いをさせて下さい。私、武芸はからっきし駄目ですが、知略には自信があります。それに……」

「それに？」

「私は管路つて人の予言を信じて、天の御使いが降り立つとされる地を目指していたんです。まさか探していた人に助けられるとは思ってませんでしたけど……」

彼女は管路の占いを信じて女の子の一人旅なんて危ない事をしてまで俺を探しに来てくれたらしい。

「けど……俺の歩く道は、君が思っているよりも険しい道になると思うよ？それでも、一緒に来てくれるのかい？」

彼女は少しもためらうことなく頷いてくれる。

「わかった。それじゃ、改めて自己紹介しようか……俺は北郷一刀。天の御使い。この乱世を沈めるのが俺の役目だ。君の名前は？」

彼女は被っていた外套を取って、俺を見る。

「性は司馬、名は懿、字は仲達。貴方には、私の真名を預けたいと思うのですが……よろしいでしょうか？」

上目遣いで聞いてくる。その瞳には「断られたらどうしよう」という気持ちがありありと浮かんでいる。

そんな司馬懿を小動物みたいだなと思いつつ、俺は笑って答える。

「もちろん受け取るよ。あ、俺は特殊で真名がないんだ。一刀つて言うのが真名に当たるから、俺の事は一刀つて呼んで」

「真名がない……？天の国は変わっているのですね……私の真名は紗夜です。どうかこれから、よろしく願います、一刀様」

「紗夜……か。良い真名だね……だけど、様は付けなくてもいいよ。これから俺達は仲間なんだからさ」

「いえ、一刀様がそう言ってお下さるのは嬉しいのですが、臣下の礼ははつきりつけなければいけないと思うので……」

「どうしても？」

「どうしてもです」

頑な（かたくな）に『様』を付けること主張する紗夜を説得する

のを諦めていう。

「わかったよ……好きに呼んで良いよって言ったのは俺だし、好きに呼んでよ」

「はい、好きに呼ばせて頂きますね」

綺麗な笑顔で笑ってくれる紗夜を見て心を癒されながら、近くに
いる気配を探る。

「やつぱり……君たちか……」

近くの茂みに昔感じた気配を感じる。けど、いつまでも盗み見されるのは嫌いだ。

「一刀様？どうかありませんか？」

紗夜が心配そうにこつちを見て尋ねて来る。

「いや、大丈夫。そんなことより……」

俺は木と木の間に視線を向ける。

「そろそろ出てきたら？出てこない……斬るよ？」

『！！』

「気付かないとも思った？それなら、俺を舐めすぎてる。後五
数える前に出てこない……」

「うわっ、す、すいません！！気分を害してしまったなら謝りま
すから斬らないで！」

「愛紗が遠くから見てもようとか言うからなのだ」

「り、鈴々、お前だって賛成したじゃないか！」

木の間から出てきたのはやはり劉備、関羽、張飛の仲良し三姉妹
だった。

Side 北郷一刀 out

第六話 王才を凌ぐ少女（後書き）

はい、一刀君の初戦闘（じいちゃんや貂蟬、左慈以外）でした。

そして三人目のオリキャラは司馬懿仲達……もとい紗夜ちゃんでした。

オリキャラは出しすぎないように気をつけて行くとは思っていますが、もしかしたらまだまだ出るかもしれません。今のところ決まっているのは後四人なのですが、もしかしたらもつと増えるかも…

…w

さて、今回のお話のキーワードは『覚悟の質』です。一刀君は人を殺す覚悟がすっかりと出来ていなかった為、具合が悪くなってしまっています。しかし紗夜ちゃんのおかげで自分に何が足りないのかに気づき、一人前の剣士として、それと王の卵として歩きます。これからの一刀君の成長（精神的な面で）を温かく見守っていただければ幸いです。

さて、今回は最後に登場した桃園三姉妹の登場となります。劉備の甘い考えに成長（？）した一刀君は何を語るのか。ご期待下さいw
それとこんな駄目作者の小説のアクセス数とユニークが10、000 OPV、1500ユニークを突破していました。これも読んで下さっている皆様のおかげです。本当にありがとうございます^^

これからも皆様のご期待に応えられるような小説を目指していきますので、皆様どうかこれからもよろしくお願いいたします^^

それでは、次回、第七話 桃園の三姉妹の矛盾（仮） でお会いし

まじょう。

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて……

第七話 桃園の三姉妹 〱夢の現実〱（前書き）

とりあえず、劉備が好きな人はお気を悪くするかも……><

では、お楽しみください^^

（注：鈍也様のご指摘で桃香の真名の間違いを修正いたしました。
誠に申し訳ありません><）

第七話 桃園の三姉妹 〈夢の現実〉

Side 関羽

「そろそろ出てきたら？」

そう言われて私達はとても驚いた。

なにせ私と鈴々は気配を消していたし、桃香様に至っては武将としての存在感は薄いので、気付かれるわけがないと思っていた。

「うわっ、す、すいません。気分を害してしまって・・・」

桃香様が出て行く。

私と鈴々はその後を追って天の御使いらしき男の元に行くのだった。

Side 関羽 out

Side 北郷一刀

「それで、劉備、関羽、張飛の三人が俺に何か用か？」

『！！！！』

「ああ、悪いけど、何故名前を知っているとか聞かないでね。君たちのことは天の知識で知っているだけだから。くだらないことは聞かないように」

もう一回会ってるから、名前位知ってて当然だし。

「しかし、貴方が本当に天の御使いなのですか？とてもそうは思えないのですが・・・」

関羽が俺に向かって言うてくる。全く、失礼な奴だ。

「まあ、俺が天の御使いだろがそうでなかるうが関係ない。関係あるのは俺が何を成すか、そうだろ、劉備」

「え・・・はい、そうだと思います・・・」

「それでは、貴方をお願いしたいことが「断る」・・・え？」

関羽が呆然としてるうちに、断っておく。

「悪いが、君たちと一緒にには行けない。君たちが目指す物と、俺の目指す物は違う。だから、一緒にには行けない」

俺の目指す物は俺が武力と対話の二つを使って天下を治めること。そして劉備達の目指す天下はみんなが笑って幸せになれる世界。

この二つは絶対に相容れない。

「しかし、貴方は見過ごせるのですか！？力ない物達が何の罪もなく死んでいくこの世を！？」

関羽の俺に対する問いは愚問以外の他でもない。

「見過ごせるわけ無いだろ！！」

「！？」

俺は大声で否定する。

「俺はこの乱世を治めるために使わされた天の御使い。その俺が力ない者達のことを見捨てるとでも思ったかい？そうだとしたら君たちの人を見る目は腐ってる」

「しかし……！！「ちよつといい、愛紗ちゃん」桃香様……」

関羽の話を途中で切り、劉備が出てくる。

「私達は、この世の中のみんなが、笑って、幸せに過ごせる世界を作りたいと思っています。その為には、私達には足りない物が沢山あるんです」

「名声、それに風評、兵力……数えだしたらきりが無いな」

それは俺も一緒だけど、俺にはそれを解決するための策もある。

「そうですね、だからこそ、貴方に私達と一緒に来て欲しい。お願いです、私達に力を貸して下さい！」

そう言っつて劉備は頭を下げる。

それを見て俺は……

「悪い。それでも俺は、君たちと一緒にには行けない」
断った。

「何故です！」

関羽が俺に詰め寄ってくる。

「理由を言う前に、一つだけ聞きたい。劉備」

「なんですか？」

「君にはさ、自分の夢に他人を巻き込む覚悟はあるかい？」
前に思った事をぶつけてみる。

「え……？」

訳がわからないと言った表情で俺を見る劉備。

「君の目指す世界は、人間としては正しいと思う。けどな、その理想を実現するために、犠牲になった兵達の家族に、君はなんて声をかけるつもりだ？」

「それは……平和になつたのでこれからは笑って生きて下さい……？」

「……やっぱり君は何もわかつちやいない……」
「え!？」

当たり前だろ……

「平和になつたからと言って愛する人や家族を殺されているんだ、そう簡単に笑えるわけないだろ……俺達王になるべき人間は、そうゆう犠牲となつた兵の家族に対しても責任をもたないといけない……それを、君はわかつていない」

「でも……」

そこまで考えていなかったのだらう、言葉に詰まる劉備。その瞳は少しだけ潤んでいた。

「でもないんだよ。言い訳なんて聞きたくない。それに……」

「それに……？」

「君が追っているのはただの幻想……夢なんだよ。そして夢ってのは呪いと一緒なんだってさ。叶える事の出来た奴はその呪いから解放される事が出来るけど、叶えられなかった奴は一生その呪いを受けたまま生き続けるんだ……そしてほとんどの人間は夢を諦めてしまう。それはその『夢』ってものに現実性が無かつたからだ」

「しかし……だったら夢を追うなどでも言うのですか!？」

「それくらい自分で考えるよ関羽……自分で出せなかつた答えは

模範解答に過ぎないってことを知らないの？」

「ぐ……」

華琳ならここで答えを与えることはしない。華琳は俺の手本とする王の姿だから、俺もそれに倣う。

「何も理想を追うなと言っているんじゃない。理想を追うなら、それ相応の覚悟がいるということをおきたかった」

「なら……なら、貴方はどうするんですか？死んでいった兵達に殺した敵の兵に、そしてその家族に、なんて言うんですか？」

「なんて言うのかって……そんなことは決まってるさ」すまなかつた、俺の我儘のせいで命を落とすことになってしまつて……俺を恨んでくれてもかまわない。俺を殺してくれた方がいい。けど、それは俺がこの乱世を鎮めてからにしてほしい……」それ以外に言うことはないだろ。殺した兵の命も、死んでいった味方の兵たちの命も、その家族の命も、俺が背負う。恨まれるならそれでも良い、そして、俺は最後まで殺した奴等の分の命を背負つて、胸を張って生きる。それだけの話さ」

そう言つて紗夜を見る。

「……」

「……と、紗夜は俺を見て笑ってくれた。それだけで、何かがすつと抜けていく気がしたし、これほど同じ十字架を一緒に背負つてくれるといった少女の存在が嬉しいと思つた事は無い。」

三人は黙っている。

「あくまで、今のは俺の持論だからな。気にしなくて良い。けど、君たちの選択はこれから先、君たちに命を預ける人々の生き死にを左右するんだつて事を覚えておいて。それと……」

そう言つて俺は鞆からルーズリーの束を取り出して関羽に渡す。

「これ売つて義勇軍結成の資金にしてほしい」

「え？」

この時代、紙はまだ貴重で、結構な高値で売れる……はず。

「しかし……こんな紙を何処で……それに、良いのですか？」

関羽が聞いてくる。

「ああ、俺は協力できないし、きつと将来、お互いの誇りを賭けて戦うこともあるかもしれない。だけど今は、この国を憂う戦友だろ？ だったら資金繰り位の協力はしても良いさ」

そう言っただけ

『カー／＼／』

三人が顔を赤くして俯く。

「ん、どうかしたのか？」

「いえ、なんでもありません（のだ）」

「そう、それなら良い、それじゃ、俺はこれで・・・行こう、紗夜」

そう言っただけ俺は紗夜を促し、その場を離れようとした。けれど……

「あの……」

「ん、どうしたの？」

呼びかけられて後ろを振り返ると、三人がまだ俺を見ていた。

「最後に名前だけでも教えて貰えませんか？」

ああ、まだ名乗ってなかったっけ。

「ごめんな、まだ名乗ってすらいなかったね。俺は北郷一刀。天の御使いだ。こっちが……」

紗夜を紹介しようとして探すが、俺の後ろに隠れてしまっていた。

「どうしたんだ、紗夜？」

「私……初対面の……人は……苦手……なんです……すみません
が……一刀様から……紹介……して下さい……」

あらま。

「わかったよ紗夜。この子は司馬懿。俺の軍師だ」

「私は性は劉、名は備、字は玄德です」

「私は性は関、名は羽、字は雲長、以後、お見知りおきを」

「鈴々は性は張、名は飛、字は翼徳なのだ」

自己紹介が終わり、いよいよ俺達は旅に出ようとした。

「あの……」

「まだなにかあったのかい？」
「またしても関羽に止められた。」

「いえ……これからどうなされるおつもりなのか聞いておきたい
思っています……」

「俺か……？そうだ紗夜、これから俺達はどう動いたらいい？」
「え……？」

紗夜は目を丸くしてこちらを見てきた。

「紗夜は俺の軍師だろ？これから一切の行動を紗夜に任せる。紗
夜の好きなように俺は動こう。どうすればいい？」

「あ……あの……私の考えで良いんですか……？」

「もちろん。紗夜はもう俺の軍師なんだから、もつと自信を持っ
て。紗夜なら判断を間違えたりしないさ」
こつ言つて紗夜の後を押す。

「私は……最近出てきている黄巾族の……討伐をしていくべきだ
と……思います……黄巾族の討伐で……一刀様が活躍なされば……
名声も自然と高まるでしょうし……どうでしょうか……？」

紗夜は心配そうに俺の方を見ている。その姿がまたしても小動物
に見えてしまい、紗夜の頭に手を置いてなでる。

「流石は紗夜。俺の考えていた事とほぼ一緒だよ。それで、兵を
どうやって集めるのかな？」

「一刀様が……天の御使いだつてことを……近くの村か……町で
宣伝します……」

「なるほど……俺が天の御使いだつて事を宣伝しておけば、管路
の占いが大陸中に広がっている今なら自然と兵が集まる……つてこ
とだね？」

「はい……どうでしょうか……？」

「うん、その案で行こう。それじゃあ、荷物那点検をしておいて
そろそろ行くよ」

「はい……わかりました……」

そつ言つて近くにあった自分の荷物を持って中身を調べだす紗夜。

「それじゃ、そうゆう事だから、俺達はここで。また会おう、劉備、張飛、関羽」

「「はい」「(なのだ)」「」」

三人に別れを告げ、紗夜の案内に従って近くの村を目指し、俺達は進んでいった。

Side 北郷一刀 out

Side 三姉妹

「凄い人だったね、北郷さん……」

「ええ……事実私でも時折、あの方の放つ存在感……とでも言うような空気に、呑まれそうになりました……」

「にゃ？鈴々はあのお兄ちゃん強そうだったから一度手合わせしたいな〜って思ってただけなのだ」

「はあ……」

関羽は張飛のお気楽加減にあきれ、ため息をつく。

「北郷さんの協力を得られなかったのは痛いけど、私達は私達に出来ることをやっていこう。何時か北郷さんに、あの時一緒に行つてれば良かったって思わせられる位の……ね」

劉備は柔らかに笑う。

それにつられて、難しい顔をしていた関羽も、よくわかっていない張飛も笑顔になる。

この三人はどのような道を進むのか。それはまた別のお話……

Side 三姉妹 out

第七話 桃園の三姉妹 〈夢の現実〉（後書き）

はい、いかがだったでしょうか……？

今回のお話で一刀君は桃園の三姉妹と邂逅します。劉備の理想は作者も人間としては正しいと思います。しかし、王としての考えとするのなら甘いと言いたいような気がします（華琳さんも言っていましたよね、確かw）

まあ、理想は嫌いだけどキャラとしては好きな方（関羽のみ）なので、これから先も五話に一度くらいは登場したりしなかったり……w

そして一刀君の軍師である紗夜ちゃんの初仕事！！

しかし彼女、昔に何かあったのかあまり人と話す事は得意ではありません（一刀等、心を開いた人にもみ饒舌？になる）

彼女の過去に何があったのか、これは作中で語る予定なので……期待……！！

そして次回、一刀軍に新たな仲間が！！これもオリキャラになりますがねw

作中のキャラでは秋蘭、凧、風、思春、蒲公英、星と言ったキャラが好きなのですが、どいつもこいつも仲間になりそうにない奴ばかりでして……（汗）

まあ、荊州のキャラは仲間になると思います、はい。

ではまた、次回、一刀無双！！そして新たなる仲間 でお会いしま

しょう^^^

この作品を読んでくれた方に無上の感謝を込めて……

第八話 雷帝と龍帝（前書き）

前回予告したタイトルと違わね？って突っ込みは無しでw

では、どうぞお楽しみください^^

第八話 雷帝と龍帝

Side 天の御使い一行

「この道を上っていけば行けば、一番近い村に着くと思います…

…」

「ふうん……紗夜、もしかしてこの大陸の地図を全部覚えてたりする？」

「はい……父上の仕事柄、地図を見て過ごすことが多かったのだから……」

「どんな仕事してたんだよ……しかもその仕事を見るだけで地図覚えちゃうなんて……紗夜、恐ろしい子……」

「紗夜は凄いなあ……これは俺も負けていけないね」

「軽口を言いながら半刻位道に沿って歩いてみると、小さな村の前で、少女？が頭に黄色い布を巻いた黄巾族五十人位を相手に戦っていた。一瞬希衣かな……とも思ったけど、ここは荊州だったことに気付いたし、奮っているのが戦斧って事から違うと判断する。」

「な……!!」

「一刀様!!」

「ああ、行ってくる。紗夜、近づいてくるのはゆっくりでいいけど、何かあったらすぐに呼ぶんだよ!!」

「はい!!」

「紗夜の返事を効いたと同時に俺は走り出す。」

「疾風!!」

「氣で脚力を強化し、一気に戦っている集団に近づく。」

「一斉にかかれ〜〜〜!!」

「リーダーらしき男の大声を聞き、殺させまいと大声を出して注意を引く。」

「させるかああああ!!」

俺は敵陣の真ん中に突っ込んだ。

S i d e 天の御使い一行 o u t

S i d e ????

私は性は徐、名は晃、字は公明。河東群楊県の小さな村で生まれた只の一般人だった。

そんな私には幸いにも人を救えるだけの力があつた。私の親は貧しい中、私にいろいろな戦術書や武器を買ってくれたのが嬉しくてそれを貪るように読み、武術の鍛錬もやれるだけやった。

そして、私が何処に出てもひとかどの武将となれるだけの実力を手にした時、管路という占い師の予言が私の元に届いた。

両親は既に無くなっていたし、乱世を治めてくれる英雄の為に力を振るいたいと思つて、私は御使いが降り立つといわれている荊州、武陵に向かった。

しかしその途中、小さな村が黄巾族に襲われているのを見てしまった。

見捨てることは出来ない。見捨ててしまつたら、私は天の御使いの元で働くことは出来ない……

そう思つたからだ。

敵の数は二十人程度、私一人で何とかなる。そう思っていた。

けど、その考えは甘かつた。一人倒し損ねた男が、近くにいた仲間を呼んできたのだ。

総勢百人程度の族が、私の命を狙つて殺到してくる。

私は斬つた。

両親から貰つたこの戦斧で。

だけど……

「へっへっへ……手こずらせやがって……」

私は満身創痍で族に囲まれていた。

申し訳ありません、父上……母上……涼香は……約束を果たすこ

とは出来ないようです……

男達がどんどん近づいてくる。

「一斉にかかれ〜!!！」

私は覚悟を決め、眼をつぶる。

しかし……

覚悟していた痛みは何時になってもやってこない。

恐る恐る目を開けると、太陽の光を浴びて光り輝く衣に身を纏った男が、二本の剣を抜き、立っていた。

「天の……御使い……？」

私はそう呟く事しか出来なかった……

Side out

Side 北郷一刀

「させるかああああ!!！」

一気に突っ込んで女性の周りの敵を臥龍と伏龍で排除する。

また俺は人を殺した……だけど、俺は背負う。華琳たちのため、そして紗夜の為に、ここで倒れる訳にはいかないんだ……!!!

決意を込めた臥龍と伏龍の剣閃は、俺の氣の高まりを感じて蒼く光り輝く。

「大丈夫かい？」

一人で戦っていた勇敢な女性に声をかける。

「は、はい!!大丈夫です!!！」

まだ元気があるな……これなら行ける……!

「これから、此奴等を追い払う。君は少し休んでいてくれ」

そう言っただけは笑いかけると、

「ノノノ」

彼女は顔を赤くして、こちらを見ていた。

「大丈夫かい？」

「え……ええ、大丈夫です」

「それじゃ、少し休んでてね。すぐ終わらせるから」

「は、一人でこの人数を相手にしようってか？よく見れば、お前も良い物着てるじゃねえか。身ぐるみ、置いていつて貰うぜ」

「黙れカス共……」

何度聞いてもこの言葉には腹が立つ。

「お前等……自分が何をしたのかわかっているのか？」

「何？」

賊達は俺を何を言っているんだという目で見る。

「お前達は何もしていない、普通に生活してただけの人達を殺したんだよ。お前達は力の弱い人の財産を盗み、命さえも奪った。それがどうゆうことか、わかっているのか？」

「仕方ないだろう！奪わなければ、俺達が死ぬんだ！生きる為に何でもやる。それが普通だろう！」

リーダーらしい男が怒鳴る。

「ああ、そうだ。けどな、お前達は何か改善しようとしたか？この状況を？してないだろう。お前達は逃げたんだ。辛い道から、努力することから。そんなお前達に、努力している人を殺す権利など無いんだよ」

俺は前、華琳たちがやってきたことを見ている。華琳たちは、命を奪うことを軽く思っただけじゃなかった。だからかもしれないが、俺もそれに感化されたのだろう。だからこそ、此奴等のように努力をせず、命を軽く扱う奴等は許せなかった。

「お前等全員、地獄に送ってやる……さあ、お前等の罪を数えろ……！」

「若造が何をほざく！野郎共、やっちまえ！」

活きている賊が俺に向かってくる。数は多い。けど、一人一人は俺の敵じゃない。

俺は臥龍と伏龍を鞘に収め、正宗を抜く。

「見せてやるよ、俺の……我流技をさ……」

『氣』を自分の丹田に集めて練り上げ、イメージを形造る。

イメージするのは光の大剣。闇を照らし、道を造る光の剣……

正宗を包む光が最高潮に達したとき、俺は正宗を掛け声と共に振りおろす。

「我流技の六、雷帝灰塵撃！」

練り上げられた俺の『氣』が、賊に向かって飛んでいく。その刃を無謀にも止めようとして剣を出した男は剣と一緒に真っ二つにされる。俺の持つ広範囲攻撃技の中でも最高の威力を持つのがこの技だ。

氣弾の通る所にいた賊が何事もなかったかのように両断されていく。ある者は身体の真ん中から、ある者は頭から。そこに障害など無かったかのように雷の剣閃は賊共百人を殲滅していった。

「……せめて彼らに安らかな眠りと、来世での幸せが訪れますように……」

殺してしまった賊達の冥福と次に生れる時代は幸せな時代であることを祈る。

「一刀様、大丈夫ですか!？」

後ろの方で戦況を見つめていた紗夜が俺の方に駆けて来たのを見つ、紗夜の方に向かう。

「ああ、大丈夫だよ。そんなことより……」

俺は後ろでポカンと口を空けて、俺を見ている少女に声をかける。

「大丈夫かい? 怪我はない?」

「は……はい、だ、大丈夫です」

少女はそう言うとかかに気付いたようにバツと後ろを振り返り、村の入り口にある門がが無事なのを見て安心したのか、ぺたりと地面に座りこむ。

「だ、大丈夫ですか!？」

彼女を心配して、紗夜が彼女の傍に駆け寄る。

「え……嘘、足に力が入らない……」

彼女は驚いたようにか細い声を出している。

「安心して力が抜けたんだらうね。ほら、肩貸すから……君はあの町に住んでるのかい?」

「い、いえ、私は……その……」

彼女は言いくそくに口ごもる。

「ん、どうしたの？」

尋ねると彼女は意を決したように俺の目を見て尋ねて来る。

「貴方は……貴方様は天の御使い様……ですか？」

「うん、そうだよ」

「な、一刀様!？」

紗夜が驚いた顔で俺を見ている。

「この子は村を守るうとしていた。村を襲おうとしていた賊共になら名乗らないけど、弱いものを守るうとしていたこの子に名乗らないのは失礼でしょう？」

そう言っつて紗夜の方を見ると納得した様に頷いてくれたのを見て自己紹介を続ける。

「俺の名前は北郷一刀、この乱世を鎮めるために天の御使い。少し前にこの大地に降り立ったばかりだよ」

「やっぱり……」

「やっぱり？」

彼女は何とか俺の肩を借りずに立っつて、すつと姿勢を正し俺の方を見る。

「私は性は徐、名は晃、字は公明。天の御使いの元で働きたく、馳せ参じました。どうか私を貴方様の旗下にお加えください」

徐晃だっつて!?! 魏の大將軍にまでなつた名将じゃないか……

「いいのかい? 俺は君の思っつているような立派な君主ではないかもしれないし、天の御使いの名を使っつてこの世界に災いをばらまくかもしれないよ?」

「その時は私がこの戦斧で貴方の御命を頂戴いたします。しかし、私には御使い様は決してそのような事にはならない……そう思えるのです」

「それは何故?」

「武将としての勳……でしょうか……武将と言っつても、まだまだ

駆け出しですが、貴方様を見た瞬間に、貴方様に仕えたいと、心の底から思ったのです」

彼女の目は真剣で、一切の迷いが無い。

「ははは……合格だよ、徐晃。俺が道を踏み外したら、迷わず俺の首をその斧で叩き斬ってくれ。紗夜もだよ？」

「は！この徐公明、その任、確かに受けたまわります！」

「……わかりました……」

「でも大丈夫だよ紗夜。俺は絶対に道を踏み外したりはしない。だって踏み外しそうになった時は紗夜が元に戻してくれるんでしょ？」

「あ……」

「違う？」

「いえ……」

一刀様が道を踏み外しそうになった時は、絶対に私が元に戻して差し上げます……」

そう言っつてクスリと笑う紗夜を見て、俺は絶対にこの子を悲しませないようにするともう一度心に決める。

「あの……私の存在をお忘れではありませんかね……？」

あ……徐晃の存在忘れてた……

「あ、ああ、大丈夫。忘れてないよ……」

「本当ですか……？」

疑いの目で俺を見て来る徐晃。

「いや……本当だから。それより、俺は真名が無いから、北郷でも一刀でも好きに呼んでくれて良いよ。ほら、紗夜も自己紹介自己紹介」

「司馬仲達……一刀様の軍師……」

紗夜はそれだけと言った顔で俺の後ろに隠れてしまう。

「あの……」

「ああ、気にしないで。紗夜は人見知りしてるだけだから」

「私は徐晃です。真名は涼香」

「よろしく、涼香」

「はい!!」

こうして、頼もしい仲間がもう一人加わった。

「そういえば……」

「よう、お前が北郷一刀か？」

『な!!』

声のした方を見ると、全身を紅い鎧で包んだ偉丈夫が三人の配下のような人を連て人懐っこい笑みを浮かべて立っていた。

S i d e 北郷一刀 o u t

第八話 雷帝と龍帝（後書き）

はい、いかがだったでしょうか？

今回のお話で一刀君独自の技と韓当さんを出しました。両方今度書くキャラ紹介と技紹介で詳しく書きますが、とりあえず凄い技と人だよって事だけわかっていればオツケーですw

とりあえず次のお話で第一部である『北郷軍結成』は終了です。

明日（もう今日か……？）のお昼頃には更新できたらいいなと思っていますので、楽しみにしてくださいね^^

それでは、また次回、第九話 結成、北郷軍！ でお会いしましょう^^

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて……

第九話 結成、北郷軍！！ 第一部 完結（前書き）

このお話で第一部である『御遣い編』は終了です^^

では、どうぞお楽しみください^^

第九話 結成、北郷軍！！ 第一部 完結

「お前は……？」

臥龍と伏龍に手をかけていきなり現れてきた男に答える。

「そう警戒すんなって。俺の名前は韓義公だ。貂蝉から聞かなかつたのか？」

「お前が韓義公なのか？」

「貴様、刹那様に何という口のきき方をしているか！」

後ろにいた銀髪の女性が刀を抜いて俺に向かってくる。何か春蘭に似てるな……って刀！？

「そうかつかするな蝉那……すまん、北郷」

「いや……でもその人達は？」

「ああ、お前ら、自己紹介しておきな。これから俺達はこのサポートしなきゃいけないんだからな」

サポート……って現代語じゃないか！！

「刹那様がそう仰るのですから……」
「蝉那は何時もすぐ怒るんだから。こんなのでよく刹那様の直属になれましたね……」

「蝉名ちゃんはこの中でも武力が刹那様に次いで高いもん。私と紅蓮ちゃん二人でかかっても勝てないしね」

蝉那と呼ばれた銀髪の女性と、紅蓮と呼ばれた赤髪の少女、最後に黒髪を腰まで伸ばした女性が話す。

「いや、だからお前ら、自己紹介」

「は！！私は王双だ。刹那様の直属で、鳳凰将の称を戴いている」

「私は王異。同じく刹那様直属で、私は麒麟将です」

「僕は夏侯栄。前の三人と同じ刹那様直属で、僕は玄武将なんだ」

「俺は韓義公。真名は刹那だ。とりあえず、お前は俺の部下達をガン見するの禁止な」

「それは何故？」

「魏の種馬が俺の可愛い部下に興味を持って手でも出されたら困るからな」

茶目つけたつぷりに俺の耳元でそう言ってきた。

「な、何でアンタがそれを知ってるんだ!？」

「貴様……刹那様の真名を教わっただけでなく、刹那様をアンタ呼ばわりとは……よほど死にたいようだな……」

王双さんがどす黒いオーラを出しながら此方に歩いてくる。あ、やばい、地雷踏んだ……

「確かに、アンタ呼ばわりは許せないですねえ……紅蓮ちゃん、やっっちゃいましたよ……」

「そうですね残念……だから私は辞めた方がいいと言っただんです……こんな無礼な輩、刹那様が協力する必要性を感じません!!」

やば、三人とも怒らせちゃったみたい……この三人、相当出来るみたいだし、俺生きて紗夜達のとこに帰れるかな……

「こらこら三人とも、辞めなさいって。俺の事を思ってくれているのはわかってるからさ」

「しかし、刹那様……」

「つたく、これ以上言うんだったら三人とも、もう口きいてあげないよ?」

『う……』

「すげえ、口きかないってだけで三人を黙らせちゃった……何かデジャブ……」

「よろしい。すまん、北郷よ。で、何故俺がそれを知ってるかだっただな?」

「はい」

この世界は俺のいた世界とは違はず。なのに俺の不名誉な渾名である「種馬」を知ってる人がいるなんて……

「俺はな、貂蝉達と同じ、管理者側の人間だったんだよ。今は管理者側から抜け、こうして外史を見てまわっている。で、お前の事

は貂蝉に聞いたから知ってるっただけさ」

「そうだったんですか……無礼な口をきいて、すみませんでした」
頭を下げる。

「気にするな。で、後ろで俺を見て硬直してる嬢ちゃんはいいのかい？」

「え……」

後ろを振り向くと涼香が刹那さんを見てフリーズしていた。

「ど、どうしたんだ涼香？」

「ど、どうしたって……韓義公と言えば、配下の四聖将を率いて黄巾賊を倒してまわっているあの『紅い死神』とか、『龍帝』とかって呼ばれる韓義公ですよ！？」

何それそのめっちゃ強そうな渾名……

「あれ、そんなに有名なのか？俺達」

「有名も何も、四人で黄巾賊三万人倒す人達が有名じゃないわけないじゃないですか……」

「三万人！？」

「ああ、それはちょっと違うから」

「え？」

「正確には四万五千人だから」

「……」

人間じゃねえ……

「まあとりあえず、俺達はお前のサポートをする。つつても、直接的なサポートではなく、俺達が旅で行った所の情報を送るとか、そんなことしかないがな」

「直接協力してはくれないんですか？」

「何故刹那様がお前ごときの為にそこまでしなければいけない！」

王双さん……いちいち突っかかって来ないでください……ホント、春蘭に似てるよ……

「これはお前の物語。俺が直接介入した瞬間、外史の管理者からの攻撃を受けるが、それでもいいの？」

「いえ……情報を送っていたただけで結構です……」
面倒なことになりたくないしな……

「それじゃ、俺達はもう行くぜ。そうだ……」

彼は紗夜の方に歩いて行く。

「久しぶりだな、紗夜」

「兄様……」

「兄!？」

紗夜の兄って? 刹那さんが?

「あの時はすまなかつたな。俺が出て行ってから、お前が同級生にいじめられるとは思わなかつた……」

「いいんです、兄様。兄さんのおかげで、一刀様に仕える勇気が出たのですから……」

「そうか……」

そう言つて刹那さんは紗夜を抱きしめる。

「元気でやつてくれ。お前の身に何かがあつた時はこの笛を吹いてくれ。何処にいても、必ず飛んでくる」

「はい……」

「じゃあ、行ってくるな。愛しい妹……」

「行つてらつしやい兄様……」

「北郷……」

「は、はい!!!」

彼の声に思わず声が裏返つてしまふ。俺カツコ悪…… (涙)

「紗夜になにかあつたら……」

彼は腰の刀を抜いて俺の心臓を剣先で捕らえる。

「俺とこの雷切が、その心臓を貫き受けるから、覚悟しとけよ……」

……

「兄様、そこまでしなくても……」

「はい、命に代えてもお守りいたします!!!」

「一刀様!？」

「そうか……じゃあ、行くわ……元気でやれよ、北郷」

そう言つて去つていく彼らの背中からは、絶対強者であるという自信が見て取れる。

「それにしても……」

その背中が見えなくなると同時に、涼香が疑問を口にする。

「仲達さんが義公さんの妹だったとは……驚きです」

「血は……繋がってない……」

『はい?』

「兄様は四年程……私の家に住んでいただけ……優しく……暖かい人だから……兄様と呼ばせて貰つてる」

「そうなんですか……」

「それよりも紗夜、これからどうする?」

そう聞くと、紗夜は顎に手を当てて考え込む。

「とりあえず、村に入りましょう……恐らく、この村を救つた一刀様について行きたいという方々がいるはずですから、その人達を配下にして、義勇軍を作りましょう……いくら一刀様が天の御使いで、一騎当千の実力を持っているとしても……数の暴力には勝てませんから……」

「そうだね、それからは黄巾賊の討伐を片っ端からしていく。でいいんだよね?」

「そうです……一刀様と徐晃さんなら……出来るはずですよ」

そこまで信頼されたら答えられないわけにはいかないじゃないか……紗夜は人の使い方を知つてみたいだね。

「よし、それじゃ紗夜の策を完成させる為に頑張ろうか涼香」

「はい、頑張りましょう一刀様!」

既に俺達の元気印になつた涼香の元気な声が響く。

「二人とも、改めて聞いておくけどここから先はどんな事があったても不思議じゃない。それでも、俺についてきてくれるか?」

「私は……兄様に言った通り、貴方の天下統一を……どんな事があつても支え続けます……」

「私も、この命尽きるまで一刀様の矛となり、盾となります」

二人の決意をこの身に背負う。

「わかった……じゃあ、俺も誓うよ。君達二人にふさわしい君主になる事を。そして、この乱世を必ず鎮めることを」

後に『烈』を建国し、この中原に覇を唱えることになる北郷一刀。彼の傍には何時も献身的に一刀を支え続ける紗夜の姿と、大將軍として一刀の敵を屠り続けた涼香。そして水色の髪をした弓の名手と、朱雀が彫られた薙刀を携えた猛将がいたとされ、彼らは時には仁をもって敵に接し、時には武をもって敵を粉碎したと伝えられている。そして、彼らの原点となった地には今もこのような碑文が残され、人々の間に語り伝えられている。

「我ら三人、何時いかなる時も、互いに力を合わせこの乱世を鎮めん事を誓う！！」

Side 北郷一刀 end

第九話 結成、北郷軍！！ 第一部 完結（後書き）

はい、いかがだったでしょうか？

前書きにも書いたように、このお話で第一部は終了いたします^^

第二部に入る前に技の紹介とオリキャラの紹介を書こうと思います。

第二部では華琳や秋蘭、春蘭にスポットを当て、一刀君の軍に何人か原作キャラを登場させたいと思っています。

それではまた、次回、第十話 秋蘭の憂鬱 でお会いしましょう^^

この作品を読んでくれる方々に無上の感謝を込めて……

第十話 秋蘭との邂逅 第二部 『黄巾賊編』 開始(前書き)

キャラクター紹介とか書いてたデータ吹っ飛んじゃいました……><

とりあえず続編の投稿しますw

第十話 秋蘭との邂逅 第二部 『黄巾賊編』 開始

S i d e 夏候淵（秋蘭）

私は姓は夏候、名は淵、字は妙才、真名は秋蘭。

曹操・・・華琳様の部下で、姉者と共に華琳様を支えている。

しかし、私は一つだけ悩みがある。

それは、皆に北郷一刀の記憶が無いことと、私にだけ北郷一刀の記憶がある事だ。

華琳様に一刀の事を聞いてみても、「北郷一刀？あの義勇軍『白虎』を率いてる男の事？それがどうかしたの？」と答えるだけだし、姉者においては、「誰だ？そんな奴いたか？」と言つて、記憶の片隅にも残っていないようだった。

私は全て覚えている。一刀が魏に降り立った時の事、定軍山の戦いの時、一刀がその身を危険に晒してまで私を助けてくれた事、赤壁の戦いで見せた軍師としての才覚、三国統一を成し、華琳様の目の前で消えた事、南蛮の軍勢に、手も足も出ずに殺された事……これまで起きた事、全て覚えている。

「何故私は死んでいない？しかも、時間が戻っているようだ……」
自分の部屋で呟くのは、これで何度目だろうか。しかし、当然のことながら私の問いに答えてくれる者はいない。一刀なら……あいつなら答えてくれるかもしれない。幸い、一刀率いる義勇軍『白虎』はこの近くに拠点を構えたようだから、華琳様が使者を出す際に私が立候補しよう。

「秋蘭、ちよつと良いかしら？」

華琳様が私の部屋の前に来ていた。

「何でしょうか、華琳様」

「貴方に『白虎』を率いている北郷一刀への使者をやって貰いたいの。貴方、だいぶ北郷一刀に入れ込んでいるみたいだし……」

「な!!」

流石は華琳様、私の考えている事を見透かしてこの事を私に託してくれたのか……

「北郷が本当に我々の覇道に花を添える存在となるのならば、必ずわが軍に引き入れなさい。北郷が断つても、配下の二人、どちらかは連れて来てちょうだい。あの二人の知略と武勇は我が覇道にこそふさわしい……そうは思わない?」

「そう……ですね……では、行ってまいります」

私は愛馬、残月に乗って一刀が陣を張っている所を目指す。

「やっと逢えるな、一刀……」

私は高鳴る胸を抑えながら、一刀の元へ馬を走らせた。

Side 秋蘭 end

Side 白虎

「もう少ししたら、陳留の曹操から使者が来るから、準備しておいて」

「曹操さんですか? 結構いい政治をしているって噂ですし、軍勢も相当精強だと聞いてますから、どんな人が来るのか楽しみですね」

「誰だろうと……一刀様には……手は出させない……」

「それはもちろんですよ紗夜ちゃん。それじゃ、準備しましょうか」

「そうね……まずは歩兵を天幕に向かう道の両方に並べて……その後ろに騎兵……そこを通って天幕……これでどうかしら……?」

「うん、それにしよう。では、一刀様、私たちは準備してきますね」

「ああ、何か俺が手伝えることは無い?」

「一刀様は……そこで見ていて下さい……私達の白虎は……官軍なんかに負けないって……教えてあげますから」

紗夜が張り切ってる……

「それにしても、俺達の作った白虎がここまで大きくなるとはな……」
今の白虎の兵力は四ヶ月くらいで四万五千にも膨れ上がって。大将と言える将が五人いる大所帯になっている。

まずは紗夜。彼女は直接指示は出さないけれど、涼香がカバーして戦場を掌握している。その用兵は流石としか言えない程巧みで、白虎の精神的な柱。

そして涼香。彼女は紗夜からの指示を元に、敵陣に突っ込んで行く白虎の斬り込み隊長。彼女の姿は部下達に勇気を与え、実力以上の力を発揮させる。

後は白虎結成時に仲間になった満寵。真名は薫。彼女は正史では魏に仕えるはずだったけど、俺達の噂を聞いて仲間になってくれた。彼女は知勇兼備の名将で、紗夜、涼香の最古参のメンバーの次に兵の信頼も厚く、紗夜のいないときは軍師も務める。

最近加わってくれたのは蜀の名宰相法正。真名は哀。多少面倒臭がりな所もあるけど、本当はとても優しく熱心に働く子で、それを見せまいとしている。

そして、最近加わってくれたので驚いたのが……

「一刀、使者が来たみたいだぞ。出迎えに行かなくていいのか？」

凌統公積。呉の重鎮で、孫権を何度も救出した武勇の誉れ高き名将が、俺の配下に加わってくれた。彼女の真名は青彩。

「あ、もう来たの？」

「ああ、早く行ってやれ。紗夜と涼香が早く来ないかと待ってたぞ」

「わかった。ありがとう青彩」

「主人が部下に対して簡単に頭を下げるものじゃないぞ」

「まあ、そこがお前のいいところだが……？」

彼女の言った最後の言葉は天幕の外に出た一刀の耳には入らなかった。

「さて、誰が来るのかな……」

秋蘭かな？それとも華琳自ら？それは無いか……

入口の所から、水色の着物を着て、背筋をす……っと伸ばした女性の姿が見える。

「秋蘭……」

久しぶりに見る愛する女性の姿に、知らず知らずのうちに涙が出て来る。

「一刀？どうした？」

青彩が心配そうに俺を見ているのに気付いてあわてて涙をふく。

「大丈夫……目にゴミが入っただけだからさ」

「そうか」

彼女は人の感情の機微に敏感で、何時も俺達の心のサポートをしてくれているから、多分これが涙だって事をわかっているはだ。だけど、それをわかってて追求してこなかった彼女の優しさがあった。良かった。

「曹操様からの使者、夏侯妙才です……義勇軍白虎の主、北郷一刀殿にお会いしたい」

「ようこそ白虎へ。俺が北郷一刀です……皆、ちよつと天幕から出てくれる？」

秋蘭を連れて涼香と紗夜が入ってたのを見て、天幕の外に出て貰えないかと頼む。

「何故……ですか……？」

「危険です！曹操がどのような人物なのか判明していないのに、一刀様をその使者と二人にするなんて……」

「こら、涼香。落ち着け」

「しかし、青彩さん……」

「一刀には何か考える事があるのだろう。それに、私達は一刀の指示に従う。そうだろ？」

「……」

二人は長い事考えた後、「わかりました……」と言ってくれた。

「ありがとう、みんな・・・では妙才殿、こちらへ……」

秋蘭を連れて、天幕に入り入口のカーテンを閉める。

「久しぶり、秋蘭」

「一刀！」

秋蘭は目に涙を浮かべ、俺に抱きついて来た。

「おつと……本当に久しぶりだね、秋蘭」

「一刀……」

なかなか泣き止まない秋蘭をかたく抱きよせ、俺も涙を流す。
数分後

「落ち着いた？」

「ああ、すまない……みつともないところを見せたな……」
顔を紅くしてこちらを見る秋蘭。

「別にいいよ。で、華琳から何か命令を受けてきたんでしょ？」

「ああ。だがその前に……」

「どうして皆に俺の記憶が無いか。それと、どうして秋蘭にだけ記憶が残っていて、時間が巻き戻っているのか……でしょ？」

「……良くわかったな」

「まあ、それくらいはね……それじゃ、今から言う事をしっかり聞いていてね」

こうして俺は、この世界は外史と言う事、皆を救うためにこの世界に戻ってきた事、この世界で俺がやらなければならない事、皆の前からいなくなつてから、俺がどんな訓練を積んできたか等の事を秋蘭に全て包み隠さず話した。

「ふむ……到底信じられる話ではないが、一刀が言うのだから本当の事だろう。しかし、何故私の記憶だけ残したのだ？お前の性格からいえば、華琳様の記憶を残すものだと思うのだが……」

完璧に元の調子を取り戻した秋蘭が顎に綺麗な手と当てて聞いてくる。

「うん……恥かしいけど言わなきゃ駄目だろうね……」

「最初はそうしようと思ったんだけど、いざ貂蟬に言おうって思った時に頭に浮かんだのが秋蘭だったんだよ。で、良く考えてみたんだけど、俺は魏の仲間の中で、一番秋蘭の事が好きなんだって……」

「な…… / / / / / /」

「あ、秋蘭、顔真つ赤だよ」

「そうゆう一刀こそ、真つ赤になってるぞ……」

『ふふふ』

二人同時に笑う。

「それでは、お前の成さなければいけない事を考えると、華琳様の旗下には入れないな……」

「うん、ごめんね秋蘭。俺は今でも魏の皆を愛してるけどそれ以上に、秋蘭や華琳には死んで欲しくないんだ。だから、君達を守る為なら、俺は裏切り者と呼ばれてもいい……だから……ごめん」

「気にするな……一緒に戦えないのは残念だが、黄巾賊との戦いが終わるまでは、私達と一緒に戦ってくれないか？」

「ああ、もちろんだ。我が白虎が精鋭四万五千、曹操軍と共に戦うよ。俺がどれだけ強くなったのか、秋蘭も見たいでしょ？」

「ああ、一刀がどこまで強くなったのか、見せて貰おうか」
二人して笑いあい、くちづけを交わす。

「久しぶりだな……一刀とこうゆうことをするのは」

「そうだね……それじゃ、行こうか」

「行く……とは？」

「華琳のそこ。戻るんでしょ？それなら、挨拶もかねて俺と、凌統、満寵、法正の彼女達を連れて行くよ」

「徐晃達は良いのか？」

「涼香達には残って此処の管理をしてもらわないと。あの二人が最古参だから、あの二人の言う事はちゃんと聞くだろうし、これを機会に三人には経験を積みさせてあげたいからね……華琳の覇気を受けてみれば、絶対に成長するでしょ」

華琳の覇気、風格。全てが皆を成長させてくれるはずだ。

「配下の成長の為に、昔の主人でもあり、関係をもった華琳様をも使うのか……一刀、お前も成長したみたいだな」

「まあこれを成長って言うのかはわからないけどね。けど、何時までもあの頃の俺ではいられないからさ。今は他の皆の命も預かってる訳だし、嫌でも成長するよ」

「そうだな……今のこの乱世、華琳様の下にいた時のままではお前を慕ってくれる部下達を守れないからな」

秋蘭は穏やかな笑みを浮かべて、俺を見ていた。

「なかなか厳しい事を言うね秋蘭。けど、確かにあの頃の俺は華琳や秋蘭、春蘭に守られてばかりだったからね。とりあえず、そろそろ華琳の所に行こうか。何時までも待たせるのも悪いし、黄巾賊の討伐もさっさと終わらせないとね」

「ああ、そうだな。恐らくはまた天和達は華琳様が保護することになるだろうが……」

「わかってるよ。今の俺達に必要なのは名声だから、天和達は華琳に譲る。それでいいかな？」

「すまないな、一刀。では、行こうか」

「ちよっと待ってね、青彩、薫、哀……」

呼びかけると、紗夜と涼香を含めた五人全員が天幕に入ってきた。

「呼んだか、一刀？」

「うん、これから曹操の所に行くから、三人とも準備して。紗夜と涼香にはここの守備を任せる。曹操の所から帰ってきたら、黄巾賊本隊との戦いだと思うからしっかりと準備しておいて」

「は……」

「それじゃ、行こうか皆」

天幕が出る。俺の頭上に広がっている空は何処までも澄んでいて、白虎の新たな門出を祝ってくれているようだった。

第十話 秋蘭との邂逅 第二部 『黄巾賊編』 開始（後書き）

やっちまたよ……w

今更気付いたけど、秋蘭って一刀の事『一刀』って呼んだの一回だけじゃないですかね……？

まあ、四年たって秋蘭の心にも色々変化があったって事にしといてください。あ、気に触ったら言って下さい。直しますので……w

今回のお話は題名通り、秋蘭さんメインになります。オリキャラも一人を除いて全員登場しましたし、これからやっつとストーリーが進んでいきます。一刀君は君主となったその瞳で何を見るのか。そして彼と彼の仲間たちはどうやって中原を統一するのか。楽しみにしていてくださいね^^

それではまた次回、第十一話 春蘭との戦い、霸王との再会 でお会いしましょう

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて……

第十一話 VS春蘭！華琳との再会（前書き）

では、お楽しみください^^

第十一話 VS春蘭！！華琳との再会

陣を張っている所から二里程行くと、華琳の治める陳留が見えてくる。

「一刀、あそこだ」

「わかってるよ。今まで何度も見た城門だからさ」

「だろうな……」

親しそつに話す俺達を見て青彩が質問をしてくる。

「なあ一刀、お前夏候淵と知り合いだったのか？」

「うん、まあね。白虎結成する前に何度か賊退治を手伝った事があるんだ」

「へ……御館様って白虎結成前にもそうやって人助けやったんだ」

「哀……起きてたんだ……何時も寝てるかへたれてるかだから時々きり今も寝てると思ったよ……」

哀の愛称はリラック。

「流石に馬に乗ってる途中で寝たりはしない……とは言い切れないのが悔しい」

「哀さんは何時も眠そうですからねえ」

「そう言う薫も結構うとうとしてたよね」

「な、一刀様……」

「嘘嘘、冗談冗談」

「むっ……」

これから他者の本拠地に乗り込む時にピリピリした空気はここには無い。あるのは仲間たちとの和やかな過ごしやすい空気だけだ。

「どう、秋蘭。結構いい子達でしょ」

後ろの三人に聞こえないように小声で秋蘭に聞く。

「そうだな……徐晃に司馬懿もそうだが、法正、満龍、凌統の三人も一刀の配下で無かったら華琳様の元で働いて貰い位だ」

「あげないよ！絶対。いくら華琳のためとはいえ、この子達は絶対に渡さない。白虎結成した時に誓ったからね。この中から誰も欠けることなくこの乱世を乗り切るって」

「お前らしいな一刀。わかった、華琳様には五人とも北郷に忠誠を誓っており、残念ながら仕官は無理でしたと言っておくよ」

「ありがとう秋蘭。あ、門が見えてきたね。皆、曹操に舐められないように気を引き締めて」

『は！！』

気合を入れなおした所で城門の前に立っているアホ毛の立派な猪武者を発見する。

「ねえ……あの威風堂々と立ってらっしやるあの將軍ってもしかなくても春蘭だよ……」

「ああ……姉者だ……あんなところで何をしているんだ？」

秋蘭を見つけた春蘭が七星餓狼を抜いて俺の方に迫ってくる。

『な！！』

俺めがけて振りおろされた七星餓狼をギリギリでよけて距離を取る。

「いきなり何をするんだ姉者！」

「秋蘭どけていろ！こいつは華琳様を暗殺しに来た義勇軍の北郷とか言う奴だろ！！」

「一刀はそんなことはしない！！」

「御館様を呼びつけておいてこのように命を狙うとは……曹操も底が知れますね……」

「一刀様、私達の後ろに！！早く！！」

青彩、哀、薫の順に俺を心配してくれる。

「大丈夫だよ三人とも……さて、夏侯惇殿、何故俺を襲って来たのですか？」

「煩い！！お前が華琳様を殺しに来ると桂花が言っていたんだ！」

『はあ~~~~』

俺と秋蘭は同時に溜息をついてしまう。男嫌いなのは知ってるけど、華琳が呼んだ人間に対してもそうなのはちよつと痛くないか？

「やはり桂花の仕業か……」

「あの王才……一刀様の命を狙うとは……許せませんね」

「薫、別にいいから……さて……」

「北郷、お前など華琳様のお手を煩わせる事もない。この夏候元讓がお前をここで叩き切つてやる……」

春蘭の七星餓狼が俺に向かってくる。

「一刀……」

「だ……いじょうぶつと……凧げ、懺月……」

臥龍を抜き、剣先で円を描く。するとそこに円の形をした『氣』の盾が現れる。

「懺月……こいつを壊そうとするのは月に向かって唾を吐くのと同じ事……懺月の前ではどんな攻撃も無力」

まあ、じいちゃんみたく一斉に何個も攻撃してきたら無理だけど、単純な単体攻撃なら懺月だけで十分しのげる。

それにこの世界は氣の巡りが良くなるから、前の世界にいた時よりも技の強度が上がっている気がするんだよね……

「ぐぬぬぬぬ、剣がこれから先に進まんだと……」

「無駄だよ、力を入れれば力を入れるほど、懺月は強度を増して行く……俺の使う飛燕流の中で最高の防御力を誇る技だからね」

「一刀、お前そんな技も使えるのか……」

「まあね。多分青彩も使えると思うよ。君達の氣量は俺より少し少ないだけだからね」

話をしている間も、春蘭は懺月と戦っている。

「……そろそろ終わりにしようか。穿て、新月」

「な……」

懺月が明るく輝き、春蘭を吹き飛ばす。

「新月……懺月と表裏一体となる技で、懺月が吸収した力を、新月は撥ね返すんだ。だから言ったでしょ？攻撃すればするほど強度

が増すって」

「ぐう……何のこれしき、華琳様の為に負けるわけにはいかんだー!!」

「だから姉者、北郷は華琳様が呼んだのであって……」

「秋蘭も黙って見ている!!」

「仕方ないなあ……少し相手してあげるよ、秋蘭、哀、青彩、薫、下がってて」

「何をなさるおつもりですか？」

「良く見といてね薫。今の君の戦い方には一番足りない物を見せてあげるから」

臥竜と伏龍を抜き、正宗を戻す。

「さあ、夏侯元讓、お前の力、この天の御使いに届くかな？」

「ほざくな!!うおおおおお!!」

春蘭お得意の大上段からの袈裟切り。これほどわかりやすい攻撃は無い。

「飛燕二刀流奥義ノ式……月下残光閃」

七星餓狼を臥龍で円を描くように絡め捕り、頭上に飛ばす。

『な!!』

剣に目を向けているうちに俺は春蘭の後ろに回り込み伏龍で首先に刀を突き付けた。

「これでお前は一度死んだ。どうする?まだやるかい？」

「私が……、負けた……?」

項垂れる春蘭を見て流石に心が痛んだのか、秋蘭がこちらにやって来る。

「一刀、もう止めてやってくれないか?姉者も十分に懲りただろうし……」

「うん、わかってるよ……夏侯惇將軍、立てるかい？」

「ああ……大丈夫だ……」

少しよろめきながらも春蘭は立ち上がる。

「良かった。じゃあ、曹操の所に行こうか」

「その必要はないわ」

『!』

後ろに懐かしい気配を感じる。この覇気、この存在感、全てが懐かしい。

「曹孟徳殿であらせられるか？」

「青彩……どうかしたの？」

俺が華琳に声をかけるよりも早く、青彩が声を発する。

「そうよ。私が曹孟徳。あなたは？」

「私は凌公積。天の御使い北郷一刀様の元で騎兵を率いさせて頂いております。曹孟徳殿に一つ問いたい」

「あら、何かしら？私の部下になるというなら大歓迎だけど？」

「ふざけるな!!! 一刀を襲っておいて、何を白々しくしているんだ!!!」

「ちよつと青彩、止めなつて」

「いくら一刀の命令だからと言ってもこれだけは聞けない!!! 貴様自身が一刀を呼んでおきながら部下に襲わせるとは!!! 霸王を指すだと？笑わせてくれる!!!」

「秋蘭、何があつたの？私は北郷を襲えとは命じてないのだけど？」

「それが……」

秋蘭説明中、秋蘭説明中

「春蘭……」

「は、はい!!!」

華琳の発する静かな怒りのオーラに春蘭が少し裏返った返事をする。

「貴方、お仕置が必要の様ね……明日から三日間、体を動かすのは禁止します。それで三日間、貴方には兵法書の模写をやって貰うわ。いいわね!!!」

「は、はい!!!」

流石は華琳。春蘭をこんなに早く黙らせるなんて。

「凌統と言ったわね。私の部下が軽率な行動をとってしまった事、素直に謝るわ。ごめんなさいね……」

「ふん、部下の躰がなつて無い君主など、すぐに滅びるのがおちだ。気を付けるんだな」

そう言つと青彩は薫達の所に戻つてしまつ。

「すまん、青彩もあれで悪気があるわけじゃないんだ。ただ、素直じゃないつて言うか……」

「聞こえてるぞ一刀!!」
地獄耳なんだね、青彩。

「それで、春蘭をやつたのは貴方なの？」

「見てたんなら解るでしょ。俺だよ」

「そう……貴方、私の所に来ない？」

「……ごめん、それは無理だ。俺が目指すものと、君の目指す物は違うから……けどその代わり、黄巾賊の討伐が終わるまで、俺達は曹操軍に協力しよう。白虎の精鋭四万五千の兵と俺達の力、見せてあげるよ」

「そう……それはありがたいけど、私達の足を引つ張らないようにね」

「それはこつちに台詞だよ」

本当は足を引つ張るなんて思つてもいないけどさ、こつ言つておかないと皆の士気が下がるし。

そう言つと華琳は面白そうに笑う。

「あはははは、この曹孟徳に対してたいした度胸じゃない……気に入つたわ。私の真名は華琳よ。貴方は私の良い好敵手になりそうね」

本当は君を支えていたんだけどね。

「こちらこそ、俺に真名は無いから北郷か一刀つて呼んでくれ……それじゃあ、俺達はこれで。黄巾賊討伐の打ち合わせについては、四日後に俺達が陣を張っている所でしょうか。あそこなら黄巾賊に襲われる心配もなさそうだし……」

「ええ、それでいいわ。それでは、連絡を取る為に秋蘭を明日貴方の陣に派遣することにしましょう。この子は私の可愛い部下だから、何かあったらただじゃ済まさないわよ」

流石にこの提案には驚いた。けど、秋蘭が俺達の所にいてくれるなら結構楽になる。連絡的な意味でも、精神的な意味でも。

「大丈夫だつて。それじゃあ秋蘭、また明日ね」

「ああ……すまなかつたな、一刀……」

「もう気にしてないから大丈夫だつて……それじゃ、帰るよ三人とも」

『は!!』

三人を連れて陣に戻る。

これから、楽しくなって来そうだ……

第十一話 VS春蘭！！華琳との再会（後書き）

もう少し続けるか迷ったのですが、タイトルを変えたいのでここで切りますw

一日一話ずつの更新になると思いますが、よろしくお願ひします^
^

第十二話 白虎三人衆の想い（前書き）

白虎結成後に仲間になった子達はなぜ一刀についていつているのか。というお話です。

では、お楽しみください^^

第十二話 白虎三人衆の想い

現在、俺達は陳留から白虎が陣を張っているところに帰っている途中だ。

とても久しぶりに見た華琳は何も変わっていないなくて嬉しかった。あの小さな体から出る覇気、全てを見通す眼……どれも俺がいたときと変わっていない。春蘭も変わっていないみたいで良かった……のか？

「あの性格を治せば天下無双の將軍にもなれるんだろうけどな……」

「確かに夏侯惇は武の方は中々やるようだが……それより一刀、お前と夏侯淵の関係は何なんだ？真名も呼んでいた様だし、とても少し世話になっただけとは思えないんだが……」

珍しく青彩が訊いて来たから教えてもいいんだけど……
「それは私も知りたいですね」御館様が白虎結成前に何をしてたのかは全く知りませんし」

「一刀様の事なら悪い事はしてないとは思いますが……ま、まさかあの夏侯淵さんを無理やり……!!」

「うん、薫の中で俺はどんなふうに見られてるかよくわかったよ」
全く、薫は風とちよつと似てるよね。何でもそつち方面に持って行っっちゃうとことか。

「いや、冗談ですよ、冗談」

「薫の冗談は冗談に聞こえないんだが……」
うん、俺もそう思うよ青彩。

「失礼ですね」私だつてちゃんと通用する冗談を考えてますよ」
いや、考えること違うからね薫さん。

「御館様」それで、夏侯淵さんとの関係は？」

「話せば長くなるから掻い摘んで話すけど、秋蘭は俺がこの大地に降り立つ前に世話になった人に似てて、彼女が色々危なくなつた

時に助けたって訳」

嘘は言っていないよ？普通にこの世界の前の世界の記憶が残ってるって言っても信じてくれないだろうしね。

「へ〜流石は御館様だね〜天の世界で御世話になった人に似てるだけで助けちゃうなんて。それとも夏候淵さんが美人さんだから助けたんですか〜？」

「いや、違うからね。天で好きだった人でもあるんだよ。秋蘭に似てる人はさ」

これも嘘じゃない。真実はちょっと違うけどさ。白虎の皆には嘘はなるべくいつきたくないから、真実とはちょっと違う事を言う事にしてる。

「むむむ……これは巨大な敵の出現ですね……哀ちゃん、どうしましようか……青彩さんも一緒に考えて下さいよ〜」

「何故哀だけでなく私にまで話を振ってくる……」

「え、だって青彩さん一刀様の事大好きでしょ？」

「え、そうなの!？」

青彩を見ると少し顔を紅くしている。

「だってそうじゃないですか〜一刀様が攻撃されたってだけであんなに怒ったあげく、曹操さんに啖呵まで切ったんですから。あれで一刀様に好意を抱いてないなんて嘘はだめですよ〜」

「うう……」

顔を真っ赤にして俯く青彩。

何この子可愛い……何時も凜として格好良い印象のある青彩が顔を真っ赤にして俯いてるのってなんかこう……そそる。

「仕方ないだろう……一刀は私達の御旗であり、恩人なんだ。一刀がいなかったら私達は今何処で何をしていたのかわからない。それだけならまだしも、一刀は優しい。私のような武骨者を受け入れてくれて、しかも信頼してくれている。これで一刀を好きになるなんて無理に決まってるだろ……」

「まあ確かに、一刀様は誰にでも優しいですしね〜新参の私達に

兵を預けてくれたり普通にも声をかけてくれたり。だから私は一刀様の事が好きなんですよ〜」

「青彩……薫……」

「わ、私もっ！御館様の事がす……す、好き！ですよ？」

「哀まで……ありがとう。こんな俺に君たちみたいな美人に好かれる資格があるのかどうかわからないけど、俺も皆の事を家族だと思ってるし、好きだよ。けど……」

確かにこの子達は本当に良い子だ。美人だし、有能。非の打ちどころがない。こんな子たちに俺が好かれる資格があるのか？

「一刀様は色々と一人で抱え込みすぎですね〜私達は一刀様が私達を傷付けない為に夜遅くまで一人で鍛錬してらっしゃることも、本当なら私達がやらないといけない兵の訓練も私達に休みを下さる為にご自分でやってらっしゃる事も全部知ってるんですよ〜」

薫が私を馬鹿にしないでください〜と薄い胸を張る。

「む、今何か失礼なことと思いませんでした？」

「いや、何でもないよ？」

薫は容姿についての悪口に対する勘はもの凄い良いんだよね……

「ああ、それは私達だけではなく、紗夜と涼香も知ってるぞ〜バレバレじゃないっすか。俺って隠し事出来ないのね……」

「私達は一刀様の夢に共感し、一刀様の事が好きだから貴方の為に命を張るんです。だから、もっと私達を頼ってくれてもいいんですよ？」

「そうだな。私達は一刀と一緒に戦い、一緒に生きる。そう決めたんだからな」

「そうです。だから御館様はもっともっと私達に頼って下さい。じゃないと、私達も悲しかったりするんですよ？」

確かに、俺はちよつと抱え込みすぎてたのかな……華琳にも他の人に頼るって事を教えて貰ってたはずなんだけどなあ……強くなつて、弱かった頃の事を忘れてたみたいだ。

「うん……わかったよ。こんな俺だけど、紗夜と涼香と一緒に、

これからも支えてくれるかい？」

「この身は既に一刀の物だ。言われなくても、拒否されても私はお前を守る」

「同じく私も全身全霊をかけて一刀様にお仕えいたします」

「御館様に言われなくても、私は私のするべきことをするだけです。必ず、御館様をこの大陸の覇者にして見せます」

三人の覚悟を受け、俺も気持ち新たにする。

「よし、それじゃあ陣まで競争だ！！負けた人は今日の寝ずの番ね！！」

「な！」

そう言っただけ俺は愛馬である飛燕を走らせる。

「御館様、待って下さい！！！！」

「一刀、抜け駆けなど卑怯だぞ！！」

「む、寝ずの番は嫌なので私も行くのです」

文句を言いながらも三人とも俺の後ろについて来てくれる。

じいちゃん、俺さ、また守る者が増えたよ。けど、その事は後悔してないんだ。だって俺の事を好きだって言ってくれて、俺と同じ罪を背負ってくれる女の子を守れるんだ。とても幸せなことだよ

……

「絶対、絶対に君たちは俺が守るよ。だから、一緒について来てくれ……」

『は！！』

俺のつぶやいた言葉は風に乗り、後ろの三人にも届く。空には相変わらず太陽が燦々と輝き、俺達を祝福してくれている。

「蒼天は死なない。何せ、俺と俺の仲間達がいるから……」

新たな覚悟を胸に、俺は走り出す。

その後、俺が一番遅く着いてしまい、寝ずの番を務めることになったのは内緒だ。

第十二話 白虎三人衆の想い（後書き）

短くね？って話しは無しでw

三人は一刀をどう思っているのかってお話です。いや、書いてて思ったんですが、一刀って誑しですよ（何をいまさら）

まあ、このお話でも絶賛ハーレム拡大中なんですがねw

次のお話は秋蘭が白虎のみんなに真名を教えます。しかし、一人だけそれを拒む者が……

次回、第十三話 揺れる 〴〵期待下さい^^

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて^^

飛燕流技紹介（前書き）

やっと載せれますw

飛燕流技紹介

飛燕流とは

示現流から派生した流派で、二刀を使う。

攻撃と防御が連動しているため、隙が少なく手数が多い。

本質としては刀身を『氣』で覆い、体を強化するため力、速さともに常人とはかけ離れている。

科学的に解明されていない『氣』を使うため、初代は死者蘇生までも習得していたようだが初代がその方法を封印したため後世には伝わっていない。

飛燕流強ノ巻

身体強化が主の技。初歩の初歩でこの巻を修めなければ攻ノ巻、防ノ巻に進むことはできない。

飛燕流強ノ巻ノ壱 疾風

脚力強化の技。通常字の二倍の脚力を得るが三十分しかもたない。

飛燕流強ノ巻ノ弐 聴技

聴力強化の技。半径2キロ内の音を聞き分けることができるよう

になる。

飛燕流強ノ巻ノ参 豪羅

筋力強化の技。その時その時の『氣』の練り具合によって1・5倍から3倍に強化される。

飛燕流強ノ巻ノ四ノ拾 作中未登場 登場後記載

飛燕流攻ノ巻

攻撃に使われる技で、『氣』を使う。広範囲攻撃から単体攻撃までそろったまさに飛燕流の真髄とされる巻。

飛燕流攻ノ巻ノ壹 夢幻

刀での高速三連撃。

飛燕流攻ノ巻ノ貳 昇り燈籠

刀での高速四連撃。主に追撃に使われる技。

飛燕流攻ノ巻ノ参 雷刃

刀身を覆った『氣』を相手に向かって飛ばす牽制技。

飛燕流攻ノ卷ノ四ノ拾 作中未登場 登場後記載

飛燕流防ノ卷

攻ノ卷と対を成す巻。防御力の強化から単体防御、結界までそろっている。

飛燕流防ノ卷ノ七 懺月

円状の結界。相手の攻撃を吸収する力を持つ。

飛燕流防ノ卷ノ八 新月

懺月と一体になっている技。懺月で吸収した力を二倍にして弾き返す。

飛燕流防ノ卷ノ九 破綻結界

『氣』と剣技が一体となった技で『氣』を纏わせた刀身で相手の攻撃を斬り、威力を抑えてから『氣』による結界を張る技。

飛燕流防ノ卷ノ壱ノ六 作中未登場 登場後記載

飛燕流奥義

一つ一つの奥義が一撃必殺とされており、全奥義を習得すると一人で一国の軍隊とやりあえるとされている。

飛燕流奥義ノ九 毘沙門天

軍神毘沙門天を『氣』で具現化し、自分の攻撃とともに相手を攻撃するという飛燕流単体技の中で一番の破壊力をもう技。しかし、出が遅いためかわされることもしばしば。

飛燕流奥義ノ拾 百花夢幻

飛燕流の最終奥義。『氣』によって作り出した花弁を相手に飛ばし高速で切り刻む技。一人一人花弁に違いがあり、北郷義秀は一刀の花弁である桜を見て「世代を感じる」とした。

飛燕流奥義ノ壱ノ八 作中未登場 登場後記載

我流技

飛燕流の使い手が自ら作り出した技のこと。すべてが一子相伝であり、後世に残ることは少ない。

我流 玄武金剛

北郷義秀が使った技。詳細不明。しかし、百花夢幻と相討ちになったことから同程度の防御力を持つと思われる。

我流 雷帝灰燼撃

北郷一刀の使った技。刀身に纏わせた『氣』を雷に変化させ、敵に向かって飛ばす大量殺戮技。威力が大きく、『氣』の消費量が半端ではないため、滅多に使わないが一刀の使う技の中では間違いなく最強を誇る。

飛燕流技紹介（後書き）

こんなもんですかね。まだこれに載せていない技があったら教えてください。
ください。

それと、これから奥義や我流技が出てきたら記載しますので楽しみにしておいてください^^

お知らせ

作者が風邪をこじらせたため、本日の更新はお休みとさせていただきます。

熱はだいぶ下がったのですが、体がだるく、制作意欲が湧かないため、お休みとさせていただきます。

まずは風邪をしっかりと治してから執筆活動に戻りたいと思いますので、これからもよろしくお願いいたします。

それでは、次回でありそうなことをちょっとだけ。

一刀率いる白虎に秋蘭が連絡役として配属され、白虎の武將に真名を預ける。しかし、一人だけそれを受取らない人物がいて……

彼女の心が一刀は理解してあげられるのか、そして黄巾賊討伐の行方は……！

次回、激・恋姫？無双〜愛しい人よまた逢う日まで〜 第十三話
の想い、黄巾賊との戦い ご期待下さい。

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて

復帰のお知らせとアンケート

作者の風邪が完治しました〜！！ ドンドンパ〜フ〜パ〜フ〜（おいと、言う事で明日からまた更新を続けて行きたいと思っています。長い間ご迷惑をおかけしましたが、また講義中に原案を書き、家に帰ってきてからPCに入れるという生活にもどりますので、一日一話ほどは更新できるかと思えます。

さてさて、次回は の気持ちとお知らせしましたのでそのまま更新します。

その後は幕間として三人衆の誰かの過去について書きたいと思いますが、誰がいいでしょうね？という事でアンケートです。

？ 青彩についての過去話

？ 薫についての過去話

？ 哀についての過去話

この中から選んでいただきたいと思います。この他にも紗夜、涼香の過去話がお読みたいという方は？紗夜、？涼香としてお答えください。

×切りは明日の午前零時までとさせて頂きますので、よろしくお願
いいたします^^

第十三話 哀の想いと三羽鳥（前書き）

遅れて申し訳ありません

第十三話 哀の想いと三羽鳥

俺達が陳留に行つて帰つてきた次の日、秋蘭が配下二万を連れて俺の陣に来てくれた。

「昨日も会つたが、私は夏侯淵。曹操様の下で將軍を務めさせて頂いている。そこで提案だが、私の真名を君達に預けたい」

「……………はい？」
皆ビツクリしてるなあ。

「一刀が信賴できるという事は私も良く知っている。その一刀が認められた者たちだ、信用に足りる人物だろう。それに、これから黄巾賊と命を懸けた戦いを共にするんだ。真名を預けることを私からの白虎に対する信賴の証としたい」

俺も最初聞いた時はびっくりしたんだよね。だつて真名って言うたらこの世界で命の次に大切なものだよ？それを俺の部下とはいえず知らずの他人に教えるなんてさ。

「本当に良いんですか？」

「ああ、構わない。どうだろうか……………私の真名、受け取ってくれるか？」

「……………わかりました……………私の真名は紗夜です……………」

『紗夜！？』

一番最初に紗夜が真名を預けるなんて……………思つてもみなかったよ。……………良いのか？」

ほら、秋蘭もあつけにとられてる。

「はい……………貴方からは一刀様への絶大な信賴が感じられます……………それだけでは……………私が貴方を信用するには足りませんか……………？」

「い、いや……………ありがとう、私の真名は秋蘭だ。これからよろしく頼むよ、紗夜殿」

「……………紗夜で……………いい」

そう言つて俺の後ろに隠れる紗夜。

「まだ知りあつて間もない人だと話しづらい？」

コクコクと首を縦に振つて肯定する紗夜を見て癒される。これで何度目かな……？

「紗夜ちゃんが許したなら私も許します。私は涼香。これからよろしく願いますね、え〜と……」

「秋蘭だ。後ろの三人も、遠慮なく秋蘭と呼んでくれ」

後ろで事の成り行きを見守っていた青彩、哀、薫の三人にも秋蘭は声をかけ、真名を許す。

「私は青彩だ。一刀に危害を加えないのならば、昨日の事は水に流そう」

「私は薫です〜昨日の件はお姉さんの暴走だったようですから〜私は気にしてませんよ〜」

薫、それは嘘でしょ。昨日一番グズグズ言つてたの薫じゃん。

「私は認めません……御館様を襲つたことは曹操殿は違つと言つておられました、私は信じられない……御館様……それでも、真名を教えなければいけませんか……？」

「哀……」

やっぱりか……

今の白虎の将五人の中で、哀が一番俺に対する依存度が高い。俺の身に何か危険が迫つた時や暗殺組織に暗殺されそうになつた時の哀の取り乱しようは見ていられなかつた。

「いや、真名を教えるのは哀が秋蘭を認められた時で良いよ。真名は命の次に大切なものだからね」

「すみません、夏候淵さん。私の中で、まだあの事について整理がついてないんです。だから、今は貴方の真名も呼べないし、私の真名もお教えできません」

「いや、いいさ。法正殿が納得できた時に私の真名を呼んでくれれば良いさ」

「はい……それでは私は部隊の方に行つて来ます」

そう言つて哀は天幕を出て行く。

「やはり、全員華琳様の下に欲しいな。ここまで主君に対して忠誠を尽くす将は滅多にいないぞ」

秋蘭が俺の耳元に話しかけて来る。

「皆俺の事だけじゃなくて色々考えてくれてるんだよ……ちょっと哀と話してくるから、ここは紗夜に任せる。決まった事は後で教えてくれればいいから」

「……お任せ下さい」

紗夜の頼もしい言葉を聞いて哀を探しに行く。部隊の方に行くつて言っただけど、多分あそこにいるんだろうな……

天幕を出て十分ほど森の中に入った所に、小川が流れている。そこは哀と俺が此処に陣を張った時に見つけたサボリ場で、たまに此処で二人揃って川を見ることがあったりする。

案の定哀は此処にいて、岩に座って川を見ていた。

「やっぱりここにいたんだね」

「御館様……」

哀の顔には不安と焦りが見て取れる。

「どうしたんだい、そんな顔してたら、せつかくの可愛い顔が台無しだよ？」

「夏候淵さんの事でちょっと……」

あらま、何時もなら可愛いって言ったら焦ってオロオロするのに……

「真名の事は気にしなくても良いよ。哀が納得した時に預ければ良いし、俺も秋蘭もそれまで待つからさ」

「そうじゃないんです……真名を預けるのが怖いんじゃない、御館様を取られちゃうような気がして怖いんです……」

「え？」

俺を取られるって……どうゆうことだ？

「昨日曹操さんは御館様に私に仕えないかとききました。御館様はそれを断ってただけど、曹操さんのところは白虎よりもしっかりし

た地位もあるし、拠点もある。だから御館様が心変わりして曹操さんの所に行っちゃいそうな気がしたり、夏侯淵さんと楽しそうに話してるのを見ると御館様を夏侯淵さんに取られちゃう気がして……」
「そうか……哀は白虎の実態が見えてる。確かに名声としては段々上がってきてるけど華琳のように朝廷からの官位があったり、拠点となる場所があるわけじゃない。だから俺が華琳の下に行ってしまうわなかったって思ってたんだ。」

「大丈夫だって。俺は何処にも行かないよ。確かに、前の世界で途中でいなくなったりした事はあったけど、今回は違う。俺はこの大陸を統一して、皆で楽しく過ごすんだ。それにさ、俺が結成した白虎だよ？」

「え……？」

「俺が結成した白虎なのに俺がいなくなるなんて無責任でしょ？俺を慕ってくれてる哀や紗夜達皆がいるんだし、俺がここからいなくなるなんてありえないからさ」

「でも……夏侯淵さんに言われたらどうするんですか……天の世界で好きだった人に似てるんですよね……？」

「それならもう昨日断ったよ。嘘だと思っなら秋蘭に確認して貰っても構わないよ」

「……わかりました……けど私は、私の目で夏侯淵さんを見極めたい……そんな私の我儘……御館様は許してくれますか？」

「もちろん。哀が考えた出した答えなら俺がそれを否定することは哀を否定するのと同じだからね。哀の考えを俺は尊重するよ」

「……ありがとうございます……」

目元に涙を浮かべている哀をそっと抱き寄せる。

「な、ななな、何をされるんですか……！」

「哀が泣きそうだったからさ。それとも、俺の胸じゃ泣けない？」

「う……」

うるたえながら泣くってのも難しいよね。

「大丈夫。俺は絶対に哀達の傍にいる。だから心配しないで良い」

「よ」

「う……うわああああ！」

哀は俺の胸に顔を埋めて泣き始める。

数分後

「もう落ち着いたかい？」

「はい……」

哀は落ち着いたようで、ポツリポツリと何故不安だったのかを語ってくれた。

「怖かったです。御館様が私の前からいなくなってしまう事を想像すると、体から力が抜けちゃって……そして今日、夏侯淵さんが私達に真名を預けるって聞いて、御館様が白虎ごと曹操さんの配下になるつもりなんだって思っちゃって……それであんな態度とっちゃいました……すいません……」

「そうだったのか……ごめんな、不信感をあおるようなことしちゃって……けど、俺は曹操の配下になる気は無いから気にしなくて良いよ。秋蘭は命を預ける仲になるんだから真名を預けるんだって言うてでしょ？」

「そう……ですね……」

「北郷様！！北郷様はいらっしゃいますか！北郷様！！」

伝令兵が俺を探してるって事は何かあったみたいだ。

「哀、涙拭いて」

「はい……」

ゴシゴシと袖で涙を拭いた哀の顔は何時もの明るい顔だ。

「よし、戻ろうか」

「は……」

「俺はここだ！何があつた？」

哀の返事を聞いて伝令兵に話しかける。

「北郷様、それが……」

「黄巾賊が三里程行った所に陣張ったんだ」

「青彩……それは本当？」

最近は俺の名も上がってきてるから俺達に戦闘を仕掛けてくるとは思えないんだけど……

「ああ、一刀直属の『影』からの情報だ、間違えないだろう。彼の話ではその近くに街があって、奴らはそこを襲っているらしい」

「まさか……」

そういえば、この近くに凧達と最初に会った街があったっけ……

「よし、そこに行こう。青彩、涼香、哀の三人は部隊の準備。紗夜と薫は兵糧やら武器の準備をするように伝えて。半刻後にその町に集合して。俺は先に行ってるから、秋蘭にも伝えておいて」

「わかった……だが一人で大丈夫か？」

「大丈夫だつて。それじゃあ哀、しっかりね」

「はい！」

三里位なら疾風の方が速いな。

「疾風！！」

脚力を強化して走る。凧達ならまだ戦線を保たせることもできるだろうけど、あれだけの兵がいれば凧達でも危ない。

ただ前を見ながら走る、走る、走る。

「見えた！！」

街が見え、そして街を守っている凧達と街を襲っている賊の姿も同時に見える。

「挨拶代わりだ……貰ってけ」

『氣』を臥龍に集め、周りに花弁を具現化する。

「飛燕流奥義ノ拾、百花夢幻！」

花弁が臥竜を離れ、街にある四方の門を覆う。

「な、なんだ!？」

賊が動揺する隙をついて、俺は街に入る。

「止まれ！」

「ちよ、ちよっと待つなの」

「そ〜やで凧、こんな賊に襲われてる時にやってくるなんて何か意味があると思うぞ？」

そこにいたのは御馴染み魏の三羽鳥、凧、真桜、沙和の三人だ
た。

「君達がこの街を守ってる義勇軍の人？」

「そやで……で、あんさんは？」

「俺は北郷一刀。義勇軍白虎の盟主を務めてる」

「やっぱり天の御使い様だったの〜凧ちゃん、もうちよつとで攻
撃しちゃうところだったの〜」

「うう……申し訳ありません……」

顔を紅くして俯いている凧。変わらないなあ……

「ん、なんやあんさん。うちら見てニヤニヤしとんで？」

「おっと……三人は何も変わってないなって思ってたね……」

「うちらがあんさんに会うのはこれが初めてやと思っんやけど……」

…

「ああ、こつちの話だから気にしないで。それで、君達の名前は
？今呼んでるのは真名だろ？」

「失礼しました！私は楽進と申します、先程は失礼しました！！」

「気にしてないよ」

「沙和は宇禁なの〜」

「うちら李典や」

「楽進、宇禁、李典ね……そろそろ門を守ってる花が消える。俺
は一番守りの薄そうな西門に行くから、他の門は頼んだよ。あと半
刻位で白虎の兵が来るはずだからさ」

『はい（なの〜）（わかったで）』

さ〜て、久しぶりに全力でやらないと無理見たいだな……

「消えろ、百花」

そう呟くと門を守っている百花夢幻が消える。

「さあ、黄巾の賊徒共よ、我が名は北郷一刀。我が首、取れるも
のなら取ってみよ！！」

臥龍と伏龍を正眼に構え、『氣』を練る。

「まずは挨拶だ……飛燕流奥義ノ三、暴虐の獅子！！」

暴虐の獅子、『氣』で獅子を具現化し、共に戦わせる技。

「久しぶりだね、獅子王……今回はちょっとハードだけど、頼めるかい？」

がう！と首を一度縦に振り、獅子王は賊の中に突っ込んでいく。

「俺も行くか……豪羅、紫電！」

紫電によつて臥龍、伏龍に雷を宿し、二刀を鞘に戻す。

「飛燕流攻ノ巻ノ四、嶽風！」

神速の抜刀から放たれる衝撃波が賊を切り裂く。その光景を北門で見ていた凧はこの戦闘の後こう言っていた。

「あれは豪雨が地上の物を洗い流すような一方的な虐殺だった」と。

何回刀を振ったかわからない。けど、何時の間にか獅子王が俺の隣に戻ってきているのを見ると、もう賊は西門付近にはいないようだ。

「獅子王、御苦労さま。もうちょっとあるけど大丈夫？」

首を縦に振って大丈夫だと言ってくれる相棒に頼もしさを感じながら北門に向かう。

「北郷様！西門は？」

「楽進も見てたでしょ？終わったよ」

「やはり……あれは北郷様の仕業でしたか……それに、その獅子は？」

獅子王を見て少し後ろに下がる凧。

「こいつは俺の相棒だよ。それより……」

「はい？」

「皆が来たようだね」

前方を指差すと、白い鎧に身を包んだ白虎、蒼い鎧に身を包んだ曹操軍がこちらに向かっているのが見えた。

「それじゃ、ちよつと北門の賊追い払うから、絶対に俺の前に出たら駄目だよ」

「は、はい！全軍、門の中に入れ！！」

凧の指示の下、義勇軍全員が門の中に入るのを見て、精神を集中する。

「我願うは天下泰平、我進むは修羅の道、我求めるは無双……」
全身に『氣』を巡らせ、力を高める。

「故に我が前を歩く者を許さず……我流技、獅子王爆雷陣！」
獅子王に俺の『氣』を譲渡し、雷を宿す。

すると、獅子王は咆哮を一つ挙げて敵に突っ込む。そして敵の中央に降り立つと俺が譲渡した『氣』を一斉に解放した。

太陽が爆発したんじゃないかと思うほどの光が俺達を包み込む。

「ぐ……目が見えない……」

「な、なんやこれ」

「なにも見えないの」

三者三様の反応を見せてくれる三羽鳥を見て、光が収まった敵の方を見ると、既に立っている者は少なかった。

「後は任せたよ、涼香、青彩、哀」

俺のつぶやいた声が聞こえたのか、三人の牙門旗が賊の掃討に動く。

「よし、後は彼女達に任せて、俺達は此処の復興作業に戻ろうか」

「うし、復興作業ならこの真桜様に任せとけ」

「こら、真桜！」

「真桜ちゃん、待ってなの」

駆けだした真桜の後を追って凧と沙和も駆け出す。

「流石は魏の元氣娘……元氣だなあ……」

「全くだ。それにしても一刀、強くなったな……」

「うお、秋蘭！」

ビックリした

「ふふふ、お疲れ様一刀」

「ありがとう秋蘭。それでもまだまだ、もっと強くなりたい位だよ」

もっと強くないと、他の皆を守れない。

「ふむ……一刀は何でも一人で背負いすぎだな。今の私は華琳様の部下だから全てを打ち明けてはもらえないだろうが、少しくらいなら話をしてくれてもいいんじゃないか？」

「……そうだね、けど大丈夫。俺はまだ強くなれるんじゃないかって話だからさ」

「そうか……まあ、鍛錬する時は呼ぶといい。何時でも付き合っさ」

「じゃあさ、黄巾賊との戦いが終わる前にちょっと付き合ってくれないかな。青彩と秋蘭に頼みたい事があるんだ」

「ほう、さつそく何をするんだ？」

「二人で俺に向かつて矢を打って欲しいんだ。俺は肉体能力ならある程度上げられるけど反射神経や動体視力はやっぱり鍛えないと一般兵程度だからさ」

戦場で一番怖いのは疲れがたまってきた時に集中力が途切れることでも武器が壊れることでもなく遠距離の見えないところから飛んでくる矢なんだとじいちゃんと言っていた。じいちゃん曰く「剣や槍が無くなっても拳を使う事が出来るが遠くから飛んでくる毒矢が一番怖いのじゃ」らしい。

「確かに接近戦が得意な一刀には弓矢は天敵だな。わかった、この街の処理が終わったら青彩殿と共に相手しよう」

「ありがとう。じゃあ、後は頼んだよ。俺は青彩達の所に行つて斥候の話を聞いてくるから」

そう言つて後を秋蘭に任せて青彩達の所に戻る。

「一刀……無事だったか」

「ただいま青彩、皆もお疲れ様」

天幕に戻った俺を白虎のメンバーが総出で迎えてくれる。

「一人で突っ込んで行かれたと聞いた時は肝を冷やしましたが、無事でよかったです」

「ごめんな薰。けどあの状況じゃ俺が行った方がよかつたんだよ」
薰もわかっているのかそれ以上追求してこない。

「私は全然心配してませんでしたよ。一刀様の強さは一番よく知ってますから」

「一番アタフタしてたのが涼香ちゃんじゃないですか？一番落ちていたのは紗夜ちゃんと青彩さんでしょ」

「な、薫さん！」

顔を真っ赤にして涼香が反論する。青彩も頷いているところを見ると涼香が一番心配してくれていたみたいだ。

「一刀様……影からの報告で……黄巾賊の本拠地が判ったと……何時も通りに影が集めてきた情報を俺に教えてくれる紗夜。」

「そう……皆、きつとこれが黄巾賊との最後の戦いになるだろうから、しっかりと休んでね。これは明日から皆にやって貰う事だけど、薫と哀は曹操以外の諸侯の案内を二人に頼む」

「はい、お任せ下さい」

「わかりました」

薫、もうちよつと締まった声出せないのかな？

「口癖なので仕方ないですよ」

「人の心を読むな！！」

ふふふと怪しげな笑みを浮かべて天幕を出て行く薫の後について哀も出て行く。

「涼香は紗夜と共に兵の訓練をお願い。青彩は俺の修行に付き合ってくれ」

「……はい」

「わかりました。それじゃあ紗夜ちゃん、行きましょう」

「……うん」

二人が出て行ったのを見て青彩が俺に話しかけてきた。

「一刀、修業とは何をするんだ？」

「うん、それは明日になってからかな。まずは体を休めてくれ」

「ああ、そうしよう。一刀も疲れてるだろうから早めに休めよ」

そう言い残して天幕を出る青彩を見送り、俺は腰かけていたベツトに横たわる。

「流石に百花夢幻に獅子王爆雷陣、暴虐の獅子を使ったら『氣』が切れかけるか……」

体が鉛のように重いのは『氣』を使用しすぎたからだ。

「あゝもう無理。ちよつと寝させて貰おう……」

そう言って目を閉じるとすぐに心地よい睡魔が俺を襲ってきた。

「……お休み皆」

そう言っただ数秒で俺は意識を手放した。

第十三話 哀の想いと三羽鳥（後書き）

どうもお久しぶりですw

いや、時間開けちゃって申し訳ないです><

とりあえずは予告通りの内容+三羽鳥が登場となっております。

睡魔と闘っているので誤字が多いかもしれませんが、ご忠告お願いします。

それと、アンケートもまだまだ募集中ですので、活動報告にでも感想にでもいいのでどしどしお答えくださいw

それではまた次回、黄巾賊壊滅 でお逢いしましょう。

この作品を読んで頂いている方に無上の感謝を込めて

第十四話 軍議（前書き）

お話を三つに分けます

第十四話 軍議

Side 一刀

「皆良く集まってくれた。俺は義勇軍『白虎』の主を務める北郷一刀だ。これから短い間だろうが黄巾賊の討伐に力を貸してほしい」
黄巾賊本隊討伐の為に集まった諸侯の顔合わせの場で自己紹介をする。

今回集まって来たのは袁術配下として『江東の虎』と呼ばれる孫堅、秋蘭の主である華琳、義勇軍を結成した劉備達、朝廷から派遣されて来た盧植が揃っていた。

「私は陳留の曹操よ。我が軍の足を引っ張らないようにしてね」

「曹操様の軍師、荀？」

桂花……そっけなさすぎ。

「袁術の代理で来た孫堅だ」

「娘の孫策よ」

「軍師の周瑜だ」

あれが孫堅さんか……なかなか強そうだ……

「義勇軍の劉備です、よろしくお願いします」

「その一の家臣、関雲長」

「はわわ……しよ、諸葛亮孔明でしゅ！あう……噛んじゃった……」

無事に義勇軍を作れたみたいだ。俺との道は交わることは無いけど頑張ってほしいと思う。

「わしは盧植じゃ。北郷よ、黄巾賊の本拠を見つけたこと、天帝はとてもお喜びじゃったぞ」

「は、お褒めに預かり恐悦至極ではございますが、この先は黄巾賊を討ち果たしてからにいたしましょう」

「そうじゃの……して北郷、今回の総大将は誰がやるのじゃ？」

「一応は俺が務めさせて頂きます。しかし、俺の作戦が使えないと判断された場合は従わなくても結構です」

「ふむ、それならば北郷に総大将は任せるとするかの。他も異存は無いな？」

「俺は代理だし、決められたことに従うだけだ」

「私も異論は無いわ」

「私もないです」

華琳たちの返事を聞いて話を先に進める。

「黄巾賊はこれより三里ほど先に陣を張っており、総勢は六十万程かと思われます。しかし、兵糧が少なく戦えるものは多く見積もつても二十万が精一杯でしょう。数では負けていますが、質では圧倒していると思います」

少し前までは軍団を率いることのできる将も少しはいたようだけど、今までの戦いでその全てが打ち取られているらしいから、もう黄巾賊に将と呼べる人間は少ない。

「率いる将のいない軍勢などただの烏合の衆。我らが手塩にかけて育て上げた将兵が負けることなど万に一つもありません」

「貴方の言う通り、相手が烏合の衆であることは確かよ。それでも兵力では私達を上回っている。それをどう打開するつもり？」

華琳の目は俺を品定めしているようだ。

「俺が放った斥候からの状況によると奴等は大軍を支えるだけの兵糧がない為に餓えて苦しんでいるようです。ならばその少ない兵糧と武器を減らすというのはどうでしょう」

人間が生きて行く為に必要なのは水、空気、食べ物之三つだ。この中から一つでも無くなると人間だけでなく全ての生物は生命維持が難しくなる。

「成程、案外貴方もえげつない作戦を立てるのね」

「して、どのようにして減らすのじゃ？」

「盧植様なら既にお分かりと思いますが、昼夜の行動は敵の目に発見されやすくなる為、隠密での行動には適しません。そこで日の

沈んだ夜に行動します。それで孫堅殿

「なんだ」

「貴方の配下に周泰殿と甘寧殿はいらっしゃいますでしょうか？」

「な！！」

孫家の三人が驚きの声を上げる。そりや自分の家の家臣の事を義勇軍を率いるだけの男に言われたら驚くよね。

「貴様……何処でそれを……」

孫堅さん、地が出てますよ

「このような時代に他の諸侯の情報を持っていなければ生きてはいけませんからね。それに、貴方も俺の軍に斥候くらい入れているでしょ？それと同じ事です。それで、甘寧殿と周泰殿はいらっしゃるのですか？」

「ああ……二人とも従軍してるよ」

不満そうな孫堅さんと孫策さんを抑えて周喩さんが答えてくれる。

「よかった。お二人がいなかったらどうしようかと思いましたがよ。では、今晚の二人をお貸し願えませんか？」

「はあ！？」

その場にいた全員が同じ声を出す。

「本来なら我が軍だけでやろうと思っていたのですが、お二人がいるのなら話が早い、隠密行動に慣れているであろうお二人にお手伝いいただき、早急に事を進めたいと思います」

「……わかった、二人には話を付ける。で、俺達は何をすればいい」

「そうですね……兵糧などに火が付いた後、孫堅殿には東側から、曹操殿には主力がいると思われる北側から、盧植様には西側から、そして我が白虎と劉備殿の軍は南側から包囲攻撃を仕掛けます。兵が同志討ちをすると危ないので味方の兵であるという証拠を身につけて戦っていただきたいと思いますが、どうでしょう」

華琳が俺の方を凝視している。

「ニコリ」と笑いかけると少し顔を紅くしてふん！とそっぽを向

いてしまう。

「あ、あの、何で私達は北郷さんと一緒なんですか？」

劉備が聞いてくる。

「君達には俺達白虎と違って単体で自分より多い敵に向かって行く力は無い。確かに関羽殿や張飛殿は猛将であり、そこらの賊にやられるほど弱くは無いだろう。しかし、その下で働く兵士はどうだ？」

「あ……」

四星か。

「いくら将が強くても下の兵士が弱ければ負けるのが戦と言う物なんだ。君たちはまだ強くなる。だから今は俺達白虎の戦いを見ていると良い。必ず君たちの成長の手助けとなるはずだからさ」

「……はい……」

しゅん……とする劉備を見て、隣の孔明に話しかける。

「これで納得してもらえたかな？」

「はい、十分です」

「それでは、他に何か質問などはございませんか？俺に対する要望やこの戦に関する事でもかまいません。白虎の中枢に迫る内容ではない限りお答えしましょう」

「ならば私から……北郷一刀、お前は何者だ？」

「始めて会った人をお前と呼ぶのは些か失礼ですよ周喩さん。俺は北郷一刀、ただの天の御使いですよ」

この世界を知っているなんて言ったら反董卓連合前に俺が潰されかねないしね。

「他に質問は無いようなので解散とさせていただきます。夜までじっくりとお待ちください」

解散と言つとまずは孫家御一行が、それから盧植、劉備の順に出て行く。

「あれ、華琳は戻らないのかい？」

「あ、あんた何華琳様の真名呼んでんのよ！」

「桂花、止めなさい。私が許したのだから問題ないでしょう。けど一刀」

「何かな？」

「貴方、何を企んでいるのかしら？」

「やっぱりばれてたか。」

「華琳はさ、張角、張梁、張宝の三人を配下にするつもりでしょ？その手伝いをしようと思ってさ」

「な！！！」

二人が驚きの声を上げる。

「もちろん秋蘭に聞いたわけじゃないよ。華琳ならあの三人の正体にも気づいていると思つたし、彼女達の人を集める効果もわかつてるはずだからね」

「……………」

黙り込んでしまう二人。

「貴方………… やっぱり私の下に来ない？その観察力に行動力、そして上に立つに値する器の大きさ。全てが今まで見てきた男の数倍も優れているわ」

「そう評価してもらるのは嬉しいけど、一つの国に二人の王はいらない。そうでしょ？」

「………… そうね。けど、私は貴方を諦めないわよ？私は欲しいと思つた物全てを手に入れないと気が済まない性格なの」

「そう言つて桂花と一緒に天幕から出て行く。」

「欲しい物は手に入れる………… 知ってるよ、嫌つてくrais」

華琳は欲しいと思つた物全てを手にしてきた。手に入らなかつたのは馬騰だけだった。

「北郷様、孫堅様が御目通りを願いたいと………… どういたしましよ
う」

「通していいよ」

「は！！！」

孫堅さんも来たか。

第十四話 軍議（後書き）

一日遅れてしまいました><

話が長くなってしまったので三話に分けて掲載しようと思っています。

次のお話は孫家との邂逅です。

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて

第十五話 孫家との邂逅（前書き）

遅れて申し訳ありません><

中々モチベーションが上がらず、更新できませんでした><

それでは久しぶりの更新になる第十五話、お楽しみください^^

第十五話 孫家との邂逅

天幕に入って来たのは孫堅、孫策、周喩の三人と甘寧さんと周泰さん。

「ようこそ白虎へ。初めての人もいるから自己紹介と行こうか。」

俺は北郷一刀。白虎総帥にして天の御使いだ。よろしく頼む」

「甘興霸だ」

「周幼平です！」

「孫堅殿、無理な願いを聞いていただき感謝する」

「何、気にするな。しかし、どうして俺の配下に甘寧と周泰がいるってわかっていたんだ？二人ともそれほど表に出ないから諸侯に知られているとは思わなかったんだが……」

「まあ、天の知識、とだけ言っておきましょう。それで、何故孫策さんと周喩さんまでついて来たのですか？」

「その前にさゝその堅苦しい話し方やめない？何時もその口調でしゃべってる訳じゃないんでしょ？」

「おい、雪蓮！」

「ははは、良いんですよ周喩さん。それじゃ、何でついて来たの？」

「うゝん、何か楽しそうだったから」

「私がいないとこのじゃじゃ馬と堅様を止める者がいなくなってしまうのでな」

周喩さん……苦勞してるのね。

「まあ、面白い事なんて無いと思うんだけどね。それじゃあ、今夜の話をするけど、午の上刻にもう一度ここに集まって欲しい。作戦としては俺と甘寧さん、周泰さん、それと俺の部下である『影』の精鋭が侵入して火を付ける。火が上がったと同時に他の全軍が突撃する。こんな作戦で行きたいと思うんだけど、どうかな？」

「お前自ら行くのか？」

「まあね。幸い俺の学んだ流派には気配を消す為の技もあるから、足手纏いにはならないよ」

「しかし……」

一軍を率いる将がいくら夜間とはいえ敵陣のど真ん中に忍び込むのは危険ではないかっていう孫堅さんの懸念も尤もだけど、俺が行くことで成功率が上がるなら行った方がいいと思うんだ。

「もちろん、白虎の将も納得している。孫呉に全部任せても良いけど俺達に参加することによって成功率が上がるのなら俺は喜んで死地に赴くよ」

まあ、死ぬつもりなんて無いけどね。

「それに、この話は孫呉の将来の為にもなると思うよ。諸侯と力を合わせたとはいえ、何もしなかった袁術よりも黄巾賊本隊を壊滅させた孫呉の方を選ぶ。そうだと思わないか？」

「ならばなぜお前達白虎だけでやらないんだ？名声だけならば白虎にも必要だろう？」

「孫堅さん、俺達白虎の噂は知ってるよね？」

「ああ、常勝無敗の五将に『鬼神』北郷一刀。戦えばそこには賊徒の死体が転がり、街を守れば一人も失うことなく戦を切り抜ける……正直眉唾ものだと思っただけだ……」

俺達白虎は今まで黄巾賊と三十二回の戦闘を繰り返して、負傷者三百人、死者二十三人と言った成果を残している。

「名声だけなら既に俺達は高いんだ。それに、戦は六分七分の勝ちで良いんだよ。勝ちすぎると他の諸侯から睨まれる。これからのこの大陸は間違いなく乱れる。そうなったときに俺達を危険とする勢力はなるべく少ない方が良く、恩は売れる時に売れっ言うのが俺の師匠の口癖だね」

敵は少なく味方は多く。戦だけじゃなくて交友関係を気付く為にも必要な事だよな。

「はっはっは、お前は本当に不思議な男だねえ。仮にも『江東の虎』と呼ばれる俺の前だけでなく曹操や盧植の爺さんの前でもそう

やって堂々と話をしている。見たところ家の雪蓮と同じ位の年齢だ
と思うんだがねえ……どうしたらそこまで度胸が付くのか教えて欲
しいくらいだよ」

そう言っつて孫堅さんは少し考え込む。

「よし、決めた！」

「協力してくれるのかい？」

「ああ、協力しよう。それと、お前に俺の真名を預けるよ。俺は
蒼蓮だ」

『はい！？』

俺だけじゃなく孫堅さんと一緒に来ていた将達の声が被る。

「母様が預けるなら私も預ける〜私は雪蓮よ」

おいおいおいおい。

「自分で言うのもなんだけどさ、俺みたいに素性もしれない奴に
真名なんて教えちゃっていいの？」

「お前には預けても大丈夫だつて俺の勘が言ってるんだよ」

勘かよ……

「まあいいや……俺は北郷一刀。真名は無いから好きに呼んでく
れ」

「はあ……主君が預けたの臣下である私達が預けない訳にはいか
ないだろう……私の真名は冥琳だ。今度ゆっくりと天の知識を教え
てくれ」

「わ、私は明命って言います！」

「よろしくね、明命、冥琳」

「……興覇、どうした？」

冥琳が甘寧さんに声をかける

「私にはこいつが噂通りの男には見えません」

あゝ、前の世界でも孫権さんの守り刀だったからこの人は所見じ
や無理だと思っただけだよっぱりか……

「それじゃ、俺と闘ってみるか？相手の心を知るには剣を合わ
せるのが一番だ」

拳で語るって言うしね。

「もとより、そのつもりだ……蒼蓮様、よろしいでしょうか」
ふつ……と溜息をついて苦笑を浮かべる蒼蓮。

「一刀がやりたいと言ってるんだ。俺が許可しないわけにもいかんだろ。俺も一刀の実力が見たかったところだ、やってみろ」

「え〜私もやりたくい」

「雪蓮、私が許すと思うか？」

「ぶ〜ぶ〜冥琳のいけず〜」

雪蓮……君は次の王でしょ……

「ん、決まったみたいだね。それじゃ、外に行こうか」

孫家の方々を連れて、青彩達が訓練をしているだろうところまで行く。

「一刀……そいつらは？」

「ああ、警戒しなくて良いよ。俺の死合い相手だ」

「一刀、字が違わないか……？」

「気にしない気にしない。青彩、孫堅殿達を見物上に案内してあげて。甘寧さん、こっちに来て」

甘寧さんを伴って舞台上上がる。

「ねえねえ凌統、一刀つてどれくらい強いのか？」

「そうだな……私と徐晃、満寵、法正の四人で一齐にかかっても負けるだろうな」

『えー！？』

孫家の皆さんと青彩が呑気な話をしている時の舞台上では……

「準備は良いかい、甘寧」

精神を集中して雑念を排除する。甘寧さんは手を抜いて勝ったとしても俺を認めてくれないだろうから、手の内を見せないようにしながらも本気で行かないとな……

右手に臥龍を、左手を逆手にして伏龍を持ち、右手を正眼に構える。

飛燕流基本ノ型ノ式、震天の構え。全ての攻撃を受け流し、放た

れる攻撃は天をも震わすといわれた基本の構え。

首を縦に振るだけで肯定を示して来る甘寧を見据える。

「本気で来い……あるいはその刃この俺に届くやもしれん」

無言で俺を観察している。少しの沈黙の後、先に動いたのは……

「……っし！」

甘寧だ。

「ほう、速いな……」

俺の後ろに素早く回り込み、曲刀を一閃してくる。

その攻撃を体を少しずらして避け、下段蹴りを放つが、あっさりとかわされて逆に足払いからの上段蹴りを放ってくる。

それをギリギリでかわして距離を取る。

「うゝむ……もう少しやると思ったんだが……一刀の実力はこんなものなのか？」

「けど一刀、思春の速さに良くついて行ってるよね」

部隊を見渡せる場所で孫家御一行が話しこんでいた。

「……私には北郷の姿しか見えないのだが……」

「冥琳にも一刀の剣は見えてるでしょ？思春が攻撃している所に正確に剣を出してるから、まだ一撃も一刀には入ってないわよ」

しかも一刀は最初に立っていた場所から一歩も動いていない。

北郷一刀か……中々楽しそうじゃない……

「雪蓮、次で決めるみたいだぞ」

戦闘が行われている場所では一刀が剣を一本、鞘に納めて正眼に構えていた。

右から来た剣閃を伏龍で受け止めて押し返して右手の臥龍を喉元に突き付ける。

「はい、これで四回目……どうする、まだやるのかな？」

「く……貴様、何故そこまでの武を持ちながら自ら攻撃しない！」

甘寧さんの強さを測ってました……なんて言ったら絶対機嫌悪くするよな……

「特に意味は無いさ。けど、そろそろ終わりにしようか。次の一撃、俺は最高の一撃を放つから、その技を甘寧さんが受け切れたら甘寧さんの勝ち……どうかな？」

「良いだろう、その言葉……後悔させてやる……」

甘寧さんは曲刀を構えなおして防御の体勢をとる。

「気をしっかりと持つんだよ。じゃないと、本当に死んじゃうからね」

『な！』

孫家御一行から驚愕の声が聞こえる。

「そうか……まだ死ぬ訳にはいかないからな……」

甘寧さんの全身に気力が漲っているのを見て臥龍、伏龍を納刀して正宗を鞘から抜いて正眼に構えなおす。

「そう、それで良い……行くよ」

「来い、北郷！」

この技を使うのも久しぶりだな……

「飛燕流禁術、天龍飛翔！」

丹田に集めた『氣』の性質を変化させ、体に天をかける龍を纏う。

『主よ……長らく我を使わなかったな……』

天龍飛翔で纏った龍には人格がある。こいつの名は龍迅。じいちゃんから最後に教わった技がこの技で、習得するために態々中国まで行ったからな。

『ごめん、龍迅。今回は全力だと絶対殺しちゃうから二割位で打ってあげて』

『久々に出しておきながら全力を出すなと言うか。全く、注文の多い主だ』

『そう言っつなよ。甘寧さん殺しちゃったら孫家の皆さまに恨まれるしさ。お前が全力を出せる所は必ず作るからさ』

『承知した』

「この圧力……ただの脅しではなさそうだ……」

「もちろん、『氣』で出来ているけどこれは紛れもない本物の龍

だ。さあ、甘興覇よ、一世一代の大勝負といこうか！」

現れた龍迅を見て少し呆けていた甘寧さんが現実の世界に帰ってくるのを見て仕上げに入る。

「天龍飛翔ノ変化、天龍剛雷！」

龍迅の口から雷が発生し、刃となって甘寧さんに襲い掛かる。

「ぐ……はあああー！」

一瞬甘寧さんの『氣』を刃が拮抗して弾ける。

辺りを目を焼くような閃光が包み、皆が目を手や着物で覆う。

その光が収まり、皆が試合をしていた場所を見ると……

「全く、何でやりすぎるかなあ……」

ボロボロになった甘寧を抱え、龍迅に文句を言う一刀の姿が見えた。

『思春ー！』

蒼蓮さん達がこつちにやってくる。同時に青彩や訓練をしていた白虎の兵士もこちらに向かって来ていた。

「一刀……その龍は……？」

青彩が恐る恐ると言った感じで聞いてくる。

「ああ、こいつは龍迅。俺が昔いた所で契約を結んだ俺の従者つてところかな。俺の仲間には一切危害は加えないと思うよ。まあ、攻撃しかけられたら反撃はするだろけど」

『主の言った通り、俺からは攻撃はせん。だが、俺や主に攻撃を仕掛けた時は容赦なく攻撃するから覚えておけ……』

そう言って消えてしまう龍迅。

『龍がしゃべった……』

そこかよ……

「そう言えば甘寧さん、怪我は無いかな？一応加減はしたんだけど……」

そう言って甘寧さんを見ると既に立ち直ったのか自分の足で立っていた。

「ああ、服は修繕が必要だが何故か体に怪我は無い。むしろ活力

がみなぎっている感じだ」

「体の調子が……ああ、それは俺の『氣』が甘寧さんの体に馴染みやすいからだと思うよ」

「……どういう事だ？」

「簡単に説明すると、俺の『氣』を甘寧さんが取り込んだんだよ。極稀に他人の『氣』と自分の体が合う人がいるんだ。甘寧さんの体と俺の『氣』は相性がいいって事だね」

「／／／／／／」

甘寧さんが顔を紅くしている。

「あれ、どうかしたの？」

「い、いや、何でもない！そんな事より、先程の無礼を詫びたい。ここまでの力の差を見せつけられるとは思ってもいなかった。詫びの印として真名を預けたい、受け取ってくれるか？」

「もちろん。俺は北郷一刀、北郷でも一刀でも好きに呼んで」

「私の真名は思春だ」

そう言って蒼蓮さん達の方に歩いて行く思春さん。

「しかし一刀、お前強いな。お前みたいなのが俺達の下に来てくれると楽になるんだ……」

「ごめん、それは出来ないんだ。けど、忠告だけは出来る。劉表と袁術には気をつけて」

「……お前……」

呆気にとられている蒼蓮さん。

「それじゃあ、今夜は頼んだよ。青彩、送って行ってあげて」

「わかった」

青彩が蒼蓮さん達を送って行くのを見ながら、俺は正宗を見る。

「最後の一撃、二割位だったけどあれを取り込んだんじゃないのか……俺もまだまだ修行が足りないな……」

禁術を吸収されるとな前代未聞だ。

「これは……これが終わったら修行やり直すか」

そう決意して天幕に戻る。

始めた頃は空の真ん中で光り輝いていた太陽も、少しずつ傾いて空を茜色に染めている。

「さて、夜の奇襲に向けて寝るとしますか」
そう言って天幕に入りベットに身を委ねる。
目を閉じて数秒で俺の意識は睡魔に刈り取られた。

第十五話 孫家との邂逅（後書き）

およそ一週間半ぶりの更新と相成った第十五話、いかがだったでしょうか。

中々にモチベーションが上がらずに話が進まず、書いた内容は支離滅裂と言った状況に陥り、執筆が出来ませんでした。

しかし、ご安心ください。既に第十九話までの話は一応できておりますので、後は推敲して載せるだけです！^^

この作品を楽しみにして下さっている方々の応援を受けて、必ず完結させますのでこれからもどうぞよろしくお願いいたします。

次回の更新は今週の日曜日から月曜日の間を予定しています。

この作品を読んでくれている人に無上の感謝を込めて

閑話その壱 劉備軍の白虎考察（前書き）

どうも、約壹ヶ月放置してしまいました><

しかも短いという・・・><

申し訳ありませんでした><

閑話その壱 劉備軍の白虎考察

一方、劉備軍では集まった群勇についての話をしていた。

「北郷さん、初めて会った時とは比べ物にならない位大きな軍団を率いてたね……」

「はい……私と同じ義勇軍ですが、私達とは全くもって格が違ってきます」

悔しい気持ちはもちろんある。しかし、私達は北郷さん達とは違う。

「あ……桃香様、白虎の人達の情報ですが……」

「あ、手に入った、雛里ちゃん、朱里ちゃん？」

劉備軍が誇る二大軍師の朱里（諸葛亮）と雛里（ホウ統）を見せる。

「それがですね……白虎に放った斥候さんは誰一人として戻ってこないんです……ですので、とりあえず知りえた情報だけをお話ししようと思ってるのですが、よろしいでしょうか？」

「うん、雛里ちゃん、朱里ちゃん、お願い出来るかな？」

「は、はい。え〜とですね、白虎の将は全部で北郷一刀さん、徐晃さん、司馬懿さん、法正さん、凌統さん、満寵さんの六人です」
手元にあつた紙をちらりと見てまた話し始める雛里。

「総大将が言わずと知れた北郷一刀さん。『天の御使い』という名声だけでなく、その勇猛な戦ぶりから『白銀の剣閃』や『三刀の鬼』と呼ばれています」

「大將軍は徐晃さん。白虎結成当初から北郷さんと行動を共にしており、将兵からの信頼も厚い白虎の将の主柱です」

変わって朱里が紙を見ながらもはつきりと言い切る。

「軍師筆頭は司馬懿さん。彼女も白虎結成時からいるようですが、詳細は明らかになってはいません。これは私の推測ですが白虎の中で司馬懿さんは何か特別な物を司っているのではないかと」

ただ単に司馬懿は人前に入るのが苦手なので基本徐晃や一刀にくつついているだけなのだが、なにぶん情報が無い為に朱里や雛里は勘違いをしている。

「軍師二人目は法正さん。この人は合戦はあまり得意ではないようですが、内政面、特に兵糧等合戦に必要なものを集める能力が高いだろうと思われませう」

「兵糧管理か……私達の所にも欲しいねその人」

この発言は雛里と朱里が使えないと言っているのでは毛頭なく、曹魏や孫呉、白虎と言った他の諸侯には軍師を務められる将が三人いるのに対して劉備軍には軍師は一人しかいない。当然二人にかかる負担も増える為、その負担を減らす為にももう一人軍師が必要なのだ。

「桃香様、他の人にも言える事ですが白虎の将は北郷さんに絶対の忠誠を誓っており、引き抜くのは無理じゃないかと思えます」

雛里の説明で足りないところを朱里がカバーする。長年一緒にいただけあって意思の疎通がよく出来ている。

「軍師兼武官として満龍さん。司馬懿さんが不在の時は筆頭軍師としても白虎の指揮を執る事もあるようで、自ら先頭に立つ為堀にも信頼されているとのこと」

「最後に右將軍の凌統さん。一番最後に加入した新参ですが北郷さんが全幅の信頼を置いていて司馬懿さんや徐晃さん達子さんの人との仲も良いようです」

「最近まで色々なくにを周っていた様で、他の武将の人達より正確な情報が入ってきています」

「えっと……武器は三節棍と弓です。弓の腕前は荊州の黄忠さん、曹魏の夏侯淵さん、孫呉の黄蓋さんと並ぶほどの実力と称され、三節棍の腕前もかなり物もだとの噂です」

「うわぁ……北郷さんは前線には出ないんだらうけど徐晃さんに満龍さんに凌統さんだけでも相手にしたら大変そうだね……」

「最初にお会いした時の北郷殿は悔しいですが私より数段強いだ

ろつと感じました……味方ならこれほど頼もしい味方はいませんが敵にするとこれほど恐ろしい相手もいないでしょう」

愛紗の発言で一気に暗くなった空気に朱里が止めを刺す。

「それが……白虎の戦闘記録を見ると過去全ての戦闘で先陣は北郷さん自ら勤めています。恐らくですが、大将自らが先陣を切ることで兵たちの指揮を上げているのだと思います」

「……敵に回さないようにしないと（ね）（な）（なのだ）……」

「で、でも、倒した黄巾賊の降兵を旗下に取り込んでいる事や賊に襲われた街等の復興作業を手伝っていることから、話を聞いてくれないという事は無いと思います。幸い、桃香様や愛紗さんとの面識もあるようですし、先程も私達の軍がどんな状況なのかを踏まえ判断をしてくれていたのです……」

落ち込んだ三人を見て朱里が慌ててフォローを入れる。

「そ、そうだね……あの時から考えた私の覚悟を聞いて貰ういい機会だもんね……」

「はい、その為にも早く本隊を叩いてこの乱を治めないとですね」

「よし、北郷さんの足を引っ張らないように頑張ろう！」

『御意（おゝなのだ）！』

閑話その壱 劉備軍の白虎考察（後書き）

いかがだったでしょうか？

次のお話では華琳や春蘭、秋蘭の白虎考察になります。

月曜日からテストなので25日以降にあげられればと思っています。

それでは次回 閑話その弐 曹魏の白虎考察 でお逢いしましょう。

この作品を読んでくれている方々に無上の感謝を込めて^^^

閑話その貳 曹魏の白虎考察

一方、曹魏の天幕

「秋蘭、白虎の將の調略の成果は？」

「残念ながら彼女達は一刀に心酔しており、何度か説得を試みましたが全て失敗に終わりました」

私は生まれて初めて華琳様に嘘をつく。白虎の將の勧誘なんて一度もした事が無い。彼女達の目を見れば一刀の事を信じて絶対に離れないという決意が見て取れた。そんな彼女達が何も知らない華琳様の所に来るとは到底思えなかった。

「そう……司馬懿の觀察眼に智は桂花に並ぶだろうし、徐晃の武は秋蘭と、凌統の武は春蘭に匹敵する。満寵や法正の能力も高く、皆容姿も美しい……関羽と共に私の下で力を發揮して欲しかったのだけど……」

「秋蘭、ならば奴等は華琳様よりあの北郷とか言う奴の方が良いという事か？確かに武はあるが、華琳様ほどの魅力は無いと思うのだが……」

「姉者、姉者が華琳様に忠誠を誓うように、彼女達も一刀に忠誠を誓っているという事だ」

「あら、春蘭がと言う事は秋蘭は私に忠誠を誓ってくれていないのかしら？」

「いえ……華琳様は既にお分かりになられていると思いますが、私は一刀を好いています。今は味方として馬を並べていますが、次に一刀と敵として対峙した時、私が一刀に弓を引けるかと聞かれると……自信はありません」

一刀に弓を向けるなど、訓練の時だけで充分だ。

「私の秋蘭にそこまで言わせるか……貴方は一体一刀の何処に惚れたのかしら？」

「一刀はただ強いだけじゃない。兵や将の事を思いやる事が出来る優しさを持っているのです。それに、戦場では常に先陣を駆ける……その姿と優しさに、私は惹かれたのです」
しかし華琳様……本当は貴方が一番一刀に惚れていらっしやったのですよ……

「まあいいわ。それよりも張三姉妹の確保に全力を尽くしましょう。せつかく一刀がくれた機会なのだからね」

『御意!』

そうだ、私は華琳様の配下。華琳様が私を必要としてくれている間は、全身全霊を賭して華琳様の為に働こう。

この時の私は知らなかった。まさかこの後あんな出来事が待っているだなんて……

閑話その式 曹魏の白虎考察（後書き）

短いですが次回以降に含みを持たせて終了とさせていただきます。

さて、次のお話で黄巾賊編は終了となります。そして次からは原作キャラとのかかわりを多くしていきますので、よろしく願います^^

それではまた次回、黄巾賊壊滅 でお逢いしましょう。

この作品を読んでくれる方々に無上の感謝を込めて^^

第十六話 決着、黄巾賊！ 第二部完結（前書き）

メーリークリスマス！（遅）

今年最後の更新です、それではどうぞ^^

第十六話 決着、黄巾賊！ 第二部完結

その日の夜

「よく来てくれたね明命ちゃん、思春さん」

約束通りの時間に白虎の天幕前に集まってくれた孫呉の二人に労いの言葉をかける。

「はい、この周幼平、一命を賭してこの任務を成功させて見せます！」

「……明命、こんなところで命を落とすようなことはするなよ？」

「わ、わかってますよ思春殿……」

「ははは、それじゃあ行こう。飛燕流強ノ型ノ七、『消』」

『！？』

二人が驚いているのも無理もない。この技は自分の殺気やオーラを『氣』で覆い隠す技で、ほぼ完璧に気配を消せる。

「さて……闇、いるかい？」

「お傍に」

音もなく目の前に現れたのは俺直属の諜報機関である『影』の隊長である闇。『消』に関しては俺の数段上をいく使い手で、俺でもほとんど気付く事が出来ない時がある。

「天幕の守護は任せるよ。何かあったら君の判断で動いていい。

無いとは思うけど万が一他の黄巾賊に他の軍が襲われるような事があつたら助けてあげて」

「……私は主上に付いて行きたいのですが……主命とあれば仕方ありません。了解いたしました」

そう言つて消えてしまふ闇。

「……今のは……？」

「教えても良いけど、知ってしまったら思春さんと明命ちゃんは一生俺の下にいて貰う事になるけど……それでも良い？」

「……いや、遠慮しておく」

「それが賢明だね……もし話したら、次に会った時に二人の命を取らないといけなくなる。そうならない事を祈るよ」

基本的に影の情報は他国には入ってないはずだ。秘密厳守と人命守護の為にも二人には黙っていて貰わないと。

「それじゃあ今回の作戦を説明するね。まず思春さんと明命ちゃん二人で食糧が置いてあるだろうところを探して、見つけ次第火を放ってくれ。その間俺が敵の注意をひきつけるからさ」

いくら消で気配を消しているとはいえ、元々隠密行動に適していない俺だ。下手に動いて敵に見つかってしまったら大問題だ。

「……わかった。健闘を祈る」

「気を付けて下さいね」

そう言い残して二人はいなくなる。

「ま、見つけた所で腹ペコな一般兵程度じゃ俺を倒せるとは思わないけどね」

黄巾賊が陣を張っている所から五十メートルくらい離れた所で櫓の上にいる見張りに弓を放つ。

「ぐっ……」

「お、おいどうし……がっ」

俺の放った矢は見事に見張りの喉を射抜く。

「さて、作戦開始だ」

一気に陣の中に入り、張三姉妹のいるだろう場所を探す。

「うーん……流石に人が多いだけあってそう簡単には見つけれないか」

探し始めて十分位経っただろうか、それらしい天幕を見つけられないで焦っている……

「おい、そこで何してんだ？」

黄巾賊の人に見つかってしまった。

「あ、ああ……先程敵軍の様子を見てきたんだが怪しい所があったから報告しようと思ってな」

「そうか……張角様達の天幕はあっちだぞ」

「そうだったか、感謝する」

俺の答えに満足したのかダンディーなおじさんは何処かに行ってしまう。

「ふう、天和を張角様って言ってるって事は軍部の人なのかな？
そんな事を考えながらも教えて貰った方に歩きだす俺。
すると……」

「ひ、火が出たぞ〜！」

思春さんと明命ちゃん火を付けることに成功したらしい。

「それじゃ、俺も自陣に戻りますかね」

気配を消して自陣に戻ると、青彩達が出迎えてくれた。

「お帰り一刀。私達は何をすればいい？」

「いつも通り、敵陣を穿つ。皆、俺に付いて来い！」

『おおおおお！！』

愛馬となった伯帝と共に敵陣に突っ込む。混乱しているからか、
敵の抵抗が全く無い。

「逃げる者は追うな、向かってくる者だけに対応しろ！勝敗の決
した戦で無意味に命を奪う必要は無い！」

俺の命令通りに動いてくれる兵達がとても頼もしい。

「主上、曹操殿が張三姉妹を捕縛したようです」

「わかった。闇は何時もの任務に戻っていいよ」

「は！」

やっぱり華琳が天和達を捕まえたみたいだな。

「皆の者聞け！黄巾賊首領である張三姉妹は曹操軍が討ち取った
！これ以上の争いは無意味だ、降伏せよ、天の御使いの名において
お前達の身の安全は保障する！しかしここで降伏しようとする者
は天意に抗う愚か者としてこの俺自らあの世へと送ってくれる！」
降伏してくれ……この戦いでこれ以上被害を出すのは心が痛い。

カラン、カラン

誰かが武器を落とす音がすると、それに続いて一斉に武器を落と

す元黄巾賊の兵士達。

「それで良い……これから君達は天の御使い北郷一刀が率いる白虎の一員だ。皆、俺と共に来い!!」

『おおおおおおおおお!!』

「良かった。これで戦力の補強にもなるし無意味に命を取らなくて済む」

「そうですね、今は賊とはいえ元を辿れば彼等も餓えに苦しんでいた民ですからね」

「薫、何でこんな所にいるんだ……」

「それはですね」

「一刀様の……無事な姿を見たかったからですよ……」

「ちよつと紗夜ちゃん!？」

「紗夜まで……」

薫はまだ戦えるから良いけど紗夜は戦えないんだから……

「大丈夫……です……涼香ちゃんも一緒ですから……」

そう言っただけで後ろを見ると愛馬烈火に跨った涼香が天幕で出会ったダンディーなおっさんを連れて来ていた。

「涼香、その人は？」

「はい、私が戦っていた部隊の将で、一刀様に会いたいと……」

「そうか。おっさん、また会ったね」

「お、おま……いや、貴方が天の御使い様でしたか」

おっさんは少しびびくりした顔をしているがすぐに平静を取り戻したように見えた。

「それで、俺に何か用？降伏するっていうなら大歓迎だけど」

「貴方は……これだけの元黄巾賊の兵を配下にして諸侯から何も思われないと思いか？」

「何だ、そんな事か。他の諸侯がどう思うかなんて気にしないさ。俺はただ『白虎』って所に籍を置く人達が俺を信じてくれればいい。それにおっさん、俺達白虎は天道を行くって決めたんだ、些細なことまで倒れるようなやわな軍じゃないんだぜ？」

何時の間にか俺の周りに集まったた青彩や哀も涼香や紗夜達と笑みを浮かべている。

「おっさんもさ、俺を信じて着いて来てみない？彼女と闘えるんだ、俺達の元でも結構やっていけると思うよ」

「……」

おっさんは黙って瞑目している。

「わかりました、この周倉、全身全霊を持つてお仕えいたします」

「ありがとう。俺は北郷一刀、真名は無いから一刀で良いよ」

「は、我が真名は刃です」

「私は凌統、真名は青彩だ。よろしく頼むぞ刃殿」

「私は徐晃、真名は涼香です。次は決着をつけましょうね！」

「私は満龍ですよ、真名は薫です」

「法正です、真名は哀」

「……司馬懿……真名は紗夜……」

紗夜は何時も通りさつさと話して俺の後ろに隠れてしまう。

「……あの……紗夜殿……？」

「大丈夫だつて、紗夜は人見知りか激しいだけだから、刃のおっさんを嫌いになった訳じゃないよ」

皆最初は紗夜に嫌われたと思うみたいね。

「あ、刃のおっさんは元黄巾賊の兵を纏めて率いて貰うから、そこところよろしく。さあ皆、天幕に戻ろう」

『は！』

兵と仲間の武将達の声を聞いて空を見上げる。

見わたす限り漆黒に包まれた空に、一つの流れ星が落ちる。

どうか、これからも白虎の皆と華琳や春蘭、秋蘭が無事でいられますように……

そう星に願いを込めて、俺は先に帰り始めた皆の後を追った。

こうして中原を騒がした黄巾賊の乱は幕を閉じた。

本隊殲滅の功を認められ、北郷一刀率いる白虎は諷陵と言う土地

の太守に任命され、劉備や孫堅、曹操と言った諸侯にもそれなりの褒美が与えられた。

そしてここから、外史の管理者によって定められた結末を変える為にもう一度外史に降り立った北郷一刀の中原統一を目指す長く険しい道のりが始まった……

第十六話 決着、黄巾賊！ 第二部完結（後書き）

はい、やっと黄巾賊編が終わりましたw

いや、長かった。作者がサボってたからだろって？はい、その通りです申し訳ありません><

韓当「お前は飽きっぽいからな、よくもまあ人様に公開しようとなんて思ったよな」

作者「な、お前は韓義公！何しに来た！」

韓当「いや、作中に俺の出番が無いからよ、後書きを乗っ取りに来た」

作者「な……貴様、作者が引きこもりだからってそう簡単に勝てると思うなよ……」

韓当「まあ冗談だ冗談。色々と内政やら何やらで忙しい北郷君の代わりにこの作品を読んでくれる人達に挨拶しに来たんだよ」

作者「なんだ、そゆゑ事なら先に言えよw」

韓当「ホツとしている作者は放っておいてだな、この駄目作者の駄作がここまで続いているのも、のろのろと遅い更新を待ってくれている神のような読者の方々のおかげだと思っっている。これから作者ともども俺も北郷も頑張っていくので、応援よろしく頼む」

作者「ひどい言われようだなおい。まあ確かに全部本当の事だから

何も言い返せないが……」

韓当「そうだろうなwさて、時間も少なくなってきたところだ、さつさとしめるぞ」

作者「そうだな……では次のお話は一週間以内には投稿したいなあとか思ってます。第三章では反董卓連合に向けて色々と準備していきますので楽しみに^^」

作・韓「それではまた次のお話でお目にかかりましょう。この作品を読んで下さっている読者の方々に無上の感謝を込めて」

良いお年を!!

第十七話 諷陵での政治 第三部『諷陵内政編+洛陽編』開始(前書き)

あけましておめでとうございませう！

昨日に引き続き更新させていただきます^^

第十七話 諷陵での政治 第三部『諷陵内政編＋洛陽編』開始

第三章 諷陵内政編＋洛陽編

益州郡諷陵に俺達白虎が着任してから早くも三ヶ月が経過した。到着した時に始めた政策もそろそろ軌道に乗ってきている。

まず俺達が始めたのは主要街道と交通機関の整備。益州の主要な都市に向かう街道を平らにやらして馬が足を取られないようにした。交通機関はバスと運送業を俺達国が管理して両方に警護の兵士を付け、山賊や盗賊が寄り付かないようにした。街道の整備は紗夜や薫もやらなければいけないと思っていたようで、バスと運送業の話をしたら一発で賛成してくれた。

二つ目は俺直属の諜報機関である『影』の強化。影は義勇軍時代から俺が『消』を教えて鍛え上げた精鋭だけど数が圧倒的に足りなくて、影の主将である闇の負担が凄く大きかった。闇は大丈夫だと言っていたけど、闇が動けなくなったりした時の代わりがないのが確かだから一般兵の中から『氣』を使えそうな人達を集めて俺が直接指導し、消を使えるようになった後、闇や元々影にいたメンバーが指導するシステムを確立した。

三つ目は諷陵の荒れ地開墾と水源の管理。元々少し黄巾賊が多かった諷陵は農村が少し荒れていた。だからこそ元黄巾賊の兵士達に開墾をさせた。そうする事によって諷陵に住む人達に白虎の兵は元賊でもしつかりと今は改心しているのだという事を知らしめることが出来たし、耕作地も二・五倍に増えた。

最後に戸籍作り。どの地域にこれ位の人が生活していて、この地域は人がいないとかがわかれば政策を立てやすい。

三ヶ月しかたっていないがこの政策は全てが完璧とは言えないが軌道に乗ってきていて、俺達は三ヶ月ぶりに一日丸ごと休める日を手に入れた。

「うーん、飛燕流使わない戦い方かあ……青彩達と考えてみるか……」

城の庭で正宗と臥龍、伏龍の手入れをしながら考える。

こちらの世界に来てから妙に『氣』の巡りがよくて飛燕流の奥義を連発してたけど、これが長時間の戦いになって、その間ずっと戦場にいかなければならなくなった時に『氣』空っぽになるってこともあるかもしれないし、飛燕流以外……たとえば北辰一刀流とかを覚えておくのも一手だと思うけど……

「この世界には日本刀の使い手なんていないしなあ……」

「なら俺が教えてやるよ」

「!？」

いきなりかけられた言葉に驚いて声のした方に顔を向けると深紅の外套を身に付けた韓義公が立ってニヤニヤと俺を見ている。

「刹那さん！」

「よう、久しぶりだな。で、なんだか困ってるみたいじゃねえか」

「ええ、飛燕流以外の剣技を覚えておこうかなと思ってたんですけど、この世界には日本刀の剣技を使う人なんていないですし……」

「おいおい、俺の腰にある刀ものが見えないのか？ どう見ても日本刀だろこれ」

そう言われてみると確かに日本刀を腰に差していた。

「まあ俺が使う剣技は少し特殊だけだな……とりあえず北辰一刀流と林崎夢想流は使えるぞ」

「でも、刹那さん忙しいんじゃない？」

「別に問題ないさ。王異達と自由気儘に諸国放浪してるだけだからな、益州に留まる時間が増えるってだけさ」

そう言ってニカリと笑う刹那さん。

「それじゃあ、頼んでも良いですかね？」

「もちろん。んじゃ、早速やるか！」

「はい！」

こうして俺の剣術修行二回目が始まった。

第十七話 諷陵での政治 第三部『諷陵内政編+洛陽編』開始（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか？

今回は短いですが、その分次のお話は長くなる……と思います（長くなればいいなあ……）

そして、ここから作者が考えた『外史の終焉』に向けて一刀君達白虎のメンバーは走りだします。

果たして一刀君たちはどの様な『終焉』を迎えるのか……まだまだ先の事になるとは思いますが、応援してくださいださる方々の感想を見ながら頑張っていきますのでよろしくお願いいたします^^

それでは次回予告をば……

元外史の管理者、韓義公との剣術修行を始めた一刀。そして韓義公の強さ、信念に触れ、一刀はさらなる成長を遂げる。

次回、第十八話 成長 ご期待下さい

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて……

第十八話 刹那との修行（前書き）

冬休みと言う事もあって執筆する時間がしつかりととれていますw

え、受験？ナニソレオイシイノ？

と、言うわけで第十八話です。どうぞ！

第十八話 刹那との修行

刹那さんと剣術のけいこを始めてはや一ヶ月、俺は刹那さんの教え方がうまいのか、はたまた俺の覚えが良いのかわからないけど林崎夢想流と北辰一刀流をほぼ完璧にマスターした。

「にしても、いきなり俺と闘いたいなんてな。うちの蝉名でも言わないぞ」

「すみません。けど少し刹那さんの強さを知っておきたくて……」
そう、俺は今白虎の皆が見ている前で刹那さんとの仕合をする事になっていた。

「まあ、俺もそろそろお前に教える事も無くなったし、仕合で教えるかと思つてたところだしな。丁度よかつたよ」

そう言つて腰に差していた日本刀をこの一カ月で初めて抜いた。
「っつ!?!」

刹那さんが抜いた日本刀から、尋常じゃないほどの邪気……とでも言つんだらうか、とにかく半端じゃない圧力を感じる。

「……ああ、そう言えばこいつをお前の前で抜くのは初めてだったか。こいつには名前が無くてな、誰が打つたのかもわからない。けど、この刀には色々な噂があつてな」

「噂?」

「ああ、こいつを持った奴は皆例外なくこの刀のせいで命を落としてるらしい」

「え……」

そんな……村正みたいな刀が本当にあるなんて……

戦国時代に名刀とされていた刀は正宗ともう一本、村正という刀があつた。

その刀は徳川家康が使つたとされているが、それと同時に徳川に仇なす刀として忌避されていたとされる。

理由としては徳川家康の祖父である松平清康、父である松平広忠、

息子である松平信康がこの村正によって命を落としているからだ。

「まるで村正みたいだろ？だからこそ、俺はこいつに村正と名前を付けたんだ。しかもこいつには意識があるみたいでな……最近使ってやってなかったからご機嫌斜めだよ」

何というヤンデレ……

「今お前こいつがヤンデレだと思っただろ」

「何でわかつたんですか!？」

「この話を聞いた時に貂蟬も同じ反応したからな」

貂蟬と一緒に……

「さて、おしゃべりはここまでだ……行こうか、村正」

村正を抜いてその持った手をぶらりと下におろして構える刹那さん。
ん。

「はい……行きます!」

俺も正宗を抜いて正眼に構える。臥龍伏龍は飛燕流を使う為に鍛えられた刀だから片方だけを使うのには適していない。

「……良い眼だ。俺を殺す気がかかってこい……さもなきゃ、お前が死ぬぞ……」

刹那さんが纏う『氣』が一瞬にして変わる。濃密な殺気が俺を襲う。

「っ……はあ!」

正眼からの横薙ぎ。刹那さんは村正で正宗の剣先に少しふれただけで正宗の軌道を変えてしまう。

カン……という音がして正宗が弾かれ、俺の喉元に村正が突き付けられる。

「まずは一回だ」

「くっ……」

一度距離を取り、もう一度正眼に構える。

強い……今まで戦ってきたどんな人よりも格段に

そう思いながらももう一度、次は袈裟斬りに斬りつけてみる。しかしそれも少しだけ刀身に村正が触れるだけで軌道が変えられ、次

は俺の心臓の前に刀が突き付けられている。

「二回目」

少ししか触られてないのに……何で軌道が変えられてるんだ……

…

「考え事か……余裕だな。なら、次はこちらからだ」

そう言っつて突っ込んでくるやいなや、手元の剣が消える。

「な!？」

「北辰一刀流、明車」

神速と呼んでも過言ではない攻撃を何とか正宗で防ぐ。しかし……

「北辰一刀流、二段突き」

俺が防いだとわかるとすぐに空いた小手を指して村正が飛んでくる。

「あつぶな!」

何とか後ろに飛んでかわす。

「そんな避け方じゃ駄目だ……林崎夢想流、月影」

驚異的な瞬発力で一気に差を狭め、抜刀術を仕掛けて来る刹那さん。

「く、林崎夢想流、諸子返し!」

正宗を逆手に持ちかえて抜刀術を仕掛け、何とか弾き返す。

「ほう、これを返すか」

刹那さんが嬉しそうに笑う。嫌な予感しかしない……

「ここまで耐えるのはお前が初めてだよ一刀……これなら俺も本気が出せる」

ほら来た……

「行くぞ……防いで見せろ……」

刹那さんは村正を半分抜き、横に寝かせて構える。

「ちょ、それはやばいって刹那さん!？」

俺の知る限り、あんな構えをとる技は一つしかない。

「聞く耳持たん……林崎夢想流奥義、横雲」

俺の横をすり抜けながら村正を抜き斬りかかって来た所に何とか

正宗をねじ込んで防ぎ、次の攻撃に備える。しかし……

「甘い一刀！新当流奥義、一の太刀！」

「な!？」

もう一度来ると思っていた横雲の攻撃に備えていた俺は予期せぬ攻撃に対応できずに刹那さんの攻撃をもろに受けた。

「これで俺の勝ち……だな」

「……負け……ました……」

俺の喉元には村正が突き付けられていて、正宗を持っていた手にも力が入らない。

「そんな……一刀様が負けるなんて……」

「ふ、当然だな。刹那様が負けるはずがない」

「蝉名……何時からいたんだ？」

「は、紅蓮が何やら用事があるようでしたのでお呼びに参りました」

「そうか。それじゃあ、先に行っていてくれ。俺は一刀に最後の指導をしなきゃいけないしな」

「は、了解しました！」

王双さんがいなくなった後、刹那さんと俺は庭にある大木の元で話をするようになった。

「とりあえずお疲れ様だ。俺とあそこまで戦えたんだ、誇っている。村正も満足したとさ」

刹那さんは村正の峰の部分を愛おしげに撫でる。

「ありがとうございます。おかげでまた強くなれたと思います。けど……」

「ああ、お前の言いたい事はわかってる。俺の戦い方についてだろ？」

「はい」

刹那さんは異質な戦い方をする。最初の方は俺の剣を村正で軌道を変えろという事をしてはいたけど、本気を出してからは俺の牽制の攻撃を避ける事も無く俺に向かって来ていた。

「お前が見抜いた通り俺の剣技は防御をしない。この戦い方になったのには色々理由があるんだよ」

そう言っただけ空を見上げる刹那さん。その目には悲しみが浮かんでるように見える。

「俺が貂蝉達と同じ管理者だったって話はしたよな。俺は管理者になる前はただの人間……お前と同じ日本人だった」

「え……？」

この告白には驚いた。まさか刹那さんが俺と同じ日本人だったなんて。

「まあ日本人と言ってもお前の生きていた平成の時代に生きた人間じゃない。俺は戦国時代を生きたただの剣士だった。名前を塚原ト伝……お前も剣術を齧ってるなら少しは聞いた事があるんじゃないか？」

「塚原ト伝って……剣聖って呼ばれたあの……？」

「ああ……でも剣聖なんて二つ名は信綱の方が相応しいさ。俺はただ強いだけの、傲慢な猪武者さ」

「刹那さん……」

「俺が塚原ト伝として生きていた時、本気で愛した女がいたんだ。そいつは俺に剣術しかないと知りながらも俺に付いて来てくれた。俺が足利義輝に剣術を指南した時も、その前に仕事が無くて貧乏だった時も一生懸命に俺を支えてくれた。鹿島新当流があるのもあいつのおかげだっけって言っても良い」

もう一度空を見上げて、刹那さんは溜息をつく。

「けどな、俺はそこまで俺を支えてくれたあいつを守れなかった。その事がずつと死ぬまで俺を縛り付けてな……もう一度やり直したい、やり直したいって思ってた。そこに現れたのが貂蝉や卑弥呼達だ」

私達と一緒に外史を見守らないかしら？

「貂蝉達が持ってきたこの話に俺は飛びついたよ。俺は他の奴らと違って安らかに眠るなんてしちゃいけない。あいつを殺しちゃまっ

た分まで、俺は生きてやらなきゃいけない事がある」

「刹那さん……」

「俺の今の役目はこいつ……村正の嫁さんを探す事だ。村正の真名は最近わかったんだが干将って言ってな。莫耶って剣と雌雄一対になってんだけど、何か離れちまったみたいでな。こいつらをまた夫婦にしてやるのが俺の役目ってわけだ」

そう言って立ちあがった刹那さんの顔は少し悟ったような顔をしていた。

「お前に王双達をガン見するなって言ったのは、王双と夏侯栄、王異達が俺の嫁だったあいつに似てるんだよ。だからだ」

「刹那さん……」

「俺はあいつらに救われた。だから今度は俺があいつらを守る。今度は絶対、死なせたりしない。その為に俺は強くなったんだ」

塚原ト伝の流派は鹿島新当流。最後の一の太刀で刹那さんの正体に気付くべきだった。剣聖が自分の流派に対する誇りを捨ててまでして強くなったんだ。今の俺に勝てるわけがない。

「ああ、そうだ一刀。最後に一つだけ教えてやるよ」

「なんですか？」

「これから乱世になる。けどな、お前は自分の目で見たものだけを信じる。他人の風評に流されるな、自分を貫け。お前なら出来るさ。なんせ剣聖塚原ト伝の最後の愛弟子なんだからな」

グシャグシャと俺の頭をなでて出て行く刹那さんの背中はとても頼もしくて、あんな男になりたいと、そう思わせてくれた。

「刹那さん……いや、師匠。ありがとうございました！」

その背中に向けて、俺は大声で礼を叫んだ。

第十八話 刹那との修行（後書き）

はい、いかがだったでしょうか？

冬休みだというのに家にこもりネットゲをやり小説を書き……受験勉強はどうしたって感じですよねw

まあ、判定でA判定出てるので問題ないのですがw

さて、今回は刹那さんとの手合わせとなっています。前回のお話の感想で韓義公からチート臭がと言われたのですが、はっきり言って刹那は武芸に関してはマジチートですw

しかしこんな刹那さんでも色々悩みがあるんだよって言うお話でしたw

さて、次回はある原作キャラに接触します。その人達と出会い、一刀君たちは何を思うのか。

それでは次回、第十九話でお会いしましょう。

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて。

第十九話 定例会議（前書き）

短いです、しかも内政のお話なので読み飛ばしていただいてもかまいませんw

第十九話 定例会議

「さて、そろそろ諷陵に着任して半年経つんだけど、城下、領内の様子はどうか？」

諷陵城謁見の間に白虎の将が集まり、定例の定期報告会が開かれていた。

「はい……まずは交通機関、運送業の整備ですが……七、八割は終了しています……この短期間でここまで完了するとは……嬉しい誤算です……」

俺の隣……つまり筆頭軍師の位置に立つ紗夜が交通、流通の要となる二つの政策についての報告を出してくれている。

「え、開墾については、元黄巾賊の方々の頑張りもあって作付面積は以前の二、三倍程にはなったのではないかと思います」

次に次席軍師を務める薫が開墾についての報告を。

「商業についてですが、この地域の善政が伝わったのか商人の人も多くなってきて、かなりの賑わいを見せています。ですが人が多くなってくるにつれて軽犯罪……特に窃盗が多くなってきています。それに加え、元々諷陵で商売をしてきた方々が上級管理職の役人に賄賂を渡していたことが判明するなど、まだまだ問題が多いです」

内政では一番の実力を持った哀が今の諷陵城下の商業の問題点を指摘してくる。

「ふむ……でも収賄容疑が懸かっていた役人は割り出して粛清したから、後は桂犯罪の撲滅だね。これについては紗夜と哀に任せよう。次に軍事面だけど、涼香、初期から従ってくれている人達と刃のおっさんの軍は連携取れるようになったかな？」

「はい、この数カ月で何とかものになりました。後は指揮系統の伝達をいかに速くするかです」

「それと、最近仕官してきた兵士の訓練もほぼ終わったぞ。後は賊の討伐や模擬戦をして実戦経験を積みさせる事だな。私や涼香を大

将として模擬戦しても良いんだが、そうになると他の仕事が滞ってしまっしな……」

「まあ俺達も他の仕事があったりするから毎回相手をしてあげる訳にもいかないしね」

なるべく付いていてあげたいが俺も諷陵太守になった訳で、仕事をしない訳にはいかない。

「え」と、騎兵と歩兵に関しては練度は義勇軍時代よりはるかに高くなっており、他の諸侯と比べてもかなりの高さになっていると思います。弓兵については青彩さんが受け持ってくれたので問題は無いかと。隠密については……」

「それについては問題ない。影についてはもう殆ど目途が立ったから問題ない」

哀が影についての質問をしたかったらさうから先に答える。

「後は……」

「失礼します！」

突然城門を守っていた兵士が謁見の間に現れる。

「軍議中であるぞ！なんだ！」

涼香が大声で兵を叱咤する。

「申し訳ありません！しかし、洛陽の董卓様から使者が参っております……」

「董卓さんからね……いいよ、通して」

「は！」

董卓……反董卓連合では悪人として処罰されたが、洛陽の現状を見ると悪政を行っている証拠は無かった。だからこそ自分の目で見て判断しないとイケない。

董卓軍の使者の話をかいつまんで話すところだ。

新たに諷陵太守になり、精強で名高い白虎の将に一度会ってみたいらしい。

とりあえず断る必要もないから快諾して行くことにした。

そして出発当日、城門前には俺と共に并州に向かう涼香、紗夜、

哀が揃っていた。

「それじゃあ、ここの守備は任せたよ青彩。何かあったら速馬を飛ばしてくれ」

「任せてくれ。それに、何かあったらこの命に代えてもこの街は守りぬいて見せる」

「それは駄目だ。死にそうになったら逃げろ、勝手に死ぬ事は許さない。大丈夫、絶対助けに来るからさ」

「一刀……わかった、何とか生きて守り抜くよ」

青彩と拳を合わせ、薫とも挨拶を交わして俺達は董卓の下に向かう。

第十九話 定例会議（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか？

次こそ詠ちゃんとか恋ちゃんを出したいと思います……

あえて言おう、恋ちゃんは俺のよ……な、なにをする！ぎゃ〜〜！！

刹那 「はあ、何やってんだか……仕方ない。作者退場の為、ここからの後書きはこの俺刹那が務めさせてもらう。お、なんか落ちてるな……何々、今の武将たちの強さを示して下さい？任せとけ、今のところの一刀のステータスと強さをわかりやすく書いてやるから、感謝しろよ」

北郷一刀ステータス

武力120+15 統率力98 知力87 魅力100（女性に限る）

武装 臥龍、伏龍、正宗 補正能力 武力+15

武将の強さ

刹那>>>>一刀||呂布>>関羽、張飛、夏侯惇>馬超、凌統、趙

雲>徐晃、夏侯淵

刹那 「まあ、こんなところか。ちなみに一刀と呂布だが、飛燕流だけだった時は同じくらいだったが今は10回やって6、7回は勝てるくらいにはなっていると思うぞ」

作者 「おお、刹那さんお疲れさんです！」

刹那 「ち、もう復活したのか。言われた通り紹介はしておいた。後は勝手にやれ」

作者 「サンキューです。それではですね、次回予告をしますか。次回はおそらくきつと董卓軍のメンバーが出てくると思います。一週間くらいで投稿できればいいな〜とか思っていたりしなかったり…」

刹那 「お前受験は大丈夫なのか？」

作者 「ふ、この俺に不可能はな」だったら更新速度を上げる」…すいません」

刹那 「さて、こんな駄目作者だが今後とも見守ってくれると嬉しい。それではまた次回で逢おう」

この作品を読んでくれる方々に無上の感謝を込めて。

作者 「俺の出番が……」

第二十話 謁見、そして……（前書き）

珍しくちょっと長いですw

第二十話 謁見、そして……

「にしても……でかい街だなあ……」

董卓軍の居城がある并州へと到着した俺達四人は董卓の人となりを見極める為に城下町を見物していた。

「……街の人達が楽しそう……」

「露店もたくさん並んでますし……とても暴政を布いているようには見えません……」

「旅芸人もたくさん来てるようですし、かなり良い治世をしているのは明らかですね」

紗夜と涼香、それに哀も同じ意見のようで少し安心する。

となると、前回の反董卓連合はあの駄名家の嫌がらせって事か……

あの阿呆、捕まえたからお仕置きしないとなあ……

「一刀様……怖い……」

「何か漏れてますよ、一刀様!!」

「うわあ……」

おっと、感情がむき出しになってたみたいだな。

「三人ともごめんな。お詫びに何か食べる物買ってあげよう」

そう言っただけで近くの露天に行くのと財布とにらめっこをしているアホ毛の立派な飛將軍が立っていた。

「……駄目……?」

「流石に呂布様の頼みでもそれだけは聞けねえな……こつちも商売なんぞでね……」

きつとお金が足りないんだらうな。

「店主、残りはこれで足りるかな?」

そう言っただけでお金を出すと店主を俺を訝しげに見てきた。

「ああ……しかしお前さんは何者だい?呂布様の知り合いにはあんたみたいなのはいなかったはずだが……」

「なに、通りすがりのただの武者だよ。それじゃ、肉まんあと

三つ貰えるかな。連れがお腹空かせてさ」

「ほい毎度」

出来たて熱々の肉まんを持って三人の元に戻ろうとした時に外套をそれはもの凄い力で掴まれた。

「……どうかしたのかな？」

「……」飯の……お礼……」

「別に良いよ。お腹空いてたんでしょ？」

「……うん」

小さく首を縦に振る呂布さん。

「丁度俺も買う所だったしさ、気にしないで良いよ」

「……」

呂布さんは何かをじっと考え込む。

「恋……」

「はい？」

「恋で良い……」

「それ真名だよ？いいの？」

「良い……」

「そつか。それじゃ俺も名乗らないと失礼かな。俺は北郷一刀。

董卓さんから招待を受けてここに来たんだ。俺に真名は無いから一

刀でも北郷でも好きなように呼んで」

「……わかった……」

コクコクと首を縦に振る呂布さん。

その仕草が小動物を見てるようで何とも言えない癒しを提供してくれる。うちの紗夜と良い勝負だな。

「貴様……！恋殿から離れるです……！！」

いきなり来た後ろからの殺気に反応して正宗を抜く。するとそこには宙を飛ぶ小さな女の子がいた。

「ななな、何をするのですか……！！」

「いや、それはこっちのセリフだから。いきなり蹴りかかってくる何てぞ」

「ふん！恋殿を惑わした貴様が悪いのです！」

あゝ、この子が陳宮かな？前の世界で宴会の時に見た気がする。

「惑わしたって……恋が困ってたから助けただけなんだけど……」

「な、貴様恋殿の真名を！」

「……ちんきゅ、駄目」

「れ、恋殿」

「一刀、良い人……それに、恋より強い……」

「恋殿より強い奴なんているわけがないのです！」

そう言いながら俺を睨んでくる陳宮。

「それじゃ恋、明日にでも宮殿に向かうからそう董卓殿に伝えといてくれ」

「……わかった……」

「それと陳宮殿」

明確な殺気を込めて陳宮を睨む。

「な、何なのですか……」

尻すぼみになりながらも最後まで言い切るとは、文官ながらたいした精神力だ。

「初対面の人間に対しいきなり飛び蹴りなど人としてどうかと思うぞ。今回は俺が相手だから良かったが、他の奴等だったら殺されてもおかしくない。良く反省するんだな」

正史では呂布を献身的に支えた陳宮だけど、この陳宮は呂布に依存してるようにしか見えない。素質は良いんだから呂布離れをすればもっと良い将になるだろうに。

「……一刀様……」

「遅いですよ、何かあったんですか？」

「心配しましたあ……御館様なら大丈夫だと思ってはいたんですが……」

「ごめんな。ほら、肉まん」

三人に肉まんを手渡して宿屋に向かう。

流石に四人同室にする訳にはいかないので俺一人と三人の部屋を

取って貰った。

「それじゃ、また明日ね」

『はい、お疲れ様でした』

三人が部屋に消えるのを見てから俺も部屋に入る。

「それにしても恋としようばなから合うとは思わなかったな……」

確か史実では今の董卓軍主力は武官が高順、呂布、張遼、華雄。軍師が賈？、陳宮、李儒ってどこか？」

けど前の反董卓連合の時は華雄、呂布、張遼、陳宮、賈？の旗しか見なかったから、高順、李儒はいないかもしれないな。

考え事をしているうちに外は真っ暗になって眠気が襲ってくる。

「うわ、もうこんな時間か。そろそろ寝るか……」

寝る為に寝台を整えて横になるうとした時、誰かの気配を感じて正宗を手取る。

「誰だ？」

「私です、闇です」

綺麗な声が聞こえて闇が目の前に姿を現した。

「何だ、闇か。どうかしたのかい？」

闇を主将とした影の主力には劉表と劉焉の探りをやって貰っていたはずんだけど……

「劉焉が病を患っているという情報を掴みましたのでご報告にありました」

「……そうか。息子の劉璋は暗愚って話だから攻められる事は無いと思うけど……とりあえず警戒だけはしておいて」

「は、畏まりました」

そう言ってスッと消える闇。

「いつものことながら消えるのホントに巧いよな……」

俺より消を操るのが巧いんじゃないか？

「まあいいか。とりあえずさっさと寝ないと明日起きれなくなりそうだからな。寝るとしますか」

寝台の枕元に臥龍、伏龍を置いて近くの壁に正宗を立掛けて眠る。

明日はいよいよ董卓さんとの対面になる。気合入れて？ いかないとな……

「おはよう三人とも」

朝起きて食堂に行くとき既に三人とも起きて机に座っていた。

「おはようございます一刀様」

「……おはようございますです」

「おはようございます！」

「うん、元気そうで結構。朝ご飯は食べた？」

「いえ、一刀様がいらっしやってから食べようと思ひまして、三人で待っていました」

「そうか。それじゃ一緒に食べよう」

『はい！』

こうして三人で食卓を囲むのはすごい久しぶりだな……

涼香と紗夜は白虎結成前から一緒だし、哀も青彩、薫よりも前、つまり白虎に加入したのは三番目に早い訳で、結成前は良く四人で食卓を囲んだものだ。

「そういえば今日でしたよね、董卓さんの所に行くの」

「そうだよ涼香。特に何も無いとは思うけど、一応武器も持って行くこうか」

「は！」

どうせ謁見する前に預かる〜とか言われるんだらうけどね。

朝飯を食べ終わってしばらくして……正確には午後十二時位の時間、間に城に向かう。

「諷陵太守、北郷一刀です。董卓殿のお招きに応じ参上致しました。後ろは供の徐晃、司馬懿、法正です」

「お待ちしておりました。どうぞこちらへ」

門の前にいた兵士に案内されて謁見の間に向かう俺達四人。

「こちらで董卓様がお待ちです」

「御苦労さま」

扉を開けて入るとそこには昨日会った恋と陳宮がいて、他にも銀

髪の女性、黒髪を腰まで伸ばした女性、そして俺の愛する女性の一人である張遼こと霞が。そして王座には儂げな雰囲気を纏った女性と眼鏡の気が強そうな女性がいた。

「諷陵太守北郷一刀です。このたびはお招きありがとうございます」

「同じく諷陵北郷家上將軍徐公明です」

「……同じく軍師司馬仲達」

「并州太守董仲？です。今回は突然お誘いして申し訳ありません」「いえ、気にしないでください。俺達も董卓殿には会ってみたいと思っていましたから」

「私に？」

董卓さんは可愛らしく首を傾げて俺に聞き返してくる。

「はい。配下に飛將軍呂布、騎馬隊の用兵においては右に出る者がいないといわれる神速の張遼、猛将にして良将と呼ばれる華雄、陷陣營の高順、神算鬼謀の賈？、呂布の名参謀陳宮……これだけ天下に名を馳せた名将、猛将が仕える董卓さんを一目見てみたかったですよ」

それに、これから反董卓連合も起こるだろうし、それについての対策も取っておかないといけない。

「一刀……」

いつの間にか隣に来ていた恋が俺の着物の袖を掴む。

「ん、そうしたんだ恋？」

「やる……」

そう言っただけで方天画戟をどこから取り出して言ってきた。

「ちよい待てや、誰の許可得て恋の真名呼んどんねん」

「許可も何も、昨日恋から教えて貰ったんだけど」

仲間思いの霞がやっぱり俺に突っかけて来る。全く変わっていないようにでなによりだ。

「そうなんか恋？」

「……ほんと……一刀、良い人」

うむ、紗夜と何かキャラが被ってるな……

「そ、そうなんか……すまんかったな」

「別に良いさ。で、貴方は？」

知らないふりをして声をかける。こうして話をするのも久しぶりだ……

「うちか？うちは張遼。よろしゅう頼むわ」

「私は華雄だ」

「賈？文和よ」

「ねねは陳宮なのですよ！」

「高順です。名高き天の御使いに会えるとは、光栄です」

「通り自己紹介が終わってもう一度恋の方を向く。」

「それで恋、何をやるんだい？」

「……一刀強い……恋と闘う……」

「……危険です、ここで一刀様に何かあつたら……」

「でも、一刀様は刹那殿との訓練で私たち全員でかかっても倒せない位強いですし、大丈夫じゃない？」

「御館様……」

「大丈夫だつて。それじゃ恋、やろうか。賈？殿、訓練所は何処かな？」

賈？さんを見るとはあ……と一つ溜息をついて、「こつちよ。付いて来なさい」と歩き出す。その後に董卓さん、華雄さん、霞、高順さん、恋、陳宮の順番で付いて行く。俺達はさらにその後だ。

「こつちよ」

着いた訓練所は十分な広さを持っていた。

「うん、広いな。これなら本気を出せそうだ」

腰の臥龍・伏龍を抜いて刃毀れが無いかチェックをする。

「一刀様……ご武運を」

「一刀様、ちやちやつとやつちやつてくださいね！」

「御無事で戻ってきてください、御館様」

紗夜、涼香、哀が順に声をかけて来てくれる。でも涼香、やつち

やえつて……

「……」

訓練所の中央で方天画戟をぶらりと肩に乗せ、殺気全開で俺を見ている恋の前に臥龍と伏龍を抜いて立つ。

「……恋は呂布……」

「北郷飛燕流二十代目当主北郷一刀」

『いざ……参る……!』

こうして俺と天下無双の飛將軍呂布との一騎打ちが始まった。

第二十話 謁見、そして……（後書き）

はい、いかがだったでしょうか。

今回のお話は月ちゃんや恋ちゃん、霞に逢うというお話でした。そして、やっと元魏のメンバーである霞に逢えたというのに一刀の心理描写が少くないか？という方はお話がもう少し進めば霞オンリーの話……ゲフンゲフン

さて、次回のお話は恋ちゃんとの一騎打ちのお話です。本物のチートである韓義公に鍛えられた一刀の業は後漢最強の飛將軍呂布に通用するのか！作者の力量不足でうまく書けないかもしれませんが、剣道で覚えた真剣勝負の感覚を読者の皆様に届けられるように一杯努力いたしますので、次のお話をお待ちください。

それでは次回、激突、飛將軍！でお逢いしましょう。

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて

第二十一話 激突！飛將軍！（前書き）

その名の通りです^^

第二十一話 激突！飛將軍！

「はあ！」

「……甘い」

体を沈めて地面から跳ね上がるように伏龍を切り上げる。刹那さんから教わったのは剣技だけじゃない。いかにして相手の体勢を崩すか、どうやって相手の防御を崩すかだった。少し前までの俺の攻撃は単調で緩急が付いていないようで、刹那さんのように剣士の中でも最高位の剣士には通用しなかった。

恋が下からの斬撃を方天画戟で受け止めるまではわかっている。だからこそ俺は左手の臥龍を体を右回りに回転させながら横薙ぎに振るう。

我流、横車。飛燕流と刹那さんの新当流、二つの流派の良い所を合わせた攻撃。一撃の重さは新当流、攻撃の速さは飛燕流。交わる事が無いはずだった二つの流派が合わさって出来た俺の新しい『業』だ。

しかし恋も流石に後漢最強の飛將軍。野生の勘で危機を察知したのか後ろに跳ねてこの横薙ぎの一撃を避ける。

「……やっぱり……強い」

「ふう……流石は恋。まさか掠りもしないとは思わなかったよ」

有効打にはならないかもしれないとは思っていたけどかすらないとは思ってもいなかった。

「今度は……こつちから行く」

そう言って斬りかかってくる恋。

ガギン！ガギン！

「く、流石に一撃が重い！」

臥龍、伏龍をクロスさせて速く重い方天画戟の一撃をどうにか受ける。速さは刹那さんに劣るけど重さだけなら刹那さんと同格……それ以上かもしれない。

「……考え事……良くない」

「な、くはっ!!」

「一刀（御館）様!？」

いきなり方天画戟の軌道が今まで縦だけの攻撃だったのが横薙ぎの攻撃に変わる。それに一瞬反応が遅れて右手の伏龍だけで恋の一撃を受けた俺は端まで吹き飛ばされる。

恋の方天画戟は史実では創作上の武器とされているが、演技では異常な武器だ。この方天画戟一本で斬撃、打撃、刺突と言った攻撃の基本三動作が全て出来てしまう。刀は人を刺すと先端が曲がってしまうったり、横からの圧力に弱いので打撃に使うとすぐに折れたりしてしまいが方天画戟にはそれが無い。恋自身の間離れした筋力や瞬発力、そして戦術的な勘だけではなく、この武器が後漢最強と謳われた飛將軍呂奉先の強さの秘訣だろう。

「つゝ、右手が全然言う事聞かないな……こりゃ二剣での戦闘は無理だな」

臥龍、伏龍を鞘に納めて正宗を抜く。

「行くよ、恋!」

正宗を下段に構えて突撃する。恋は縦に方天画戟を振ってくるが半身だけずらして避ける。

刹那さんは「攻撃つてのはモーションが大きい攻撃ほど避けられるとその後には必ず隙が出来る。だが大振りの攻撃つてのには大抵抗力がこもってるし、それを避け続けるのに必要なのは勇気と気持ちだ。一步を踏み出す勇気と絶対に負けねえって気持ち。この二つが揃わねえと相手の攻撃を避けることはできない。良くて得物で防御するのが精一杯だ。そして受けに回ったが最後、日本刀って脆い武器使ってるお前や俺は武器を壊されて終了だ。そうならない為に、避け方つてのは大切なんだよ」と言っていた。

相手の視線を手元、そして武器の剣先をしつかりとみて、ギリギリまで攻撃を引きつけて半身だけ体をずらして避ける。恋相手にするのは結構精神力を使うけど、刹那さんのあの鬼のような剣閃に比

べればたいしたことは無い。

恋の嵐のような斬撃をかくぐり、恋に密着し、左手で肩を掴んで足を払う。

体勢を崩した恋を追撃しようと正宗を振るうが方天画戟で阻まれ、二人とも最初に始めた時と同じ場所に戻る。

「はあ、はあ、はあ……」

「……一刀……ホントに強い……恋、ここまで強い人……初めて」
淡々と話しているような恋の顔にも疲労の色が見て取れる。たった五分位しか経過してないのに尋常じゃない疲れようだ。

「はあ……恋も、流石に疲れたでしょ」

「……コクリ」

可愛らしく頷く姿はともあの鬼神のような武陣には見えない。ただ今、俺の目の前にいる恋は紛れもない敵。俺も体力の残りが少なくなっているを感じる。

「恋……二人とももう限界みたいだし、次の一撃で決めよう」

「……わかった」

恋はまた最初に構えていたようにブラリと肩に方天画戟を担ぎ、俺を見据えている。

「良いねえ、その目……やっぱり俺はじいちゃんの孫だ。ぞくぞくした感じが止まらないよ……」

正宗を納刀し、鞘を左手に持ち鯉口を切る。

「さあ恋、最後の大勝負だ！」

「……行く」

恋が俺に向かって走ってくる。

まだまだ、まだまだ……堪えろ、北郷一刀！

食らったら即死という恋の一撃。極限まで集中した一刀の目には恋の斬撃がスローモーションに見えた。

そしてその一撃が俺の丁度真上に来た時……

「疾っ！！」

正宗を鞘から抜き放ち恋の方天画戟を弾き飛ばす。そして恋の喉

元に正宗を突き付け、宣言する。

「俺の勝ちだね、恋」

「……ん……」

小さく頷いて倒れ込む恋。やっぱり恋も疲れてたのか。

『一刀（御館）様……！！』

涼香に紗夜、哀が俺の方に駆け寄ってきてくれる。だけど……もう限界……

「って、一刀様！？一刀様ってば！！」

涼香が何か言ってるけどもう今日は無理。明日にして……

俺が最後に見たのは嬉しそうな、けどそれでいて心配そうな大切な家族三人の顔だった。

戦闘結果 呂布VS北郷一刀

勝者 北郷一刀

第二十一話 激突！飛將軍！（後書き）

久しぶりの戦闘描写ですね。前に書いた戦闘描写よりは進歩していると思いたい……

作者は剣道をやっていたんですが、剣道では面で顔が隠れている分目線でどこを攻撃してくるのか……判断することは難しかったのですが、面をつけていない状態なら相手の顔をしっかりと見えますし、判断もしやすいかなあと。

今回は董卓軍の一刀への評価です。楽しみにしててくださいね。

それではまた次回、宴 でお逢いしましょう。

この作品を読んで下さっている方々に無上の感謝を込めて。

第二十二話 激変（前書き）

予告と少し違いますが、さっさと話を進める事にしました。><

短いです。><

第二十二話 激変

「知らない天井だ……」

目が覚めるとそこは知らない天井だった。

「あ、御館様、気が付いたんですね！」

扉を開けて哀が入ってくる。

「ああ、哀か。それで、ここは何処かな？」

「え〜つとですね、ここは董卓さんの居城の一室で、呂布さんとの模擬戦の後、御館様と呂布さんは二人とも倒れてしまっていて、こうしてお部屋をお借りして私と紗夜ちゃん、涼香さんで看病させていたっていました」

ふむふむ、久しぶりに本気で戦ったから疲れたんだろうか？

「そうか……恋は起きてるかい？」

「はい、少し前に目覚められたと陳宮さんが知らせてくれました」
……俺より先に起きるとは……流石としか言いようがない。

「そういえば、紗夜と涼香は？」

「涼香さんは張遼さん、華雄さん、高順さんと一緒に訓練しています。紗夜さんはその付き添いで、涼香さんが興奮しすぎないように見張っています」

「げ、涼香あの三人と仕合するのか……」

嫌な予感しかない。

「張遼と華雄、高順って言ったら多分青彩と同じ位の实力はあると思うし、涼香暴走しなけりゃいいけど……」

涼香は普段大人しいけど自分より強い人との戦いになると興奮しすぎて偶に……いや、良く暴走する。

「だ……大丈夫ですよ、紗夜ちゃんもいますし……多分……」

「多分かよ!？」

こうしちゃいられない、涼香のここに行かないと。

「哀、行くよ」

「はい！」

とりあえず正宗を腰に差して仕合をしてるだろうところに向かう。

「あ、もうやってますね」

「……一刀様」

「心配掛けたね、紗夜」

ふるふる、と首を横に振って俺の腰のあたりに抱きついてくる紗夜。その頭を優しくなでながら今の状況を聞く事にする。

「紗夜、今涼香の状況ってどれくらいかな？」

「一勝一分け……高順さんに勝って華雄さんと分けた……」

「いや、そつちじゃなくて……興奮具合は？」

「……わかりません」

マジかい……

「あ、涼香さんが武器飛ばされた！」

「あ、やっぱり張遼が勝ったか」

訓練場を見ると涼香が訓練用の戦斧を飛ばされる所が見えた。

「あ、やばい！」

その様子を見た高順が勝者霞を告げ、霞が後ろを向いた瞬間、涼香が戦斧を拾って霞に斬りかかるつとす。

「くそ！」

正宗を抜き、瞬時に氣を纏わせてそれを涼香が持っている戦斧の攻撃部分に狙いを定め、振り切る。

「はあ！」

正宗に纏った氣が見事に戦斧に当たり、粉々に吹き飛ばす。

「落ち着け、涼香」

武器を失いながらも霞に向かおうとする涼香を抱きしめて落ち着かせる。

「あ……一刀様……？」

「落ち着いたかい？」

「ま、また私やつちやいましたか……？」

「大丈夫、誰にも被害は無いからさ」

まあ、近くで見えていた陳宮と高順、霞に武器の破片が飛んだ位かな？

「……申し訳ございません……」

「大丈夫だつて。けど、少くくらは制御できるようにならないとな？」

「はい！」

落ち着きを取り戻した涼香は紗夜の方に向かって歩いて行く。

「なあなあ一刀、さっきのどうなってるん？」

「ああ、涼香は自分より格上の相手と闘って興奮すると偶に暴走しちゃうんだよ」

「そうなんか……そや一刀、うちの真名受け取ってくれへんかな？」

「どうしたんだい、いきなり？」

いきなり声かけてきたと思ったら……まあ霞らしいといえらしいんだけどさ。

「一刀強そうには見えへんに恋に勝ったやろ？恋に勝ったつちゆうことはうちよりも数段強いつてことやし、それに一刀が気に入ったんや」

「そうか……それならありがたく受け取るよ」

「おおきに！うちの真名は霞や、これからよろしゆうな、一刀！」

「うん、よろしく霞」

「では、私も預けさせて頂いてもよろしいですか？」

「高順さん……」

「私も霞と殆ど同じ理由です。北郷殿の武には感心しました。私の真名は漣です、後で手合わせ願いたいものです」

「手合わせはちょっと遠慮したいかな……けど真名はありがたく受け取るよ漣さん」

「それなら私たちも真名を預けないといけませんね」

哀と紗夜の後ろで少し気まずそうに涼香もやってきて漣さんと霞と華雄さんと真名の交換をする。華雄さんの真名は同棲以外は生涯

の伴侶と決めた人にしか教えないものみたいで、涼香達は教えて貰ってたけど俺は遠慮しておいた。

「こんな所にいたのね、北郷」

「賈？さん、昨日は迷惑をかけました」

「あれくらいいいわよ、うちの恋にも問題もあつたんだし。そんな事より、あんたたちはさっさと領地に帰った方がいいわよ」

まさか……

「どうして？」

「靈帝が崩御したわ」

『！！』

ついに来たか……

「哀、涼香、紗夜、早急に帰国の準備を。賈？さん、董卓殿にお世話になったとお伝えください」

「わかつたわ。次会う時は戦場かもしれないけどね」

賈？さんの顔には深い悲しみが見て取れる。きつとこれから起きるだろうこともわかってるんだと思う。

「大丈夫ですよ。少なくとも俺達……義勇軍『白虎』は正義の軍だ。義が貴方達にある限り、俺達は貴方達の味方です」

「……そう」

ぶいっとそつぽを向いていなくなってしまう賈？さん。

「ありゃ賈？つちも一刀にやられたな」

「そうですね……まあ、私も今の言葉には少しぐらつきましたが……」

「ん、どういう事だ？」

『は~~~~』

董卓軍のメンバーがヒソヒソと話をしているのを横目に、涼香達三人と、俺の出発準備が整う。

「それじゃあ霞、漣、華雄さん、また逢いましょう」

「おう、元気だな」

「敵としてまみえるならば、容赦はしませんよ」

「次は勝つ、覚えておけ！」

「……またね」

「恋……またね！」

董卓軍のメンバーに別れを告げ、諷陵に馬を全力で走らせる。あの可憐で優しい董卓さんを、あの駄名族に潰させる訳にはいかない。

「皆、死ぬ気で駆ける！」

「は！」

「紗夜はすっかりつかまってるんだよ？」

コクリと紗夜が頷くのを確認して、伯帝を走らせる。

乱世の幕が、今上がった。

第二十二話 激変（後書き）

はい、予告より少し早く更新できました。

次回から本格的な反董卓連合のお話ですので、ご期待下さい。

ちなみに、最近のお気に入りは戦国BASARAの伊達政宗です（関係ない）

それでは次回、出陣 でお逢いしましょう。

この作品を読んで下さっている人たちに無上の感謝を込めて

第二十三話 出陣（前書き）

全国うん十万の九頭龍隼人ファンの皆様、お待たせしました！九頭龍隼人がなろうの世界に帰ってきましたよ！

え、待ってない？すいませんすいません、調子こいてました（土下座）
それでは、前置きはここまでにして第二十三話、お楽しみください
！

第二十三話 出陣

俺達が居城である白帝城に辿り着いた時には既に袁紹からの激文が届いていたようで、正式に『反董卓連合』が結成される事になっていた。

「参加する諸将は……劉備、孫堅、袁術、曹操、公孫瓚、袁紹……他には小勢力が何人かつてところかな？」

「そゝですね……荊州、益州の諸将は様子見って所でしようし、大体その位ですかね？」

「それで紗夜、俺達が参加しなかったとして、董卓軍と連合の兵数はどれ位になるかな？」

「そうですね……私たちが動員できる兵士数は最大で十万程ですが……どちらに着くにせよ……諷陵の守備に兵士を割かなければいけません……最低でも三万は残すとして……七万が限度です……私たちが参加しない連合の兵士数は最低でも三十万にはなると思えます……対する董卓軍はかき集めたとしても二十万が限度です……董卓殿の性格からして……かき集めるといふ事をしないとと思うので……十五万程だと……思います」

「三十万対十五万……二倍の兵力差が付く訳だけど、俺は董卓の味方を……」

「軍議中に失礼ながら、申し上げます！……」

顔見知りの門番が困った顔でやって来た。

「どうかしたかい？」

「は、それが洛陽から踊り子が一人やって来てまして、北郷様にお目通りを願いたいと……」

「わかった、通していいよ」

「は！……」

うゝん、洛陽で踊り子何かと知り合ったっけ……？

「一刀様？どうゆうことですか？」

「いや、知らんし」

「……後で……お仕置き……」

「ちよ！？紗夜、俺全く覚えが無いんだけど！！」

「北郷様、入ります！」

門番に着いて来たのは目を見張るほどの美女だった。何？聞き飽きたって？確かに、皆美女だけど、この人は格が違う。何て言うのかな……華琳や秋蘭、春蘭と言った子達にはない大人の魅力って言うの？それがあるんだよ。艶やかに長く伸びる黒髪、整い過ぎてい
る顔、すらりと伸びている手足、出るとこ出てる体型と言い、今まで見てきた女性の中で最高位に入る美女だ。

「お目通りが叶い、恐悦至極でございます」

「あ、ああ……俺が北郷一刀だ。君は？」

「私は貂蝉。洛陽で踊り子をやっております」

「貂蝉！？」

「は、はい……どうかいたしましたか？」

「いや、何でも無い。ごめんね」

貂蝉と言えばあの筋骨たくましいマッチョの姿しか浮かばないんだが……本当は絶世の美女だったらしいから、こっちが本物の貂蝉なんだろう。

「それで？洛陽に住んでいる君がどうしてこんな田舎まで？」

「それは……天下に名高い天の御使いが率いる義勇軍白虎に、董卓様を助けていただきたくたいからで」

「逆臣とされている董卓殿を助ける……その事が俺達にとって何か得をもたらすのかな？言い方は悪いけど、少し前までの義勇軍白虎なら董卓殿を助けに行く事は簡単に出来た。けど、今の俺達は朝廷から諷陵を預けられている。今の俺達には諷陵に住む民達を守る責任がある。今逆賊とされている董卓殿の味方をすれば諷陵を攻めて来る奴等もでて来るだろうからね」

「……そう……ですか……」

貂蝉を名乗る女性の目に、確かな失望と悲しみが見えた。恐らく

俺達の所に来る前に、沢山の太守の元に行つて、断られていたんだろ。

「でも……」

「え……？」

「貂蝉さん、貴方は良い時に来ましたよ。貴方のお陰で、俺は覚悟を決めることが出来た」

董卓さんを助けてあげたいというのは俺達白虎全員が思っている事だ。なんせ反董卓連合が結成される数日前まで、俺達は董卓さんと一緒にいたのだから。けど、今の世間の風評が『董卓討つべし！』となつている状況の中、何か一つでも俺達が董卓軍に味方する大義名分が必要だった。

「俺達も董卓さんに味方しようと思つてたんですが、何か俺達が参加する決め手になるものが必要だったんだよ。それは民の声だったり、風評だったり、本当にあと一歩だった所に貴方が来てくれた。貴方には民を代表して諸侯の前で演説をして貰う。『董卓さんは圧政などしていない』ってね。そうすれば、少なくとも俺達白虎が重きを置く『民の声の代弁』を理由に董卓さんの味方が出来る」

紗夜達を見ると、全員が頷いている。

「あ……ありがとうございます……」

「気にしないで。俺達の方こそ、きつかけを与えてくれた貂蝉さんに感謝しないと。それじゃあ紗夜、青彩、涼香、哀、薫、明後日には出発したいから、準備を頼む。おっさんは貂蝉さんを客間に案内してあげて」

「は……！」

いよいよだ……華琳や秋蘭、春蘭達と闘う事になるけど、ここで俺が負けたら華琳たちを救えない……これから先、俺に敗北は許されない。

「一刀様……難しい顔……」

「紗夜か……ごめんね、キツイ戦に巻き込んだじゃって」

「大丈夫……今の私達には……頼りになる仲間が……沢山いるか

ら……負けない」

「そうか……うん、そうだったね」

そうだ、今の俺には紗夜達みたいにな、俺を支えてくれる最高の仲間がいる。俺一人の武勇で天下を統一できる訳じゃない。華琳だつて、皆に支えられて天下を取ったんだ。俺はそんな簡単な事も忘れてたみたいだな……

「紗夜、前に頼んだ旗印……出来てるかな？」

「完璧……兵にもあの旗が掲げられた時の意味は……教え込んだ」

……

「ありがとう、紗夜。それじゃあ、行くつか。董卓さんを助けに」

「……はい!!」

第二十三話 出陣（後書き）

短いですが、一応久しぶりの更新です。

何でこんなに時間がかかったかって、この先が思いつかなかったんですよ。反董卓連合の後どうするかで悩んだんです。

まだ決まっていはいないんですが、とりあえずは書きあげた文章から載せて行こうと思って投稿しました。

他の（オリジナル）作品は結構簡単に文が出るんですがねえw

オリジナルの方は公開するかどうか分かりませんが、公開した時は見に来てほしいなあとか思ったりします。

それでは、完結までどれくらいかかるかわかりませんが、必ず完結させますので、これからも応援よろしくお願いいたします。

この作品を読んで下さっている読者の方々に無上の感謝を込めて

お知らせ

お、久しぶりの投稿だな！と思われた方、申し訳ありません！

この作品もそうなのですが、スランプ気味で全く先に進めません。どうかして書いてみても全く自分で納得できるような作品が書けず、書いては消し書いては消しを繰り返しています。

それに、最初の方から読み返していて、これはおかしくないか？とか、設定がおかしいだろ。といった感想を自分で抱いてしまい、これは訂正しなければ駄目だ！と言う事で、スランプ克服のために、オリジナルの小説を書きつつ、推敲していこうと思います。

更新停止とか、そういうことではないので、安心してください。書き始めたからには、最後まで必ず完成させますので、生温かい目で見守ってくれると嬉しいです。

それでは、この作品を読んでくれる方々に無上の感謝を込めて。

九頭龍 隼

人

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5491o/>

激・恋姫無双～愛しい人よまた逢う日まで～

2011年9月27日01時42分発行